

アンデルセンの世界
雪の女王・その他
(後半部)

はじめに

さて、本年の最初は、『アンデルセンの世界』（人魚姫と雪の女王）を予定していましたが、なかなか思うように前に進まず、そこで、とりあえず、「前半部」（マツチ売りの少女、人魚姫、裸の王様）と「後半部」（雪の女王、みにくいアヒルの子）の、「二部」に分けて、そして、今回は、「後半部」（雪の女王、みにくいアヒルの子）について少し考えてみたいと思う。――まず、『雪の女王』という作品は、「七つの話」からできていて、第一話は、鏡とそのかけらのこと、第二話は、男の子と女の子、第三話は、魔法を使うおばあさんの花園、第四話は、王子と王女、第五話は、山賊の小娘、第六話は、ラップ人の女とフィン人の女、第七話は、雪の女王のお城であったことと、その後の話、となり、そして、もう一つは、有名な『みにくいアヒルの子』になります。その場合、これらの作品については、例えば、様々な「絵本やアニメ」などですでに何度か見たり読んだりして、その内容も多くの人たちがよくご存知だろうと思いますが、しかし、アンデルセンの「童話」そのものを直接読むということは意外に少ないのではないのでしょうか。そこで、今回も、前回に引き続き、アンデルセンの「童話」そのものの「本文」をできるだけ丁寧に読み解いたものであり、それゆえ、アンデルセンの『童話』に何らかの「興味や関心」がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

平成三十年九月吉日（改訂版）

如月翔悟

目次

アンデルセンの世界

はじめに

前半部（前回の作品）

一、 マッチ売りの少女

二、 人魚姫

三、 裸の王様（皇帝の新しい着物）

後半部（今回の作品）

四、 雪の女王（七つのお話からできている物語）

五、 みにくいアヒルの子

※ 参考文献

アンデルセンの世界
雪の女王・その他

雪の女王

(七つのお話からできている物語)

目次

雪の女王

(七つのお話からできている物語)

一、第一の話

鏡とそのかけらのこと

二、第二の話

男の子と女の子

三、第三の話

魔法を使うおばあさんの花園

四、第四の話

王子と王女

五、第五の話

山賊の小娘

六、第六の話

ラップ人の女とフィン人の女

七、第七の話

雪の女王のお城であったことと、
その後のお話

* 「参考文献」

一、第一の話

鏡とそのかけらのこと

一、第一の話

鏡とそのかけらのこと

さて、本文の冒頭は、「……さあ、いいですか！ お話をはじめますよ。このお話をおしまいまで聞きますと、わたしたちは今よりも、もっとたくさんのことを知るようになりますよ。それはこういうわけなのです。あるところに、一人の悪い小びとの魔ものがいたのです。それは、仲間のうちでも一番わるい魔ものの一人でした。つまり、「悪魔」だったのです。ある日のこと、悪魔はたいへんに、ごきげんでした。なぜかという、鏡を一つ、つくったからなのです。その鏡というのが、ただの鏡ではなくて、なんでもいいものや、美しいものが、この鏡にうつりますと、たちまち、ちぢこまって、ほとんどなんにも見えなくなってしまうのです。そのかわり、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけい、はつきりとうつつて、いつそうひどくなるのです。たとえどんなに美しい景色でも、この鏡にうつすと、まるで煮つめたホウレンソウみたいに見え、どんなにいい人間でも、みにくくうつったり、または、胴がなくなつて、さかだちにうつたりするのでした。顔なんかは、ゆがんでしまつて、なにがなんだか見わけがつかなくなりまふ。そのかわり、そばかすが一つあつても、それが鼻や口の上までひろがることは、覚悟しなければなりませんでした」とある。(本文)

一、悪魔とは……

最初、「悪魔」という言葉が出て来るが、「悪魔」というのは、まさに「悪」を本体としている存在であり、それゆえ、いわゆる「善」を本体としているような存在がいちばん嫌いであり、それは、例えば、「一なる神」を初めとして、様々な「神々」、そして、われわれ人間のなかでは、いわゆる「善」的な人間がもっとも気に入らないことになるかと思う。それゆえ、それらの対象に対して、実に様々な「悪さ」を仕掛けることになるわけである。そのひとつが、いわゆる『誘惑』というものであり、例えば、『旧約聖書』のなかのアダムとイブは、神から絶対に食べてはいけないと言われていた『禁断の「木の実」』を、いわゆる『ヘビの「巧みな誘惑」』に負けて、二人して食べてしまひ、その結果として、神の怒りにふれて、いわゆる「エデンの園」から追放されてしまふわけである。それが、まさにわれわれ人間の「原罪」(つまりは「弱さ」)ということになるのである。

例えば、釈迦は、二十九歳の時に出家をし、そして、三十五歳の時に「悟り」を開くことになるが、その最後の段階では、ほとんど骨と皮になつてしまひ、そこで、釈迦は、そのような「苦行」をやめて、近くの河で沐浴をし、そして、村の娘スジャータからミルクがゆをもらつて体力を回復したあと、近くの大樹(菩提樹)の下で、四十九日間、深い「瞑想」に耽入することになるのである。——その時に、「魔王」は、釈迦が「悟り」を開くの何とか妨げようと、自分の軍勢に様々な攻撃をさせるが、それらはことごとく失敗に終わり、また、自分の「三人の娘」(それは「愛執と嫌悪と貪欲」などであるが)、彼女たちを送つて、釈迦を誘惑させたりするが、釈迦は、その誘惑に対しても、全く見向きもしなかつたことである。そして、釈迦は、ついに四十九日目に「悟り」を開き、いわゆる「大悟」を成し遂げることもなるのである。

そのように、「悪魔」の最大の特徴というのは、直接、相手に「危害」をくわえるというよりは、(もちろん、そういう場合もあるだろうが)、むしろ「相手の弱み」に巧みにつけ入るといふことであり、例えば、「権力」に弱い人には、「権力」で「誘惑」をし、「金」に弱い人には、「金」で「誘惑」をし、そして、「異性」に弱い人には、「異性」で「誘惑」をするというのが、まさに「悪魔」の最大の特徴になるかと思う。それは、なぜかと言えば、それは、「悪」を本体としている「悪魔」にとつて、いわゆる「善」的な存在がもつとも気に入らない存在であり、それゆえ、その「善」的な存在が、何らかの「甘い誘惑」に負けて、いわゆる「善」的な存在からまさに「悪」的な存在へと落ちていく、その姿を見るのが、この上もない言葉では言い表せないほどの「無上の喜び」になるということである。それゆえ、「悪魔」というのは、いわゆる「善」的な存在を何らかの「甘い誘惑」で仕掛けては、まさに「悪」的な存在へと貶めることに、この上もない生き甲斐を感じているような存在ということになるのだろう。

それはともかく、本文では、「……ある日のこと、悪魔はたいへんごきげんでした。なぜかという、鏡を一つ、つくったからなのです。その鏡というのが、ただの鏡ではなくて、なんでもいいものや、美しいものが、この鏡にうつりますと、たちまち、ちぢこまって、ほとんどなんにも見えなくなってしまうのです。そのかわり、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけい、はつきりとうつって、いつそうひどくなるのでした」とある。——つまり、悪魔がつくった、その「鏡」というのは、なんであれ、「……よいものや美しいものは、たちまち縮こまって、ほとんど何も見えなくなってしまう一方、役に立たないものや、みにくいものなどは、よけいにはつきりとうつって、いつそうひどくなる」というものであり、それは、すなわち、役に立たないものやみにくいものあるいは悪いものなどを「より、ひどくはつきりと見せてくれるような鏡」だったということである。

二、悪魔の鏡の最大の特徴は……

さて、悪魔は、「……こいつは、めつぼう面白いやと、いいました。人間の心の中に、なにかいい考えや、信心ぶかい考えが浮かんできますと、鏡の中には、しかめつづらが、あらわれるものですから、この小びとの悪魔は、自分のすばらしい発明に思わず笑わずにはいられませんでした。悪魔は、「魔もの学校」を開いていましたが、この学校に通っている生徒たちがみんな、奇跡がおこった！と、方々へ言いふらしました。そして、今こそはじめて、世の中と人間どもの、ほんとうの姿が見られるのだ、と口々に言いました。こうしてみんなは、この鏡をさかんに持ちまわったのですから、とうとうしまいました。この鏡にゆがんでうつつたことのない国や人間がなくなってしまう。そこで、こんどは、天へのぼって行って、天使や「われらの主」を、からかってみよう、と、んでもない考えをおこしました。みんなが鏡をもって高くのぼって行けば行くほど、鏡の中のしかめつづらはますますひどくなりました。みんなは鏡をしっかり持っているのがやつとでした。それでもかまわず、高く高くのぼって行って、だんだん神様と天使たちのところに、近くなりました。するとその時、鏡はしかめつづらをしなげら、おそろしくふるえだしました。そして、とうとう、みんなの手からはなれて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさん、こまかいこまかいかけらに砕けてしまいました。こうして、今ま

でよりも、もっと大きな不幸を、世の中にまきちらすことになりました。(本文)

* *
さて、本文の中で特に興味深いのは、この悪魔は、「魔もの学校」(つまり「悪魔の学校」)を開いていて、しかも、その学校に通っている生徒たちは、悪魔がつくったその「鏡」をみては、「……みんなで、奇跡がおこった！」と方々へ言いふらしました。それでは、一体、何が「奇跡」だというのかと問えば、それは、まさに「……今こそ、はじめて、世の中と人間どものほんとうの姿が見られるのだ」ということである。——つまり、世の中や人間ともというのは、見た目や表面的にはいかにも「きれいごとで装ってはいる」が、その実、その奥には実に醜い様々な「欲望や感情その他」などが生々しく蠢いているのであり、それらがこの「鏡」にははつきりとうつし出されるのだと、悪魔たちは口々に言うのであった。そして、「……とうとうしまいに、この鏡にゆがんでうつったことのない国や人間がなくなってしまう」とある。それは、この地上のありとあらゆる国々や人間たちの、見た目や表面的にはいかにも「きれいごとで装ってはいて」も、その実、その奥には実に醜い様々な「欲望や感情その他」などが生々しく蠢いている様子が、この「鏡」にははつきりとうつし出されたということである。

そこで、今度は、「……天へのぼって行って、天使や『われらの主』を、からかってみよう」と、(それは、「善」を本体とする天使や「われらの主」は、この悪魔の「鏡」には一体どのようにつるのかを見てみようという)、とんでもない「考え」をおこしました。そして、「……みんなで鏡をもって高くのぼって行けば行くほど、鏡の中のしかめつっからはますますひどくなり、みんなは鏡をすっかり持っているのがやっとなりました。それでもかまわず、高く高くのぼって行って、だんだんと神様と天使たちのところへと近くなると、その時、鏡はしかめつっらをしながらおそろしくふるえだしました。そして、とうとう、みんなの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんのかまかいこまかいかけらに砕けてしまいました」とある。——それは、一体、なぜかと問えば、それは、「悪魔」という存在は、天上の「神の領域」(つまりは「神聖な領域」)へと入って行くということは、決して許されないうまさに「僭越な行為」であり、それゆえ、鏡は、悪魔たちの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさんのかまかいこまかいかけらに砕けてしまったのであり、しかも、それがまた、「……今までよりも、もっと大きな不幸を、世の中にまきちらすことになってしまった」ということである。

三、悪魔の鏡のかけらが目や心臓に入ると……

さて、「……このかけらの中には、やっとならば砂粒ぐらいの大きさしかないのもあって、それが広い世の中に飛び散ってしまったのです。そういうのが、人間の目の中にはいりますと、そのまま、そこにいすわって(入ったままに)なってしまいます。そうすると、その人は、なんでも物を、あべこべに見たり、でなければ、物ごとの悪いところばかりに目をつけたりするのです。それというのも、その鏡の小さなかけらの一つ一つには、もとの鏡の持っていたのと同じ力があつたからです。小さな鏡のかけらが、心臓にはいった人も、何人かありました。そうになると、ほんとうに恐ろしいことでした。その人の心臓は、一か

たまりの氷のようになってしまおうのです。また、かけらの中に、窓ガラスに使われるくらい大きいのもありました。けれども、そんな窓ガラスをとおして、友だちをみようとしても、むだでした。また、べつのかげらは、めがねになりました。こんなめがねをかけて、物を正しく見ようとしたり、公平にやろうとしたりすると、ひどくまずいことになるのでした。これを見て悪魔は、おかなの皮が破れそうになるほど笑いころげました。もう、愉快で愉快でたまりませんでした。しかし、それはともかく、家の外には、まだ、この小さいガラスのかけらが、空中を飛んでいました。……では、次のお話を聞くことにしましょう。(本文)

*

*

さて、悪魔が作った「鏡」は、悪魔たちの手から離れて、地上に落ちて、何千万、何億万、いや、もっとたくさん、こまかいこまかいかけらに砕けてしまい、「……そのかけらの中には、やっと砂粒ぐらいの大きさしかないのもあって、それが広い世の中に飛び散ってしまったのであり、そういうのが、人間の目の中にはいると、そのまま、そこにいすわって(入ったままに)なってしまい、そうすると、その人は、なんでも物を、あべこべに見たり、でなければ、物ごとの悪いところばかりに目をつけたりするのでした。それと、その鏡の小さなかけらの一つ一つには、もとの鏡の持っていたのと同じ力があつたからであり、小さな鏡のかけらが、心臓にはいった人も、何人かありましたが、そうになると、ほんとうに恐ろしいことであり、その人の心臓は、一かたまりの氷のようになってしまおうのです」とある。——つまり、もし空中に漂っているその小さな「鏡のかけら」が目の中に入ると、その人は、何でも物をあべこべに見たり、また、物ごとの悪いところばかりが目をつくようになるとともに、その人の「性格」もゆがんだものになってしまふのである。しかも、その小さな「鏡のかけら」がもしも心臓に入ったりしたら、それこれ、ほんとうに恐ろしいことであり、「……その人の心臓は、一かたまりの氷のようになってしまおう」ということである。……そして、やがて、空中に漂っていたその小さな「鏡のかけら」が、何とこの物語の主人公「カイ」という男の子の「目や心臓」の中に入ってしまったという、そのような「展開」(物語) ストーリー になっていくのである。

*

*

二、第二のお話
男の子と女の子

二、第二のお話

男の子と女の子

さて、冒頭は、「……大きな町には、たくさんのお家がたてこんでいて、大ぜいの人に住んでいますから、みながみな自分の庭を持つだけの場所がありません。そこで、たいいの人は植木鉢に花を植えて、それで満足しなければなりません。ちょうどそのような町に、二人の貧しい子供がおりましたが、二人は植木鉢よりは、いくらか大きい庭を持つていました。この二人は、兄妹ではありませんが、まるでほんとうの兄妹のように、仲良しでした。二人の両親は、すぐ隣り合った屋根裏部屋に住んでいました。そこは、両方から屋根がくつついていて、雨どい、が両方の家の軒をつたっていました。そして、小さな窓が両方の屋根裏部屋に、向かい合っていて、雨どいをひとまたぎすれば、こちらの窓から向こうの窓へ行くことができました。

そして、どちらの両親も、窓の外に大きな木の箱をおいて、その中に、うちで食べる野菜を植えていました。また、小さなバラの木も一本ずつ植わっていて、どちらもよく育っていました。ところが、両方の親たちの思いつきで、この箱は、雨どいをまたいで、おいてありましたので、箱の両はしが窓とすれすれになっていました。そのため、両側に花の壁ができてるように見えました。エンドウのつるは、箱の外へたれさがり、バラの木は長い枝をのぼして、窓のまわりからみついて、両方から向き合って頭をさげていました。そのありさまは、ちょうど緑の葉と花とでできた凱旋門を見るようでした。箱は、せいが高いいし、また、子供たちは、その上にはいあがってはいけないということもよく知っていましたから、時々お母さんのお許しをもらって、窓から屋根へ出ました。そして、バラの木の下にある小さな腰掛けにかけて、楽しく遊ぶのでした。(本文)

*

*

まず、ここで大事なことは、ある大きな町に、二人の貧しい子供が住んでいて、その二人は、兄妹ではないが、まるで「ほんとうの兄妹のように仲良し」であったということであり、しかも、二人の両親は、すぐ隣り合った(向かい合った)屋根裏部屋に住んでいたため、両方から屋根がくつついていて、雨どい、が両方の家の軒をつたっていました。そして、両方の屋根裏部屋には「小さな窓」があり、その両方の「小さな窓」は向かい合っていたので、雨どいをひとまたぎすれば、こちらの窓から向こうの窓へ行くことができましたということである。そして、「……どちらの両親も、窓の外に大きな木の箱をおいて、その中に、うちで食べる野菜を植えたり、また、小さなバラの木も一本ずつ植えていて、どちらもよく育っていました」とある。これは、具体的には一体どういふものになるのかと問えば、まず、窓の外は、両方とも(傾斜のある)屋根になっているので、(その屋根に直接降りたり大きな箱を置いたりするのは危険であり)、それゆえ、屋根の上に両方からいわば「ベランダ」のようなものをつくり、そして、その自分のベランダの上にそれぞれ大きな(土の入った)「木の箱」を置いて、その中に家で食べる野菜を植えたり、また、小さなバラの木も一本ずつ植えていたのか、それとも、この「ベランダ」のようなものが、そのまま「大きな箱」であり、それに野菜やバラの木を植えていたのか、そのどちらかかと思うが、そのどちらであれ、二人は、バラの木の下にある小さな腰掛けにかけて、楽しく遊ぶのでした」となるのである。

一、冬になると……

一方、「……冬になりますと、こういう楽しみはできませんでした。窓ガラスがすつかり、氷でおおわれてしまうこともよくありました。すると、子供たちは銅貨をストーブの上であたためて、凍った窓ガラスに押しつけました。そうするとそこに、きれいなのぞき窓が、まるく、ほんとにまんまるくできました。そして、両方の窓からは一つずつ、幸福そうなやさしい目がのぞいていました。それは、この小さな男の子と女の子の目でした。男の子の名はカイ、女の子の名はゲルダといました。夏のあいだは、ひとまたぎで、いったりきたりすることができましたが、冬になりますと、まず、たくさんの階段をおりて、それから、また、たくさんの階段をのぼらなければなりません。外では、雪がふぶいています。さて、雪のふぶきを見て、年とったおばあさんは、「……あれはね、白いミツバチがむらがつているんだよ」と、言いました。「……じゃ、あの中には、ミツバチの女王もいるの？」と、男の子はききました。この子は、ほんとうのミツバチの中には、女王バチのいることをちゃんと知っていたのです。「……ああ、いるともね」と、おばあさんは言いました。「……女王バチは、あそこが一番たくさんむらがつているところを飛んでいるんだよ。みんなのうちで一番大きくてね、けっして地面の上に、じっとしてはいないの。すぐまた、黒い雲の方へ飛んで行くんだよ。冬の夜には、町の通りを飛びまわって、方々の家の窓をのぞいてあるくのさ。そうするとね、不思議なことに、そのまま窓ガラスに、凍りついてしまって、まるで花でも咲いたようになるんだよ」と言うのでした。

すると、「……ああ、それなら見たことがあってよ」と、二人の子供は口々に言いました。そして、二人にも、それがほんとうのことだということが、わかりました。「……雪の女王は、ここへ、はいつてこられて？」と、女の子がききました。「……はいつてくるなら、きてもいい！」と、男の子は言いました。「……そうしたら、僕、熱いストーブの上のせてやるんだ。そうすれば、とけてしまうよ」と言いました。(本文)

*

*

さて、夏のあいだは、ひとまたぎで、いったりきたりすることができても、冬になると、そのような楽しみはできなくなり、しかも、窓ガラスは、すっかり氷でおおわれてしまうこともよくあり、そのような時には、「……子供たちは銅貨をストーブの上であたためて、凍った窓ガラスに押しつけると、そこにきれいな のぞき窓が、まるく、ほんとにまんまるくできました」とある。これは、恐らく、作者(アンデルセン)の子供の頃の経験でもあるのだろうが、そして、両方の窓から一つずつ幸福そうなやさしい目がのぞいていました。それは、この小さな男の子と女の子の目であり、「……男の子の名は、カイ、女の子の名は、ゲルダといました」となるのである。

そして、雪のふぶきを見て、年とったおばあさんは、「……あれはね、白いミツバチがむらがつているんだよ」と言うので、「……じゃ、あの中には、ミツバチの女王もいるの？」と男の子が聞くと、「……ああ、いるともね」と、おばあさんは言いました。——これは、もちろん、「女王バチ」という「言葉」を引き出すための「たとえ話」であり、そして、「……女王バチは、あそこが一番たくさんむらがつているところを飛んでいるんだよ。みんなのうちで一番大きくてね、けっして地面の上に、じっとしてはいないの。すぐまた、

黒い雲の方へ飛んで行くんだよ。冬の夜には、町の通りを飛びまわって、方々の家の窓をのぞいてあるくのさ。そうするとね、不思議なことに、そのまま窓ガラスに、凍りついてしまつて、まるで花でも咲いたようになるんだよ」と言うのでした。

すると、「……ああ、それなら見たことがある」と、二人の子供は口々に言い、そして、二人にもそれがほんとうのことだとわかりました。（これは、窓ガラスに実際に雪の結晶などが付いているのを見たことがあるからであり）、すると、「……雪の女王は、ここへ、はいつてこられて？」と、女の子が聞きました。（これは、白いミツバチⅡふぶき、白いミツバチの中で一番大きいのがミツバチの女王Ⅱふぶきの中で一番大きいのが雪の女王）となり、「……はいつてくるなら、きてもいい！」と、男の子は言いました。「……そうしたら、僕、熱いストーブの上のせてやるんだ。そうすれば、とけてしまふよ」となるのである。——つまり、「雪の女王」というのは、ここでは「ふぶきの中で一番大きいのが雪の女王」であり、それ（雪）が、やがて「人間の姿」（女性の姿Ⅱ雪の女王）へと変身するという「設定」になつているのである。それゆえ、「雪の女王」というのは、もともとは「雪」（或いは氷）であり、いわゆる「人間ではない」のである。（そういう意味では「雪女」に近い）。——一方、有名な映画の『アナと雪の女王』の場合には、アナのお姉さん（王女Ⅱ人間）が何でも凍らせる「不思議な力」を持った「雪の女王」になつていくのである。

二、雪の女王との初めての出遇い

さて、おばあさんは男の子の髪をなでながら、（雪の女王の話は避けて）、ほかのお話をはじめました。夕方、カイは部屋の中で、着物を半分ぬぎかけたまま、窓ぎわの椅子の上にあがつて、例の小さなぞき穴から、外をのぞいてみました。外には、雪のひらが二つ三つ舞っていました、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とてもうすい白い紗しやでできているようですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのです。その人は、見れば見るほど美しくほっそりしていました。でも、からだは氷でできているのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きていたのでした。目は、明るい二つの星のように輝いていますが、落ちついた、やすらかな様子はありませんでした。女の方は、窓の方にむいてうなずきながら、手まねきしました。男の子はびっくりして、椅子からとびおりました。その時、なんだか窓の外を一羽の大きな鳥が飛び去つたような気がしました。（本文）

*

*

さて、これが主人公（カイ）という「男の子」が最初に出遇つた時の、まさに「雪の女王」の様子やその姿であり、それは、「……夕方、カイは部屋の中の、例の小さなぞき穴から、外をのぞいてみると、外には、雪のひらが二つ三つ舞っていました、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とてもうすい白い紗しやでできているのですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのでした。その人は、見れば見るほど美しくほっそりして、椅子からとびおり

は氷できていたのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きていたのでした。目は、明るい二つの星のように輝いていますが、落ちついた、やすらかな様子はありませんでした。女の人は、窓の方にむいてうなずきながら、手まねきしました」とある。——これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、雪の女王は、この主人公の「男の子」(カイ)にはつきりと「興味や関心」を持ったということである。——ちなみに、なんだか窓の外を「一羽の大きな鳥」とあるが、それは、恐らく、「櫓に乗った雪の女王」が空を飛び去ったということになるのだろう。それゆえ、もうこの冬はやって来ず、次の冬に目を付けた主人公の「男の子」(カイ)のところへと再びやって来るのである。

三、季節は、冬から春そして夏へと

あくる日は、霜のおりた晴れた日になりました。——それから、雪どけになり——やがて、春がやってきました。お日様は輝き、緑の草が顔をのぞかせ、ツバメが巣をつくりました。そして、窓が開かれて、小さな子供たちは、また、高い屋根の上の自分たちの小さいお庭にすわって遊びました。——バラの花は、この夏は、たとえようもないほど美しく咲きそりました。女の子は、バラの花のことを歌った賛美歌一つおぼえました。そして、歌の中にバラの花のことが出るたびに、自分のバラの花のことを思い浮かべました。そして、男の子にそれをうたって聞かせました。男の子もいっしょにうたいました。

バラの花 かおる谷間に

おわします おさなごイエスさま！

そして、二人は手を取りあって、バラの花にキスをしました。そして、神様の明るいお日様を仰いで、そこに、おさなごイエスさまがいらっしやるように話しかけました。なんという楽しい夏の日々でしょう！ 家の外で、いきいきとしたバラの花にかこまれているのは、ほんとうに、いい気持ちでした。バラの花はいつまでも、いつまでも、咲きつづけようとしているように見えました。——カイとゲルダは、そこにすわって、動物や鳥の絵本を見ていました。その時——教会の大きな塔で、時計がちょうど五時を打ちました。——ふと、カイが言いました。「……あつ、痛い！ 胸のところでチクリとしたよ。こんどは目の中へ何かはいった」と言うのでした。

女の子は、男の子の頸を抱きました。男の子は、目をぱちぱちさせましたけれど、なんにも見つかりませんでした。「……もう出てしまつたんだらう」と、男の子は言いました。ところが、出てしまったわけではありません。それこそ、あの鏡、ほら、あの悪魔の鏡から飛びちった、ガラスのかけらの一つだったのです。わたしたちは、まだ忘れはしませんね。このよくない鏡は、すべての大きなもの、いいものが、小さく、みにくくうつり、悪いものや、いやなものが、はつきりと見え、どんなものでも、あらばかりがすぐ目につくようになるのでしたね。可愛そうに、カイの心臓に、そのかけらが一つはいったのです。まもなく、カイの心臓は、氷のかたまりのようになってしまふでしょう。もう、今では、痛くはありません、けれども、それはたしかに、はいっているのです。(本文)

さて、ここで最も大事なことの一つは、まず、「……女の子は、バラの花のことを歌った賛美歌を一つおぼえて、歌の中にバラの花のことが出るたびに、自分のバラの花のことを思い浮かべました。そして、男の子にそれを歌って聞かせました。男の子も一緒に歌いました。(中略)、そして、二人は手を取り合って、バラの花にキスをしました。そして、神様の明るいお日様を仰いで、そこにおさなごイエスマがいらつしやるように話しかけました。なんと楽しい夏の日々でしょう！ 家の外でいきいきとしたバラの花にかこまれてるのは、ほんとうにいい気持ちでした」とある。

まず、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、何よりも「バラの花」が大好きであったが、それ以上に、主人公の「カイ」という「男の子」がなおなお大好きであり、毎年、一緒にその「バラの花」を見ながら遊んでいたが、今年の夏は、さらに、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、「……バラの花のことを歌った賛美歌」を一つ覚えて、男の子にそれを歌って聞かせたり、また、男の子と一緒に歌ったりしたという、それら二人に共有の「記憶」こそが、まさに「最も大事なもの」であり、なぜなら、それらの「記憶」(バラの花その他)によってこそ、次の「魔法を使うおばあさん」の「魔法」(ゲルダのことを忘れてしまうという魔法)から解き放されるとともに、また、主人公の「カイ」という「男の子」も、悪魔の「鏡のかけら」から解き放されることになるが、その時の「キーワード」こそは、まさに二人で一緒に歌った賛美歌の「……バラの花 かおる谷間におわします おさなごイエスマ！」という言葉であり、その言葉(賛美歌)によってこそ、主人公の「カイ」という「男の子」も、現実の世界へと戻ることができ得るのである。

*

*

さて、次に大事なものは、「……教会の大きな塔で、時計がちょうど五時を打ちましたが、その時に、ふとカイは、「……あつ、痛い！ 胸のところをチクリとしたよ。こんどは目の中へ何かはいったよ」と言うのでした。それこそは、あの悪魔の「鏡のかけら」であつて、それによって、主人公の「カイ」という「男の子」の性格は、今までとは全く違って、「……どんなものでも、あらばかりがすぐ目につき、それを露骨に口にするような男の子に変心してしまうのである」。——さて、ここで「熟慮」すべきことは、この悪魔の「鏡のかけら」が主人公(カイ)の「目や心臓」に入つたのは、全くの「偶然」だったのか、それとも、雪の女王が意図的に「そうしたのか」という問題であり、もし、全くの「偶然」であれば、それによって、主人公(カイ)の悪化した「性格」を見て、主人公(カイ)をまさに「誘惑」(誘拐)し易くなったということであり、一方、雪の女王は、最初から主人公(カイ)という「男の子」に目を付けていたが、今のままの「無垢(善良)の心」では、自分(雪の女王)に強く抵抗をして、自分(雪の女王)に素直について来てくれないかも知れないと考えて、空中に漂っていた悪魔の「鏡のかけら」を主人公(カイ)の「目や心臓」に意図的に「入れる」ことによって、主人公(カイ)の「性格」を悪化させて、自分(雪の女王)の「誘惑」(誘拐)に素直について来るようにしたという「考え方」である。むろん、どちらでも可能であり、また、どちらであれ、雪の女王は、一度、主人公(カイ)の部屋の「……窓の方にむいてうなずきながら、手まねきをした」ことがあり、それは、間違いなく、主人公の「男の子」(カイ)には、つきりと「興味や関心」を示したという「確たる証拠」となるものである。それゆえ、雪の女王は、どのような手段を使つ

ても、また、使わなくても、結局は、主人公の「男の子」（カイ）を「雪の女王の城」と連れ去ることになるのである。

四、主人公（カイ）のその「変心」ぶり

さて、カイは、「……なぜ、泣いているの！」と、たずねました。「……そんないやなかおをしてさ、僕はもう、なんともないんだよ。チェー！」、それからまた、急に叫びました。「……そのバラの花は、虫にくわれていらあ！ それから、ほら、あつちのは、ねじれているよ。きたならしいバラばかりだなあ。植えてある箱みたいに、うすぎたないや」。こう言って、足ではげしく箱をけりました。そして、二つのバラの花をむしり取ってしまいました。「……カイちゃん、なにをするの！」と、女の子は叫びました。カイは、ゲルダの驚くのを見ますと、もう一つバラの花をむしってしまいました。そして、可愛いゲルダのそばをはなれて、自分のうちの窓の中に飛びこんでしまいました。

あとで、ゲルダが絵本を持って行きますと、カイは、そんなものは、赤ん坊の見るものだと言いました。また、おばあさんがお話をはじめますと、ひっきりなしに、「……だつて、だつて！」と言つて、じやまをしました。——そればかりではありません。すきをみては、おばあさんのうしろへまわつて、めがねをかけて、おばあさんの口まねをするのでした。それが、そっくりだったものだから、みんなはカイのするのを見て、大わらいました。まもなく、カイは近所じゅうの人たちの話しぶりや、歩きぶりをまねするようにになりました。その人たちの癖や、よくないところならば、なんでもまねすることができました。すると人々は、「……たしかに、あの子は、すばらしい頭をもっている」と、言いました。けれども、それはじつは、目の中にはいったガラスのせいであり、また、心臓の中に刺さっているガラスのせいだったのです。カイを心から愛しているゲルダを、からかうようになったのも、そのためだったのです。（本文）、——さて、主人公（カイ）という「男の子」の性格が、今までは全く変わってしまったという、実に様々な「実例」であるが、それは、次へとなおも続くのである。

*

*

遊びかたも、今までは、すっかりちがつて、たいそう、分別くさくなりました。——ある、雪の降りしきる冬の日でした。カイは大きなレンズを外に持ちだして、青い上着のすそをひろげて、その上に雪のひらを降らせました。「……ゲルダちゃん、このレンズをのぞいてごらん」と、カイは言いました。見ると、雪のひとひら、ひとひらが、ずっと大きくなつて、きれいな花のように、そうでなければ、六角形の星のように見えました。それはほんとうに美しいものでした。「……ねえ、ずいぶんじょうずにできているだろう！」と、カイは言いました。「……ほんとうの花なんかより、ずっと面白いよ。どれ一つだつて、まちがったところはないんだからね。みな、きちんとしているんだ。ただ、溶けさせなければいいんだがなあ！」と言いました。（本文）、——さて、主人公（カイ）という「男の子」は、大の「仲良し」の女主人公の「ゲルダ」という「女の子」とあれこれ一緒に無邪気に楽しく遊ぶことよりも、むしろ「分別くさく」（それは「あれこれ理屈をこねくりまわすような男の子」になつてしまひ、「……カイを心から愛しているゲルダを、（あれこれ）からかうようになつてしまつた」ということである。

五、カイの櫓と雪の女王の大きな櫓

それからすこしたって、カイは大きな手袋をはめ、櫓を肩にかついで外に出ました。そして、ゲルダの耳もとに顔を寄せて言いました。「……僕ね、みんなの遊んでいる広場で、櫓に乗ってもいいと言われたんだよ」。そして、そのまま、さっさと行ってしまいました。

広場では、乱暴な子供たちが、時々、自分の櫓をお百姓の車にむすびつけて、かなり遠くまでいっしょにすべっていました。そうすると、面白いようによく走りました。こうしてみんなが、楽しく遊んでいますと、そこへ、一台の大きな櫓がやってきました。それは全体がまっ白に塗ってあって、その中に、粗い白い毛皮にくるまって、白い粗い帽子をかぶった人が、すわっていました。その櫓は、広場を二度まわりました。カイはすばやく、自分の小さな櫓を、それにむすびつけました。するとすぐ、いっしょにすべりだしました。櫓は、だんだん早くなつて、またたくうちに、隣りの通りへ、はいって行きました。その時、櫓を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくうなずきました。なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました。カイが自分の小さな櫓を、ほどこうとしますと、そのたびに、その人が、ふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまふのでした。そのうちに、二人は町の門を走りぬけてしまいました。雪は、ますます上げしく、うずをまいて降ってきました。もう手をのぼしたくらいのところも見えなくなりしました。それでも、櫓は、ぐんぐん走りつづけました。カイは、大きな櫓から、はなれようと思つて、いそいで綱をゆるめました。けれども、それは、なんにもなりません。自分の小さな櫓は、大きい櫓にびったりくっついていて、いっしょに、風のように早く走って行きます。カイは大きな声をあげましたが、だれも聞いてくれるものはありませんでした。雪はますます降りしきって、櫓はどんどん、飛ぶように走って行きます。ときには、堀や、生垣の上をとび越して行くらしく、はねあがることもありました。カイはもう、すっかりこわくなつて、「主の祈り」を唱えようと思いました。ところが、頭に浮かんでくるのは、九々の大きな表ばかりでした。(本文)

*

*

さて、ここで「大事な言葉」は、「……雪の女王の櫓は、広場を二度まわりました。カイは、素早く、自分の小さな櫓をそれにむすびつけました。するとすぐ一緒にすべり出しました。櫓はだんだん早くなつて、またたくうちに隣りの通りへ入って行きました。その時、櫓を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくうなずきました。なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました。カイが自分の小さな櫓をほどこうとしますと、そのたびに、その人がふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまふのでした。(中略)、雪はますます降りしきって、櫓はどんどん飛ぶように走って行きます。カイはもうすっかりこわくなつて、『主の祈り』を唱えようと思いましたが、頭に浮かんで来るのは、九々の大きな表ばかりでした」とある。

まず、雪の女王の櫓は、(ただ単に通る、過ぎるのではなく)、広場を(わざわざ)二度まわりましたとある。これは、明らかに、主人公(カイ)の「……誰か自分の櫓を引っ張ってくれないかなあ」という、そのような「心」を巧みに「誘惑」(誘って)いるのであり、二度でだめなら、三度でもまわって、主人公(カイ)が自分の小さな櫓をそれにむす

びつけるのを待ち、むすびつけたら、(それで決定であり)、雪の女王は、すぐさま一緒にすべり出し、そして、櫓はどんどん早くなって、またたくうちに隣りの通りへ入って行くのと、「……その時、櫓を走らせていた人が、ふりかえって、カイにやさしくなずきました。この「……なんだか二人は、もう前から知っているような気がしました」とある。この「……ふりかえって、カイにやさしくなずきました」という「行為」は、一体、どういう「意味合い」になるのかと問えば、それは、主人公(カイ)に向かって、まさに「……大丈夫、何も心配しなくてもいいのよ」と言っているのであり、それは、つまり、主人公(カイ)のいわば「心配や恐怖心」などを取り除いて、るのであり、そして、「……カイが自分の小さな櫓をほどこうとしますと、そのたびに、その人がふりむいてうなずくので、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした」とあるが、これも全く同じことであり、「……大丈夫、心配しなくてもいいのよ」と言われているとともに、(もう一つ、敢えて言えば)、いわば「そのような一種の魔法のようなものをかけられている」ことにもなるのである。それゆえ、主人公(カイ)は、「……自分の小さな櫓をほどこうとしても、そのたびに、雪の女王にやさしくなずかれると、カイはついそのまま、またすわってしまうのでした」となるのである。さらに、「……カイはもうすっかりこわくなって、『主の祈り』を唱えようとしたが、頭に浮かんで来るのは、九々の大きな表ばかりでした」とあるが、これも、主人公(カイ)の「心」は、すでに悪い方へと「変心」(悪化)しているのであり、それゆえ、(キリスト教の)「主の祈り」を唱えようとしても、それを「想い出す」ことも出来ず、「……頭に浮かんで来るのは、ただ(分別くさい)九々の大きな表ばかりでした」となるのである。

六、雪の女王の大きな櫓に乗せられて

さて、雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました。そして、それが、急に両側にとびのいたかと思うと、大きな櫓がとまりました。そして、櫓を走らせた人が立ちあがりました。見れば、毛皮も帽子も雪でできていました。その人は、せいすらりと高い、輝くばかりに白い女の人でした。この人こそ、雪の女王だったのです。「……ずいぶん遠くまできたのよ」と、雪の女王は言いました。「……おや、ふるえているのね。わたしの白クマの毛皮の中におはいり」。こう言って、カイを自分の櫓に乗せて、毛皮をかけてやりました。カイはまるで、雪の吹きだまりの中へ、はいったような気がしました。「……まだ、ふるえているの？」と、雪の女王はたずねました。そして、カイの額にキスをしました。ああ、その冷たいこと！ 氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました。——しかし、それはほんのつかのままで、すぐ気持ちがよくくなりました。もう、まわりの寒さも気にならなくなりしました。「……僕の櫓！ 僕の櫓を忘れないでね！」、カイが一番はじめに思っていたのは、櫓のことでした。櫓は一羽の白いニワトリにむすびつけられました。ニワトリは、櫓を背中に乗せて、あとから飛んで来ました。雪の女王はカイに、もう一度キスをしました。すると、カイはゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも、忘れてしまいました。「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「……

…今度キスをすると、お前は死んでしまうからね」と言うのでした。(本文)

さて、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました。そして、それが急に両側に飛び退いたかと思うと、大きな櫛が止まりました」とある。——まず、雪の女王の櫛は、一体、何が引っ張っているのかと問えば、それは、ふつうに考えれば、動物の「トナカイ」になるかと思うが、ここで特に「熟慮」すべきことは、次のようなことである。——例えば、雪の女王というのは、次のようなものであり、それは、「……外には雪のひらが二つ三つ舞っていました、その中で一番大きいのが、花の箱のふちにのっかりました。すると、その雪のひらは、みるみるうちに大きくなって、とうとう、一人の女の人になりました。着物は、とても美しい白い紗でできているようですが、実は何百万という、星のようにきらきらする雪のひらでできているのでした。その人は、見れば見るほど美しくほっそりしていました。でも、からだは氷でできているのでした。まぶしい、きらきらする氷ですが、それでも、その人は、生きていたのでした」とある。また、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たくさんの大きな白いニワトリのようになりました」とあり、さらに、「……見れば、毛皮も帽子も雪でできていました」とある。

そうだとすれば、雪の女王の「大きな櫛」も、また、それを引っ張る「トナカイ」(或いは「白いニワトリ」)も、むろん、雪の女王も、また、彼女が身に付けている様々な「毛皮や帽子」なども、その他、それらすべては「雪のひら」から変化したものであり、それゆえ、それらすべては「雪と氷」からできていることになるのです。——だとすれば、雪と氷を「支配」(コントロール)しているのは、まさに「雪の女王」ということになり、そして、その「雪の女王」という存在は、まさに「雪のひら」を何にでも変化させ得る「魔力」(魔法)を持つていることにもなるのだろう。つまり、「雪の女王」というのは、すなわち、雪の中の雪、まさに「雪の女王」(或いは「雪の精霊」)そのものになるということである。

次に、自分の「小さな櫛」に乗っていた主人公の「カイ」は、雪の女王の「大きな櫛」に引っ張られて、「……ずいぶん遠くまできたのよ」となるが、また、「……おや、ふるえているのね。わたしの白クマの毛皮の中におはいり」。こう言つて、カイを自分の大きな櫛に乗せて、自分のそばに座らせると、毛皮をかけてやりました。カイはまるで雪の吹きだまりの中へ入ったような気がしました。(それは、その毛皮も雪と氷でできているからであり)、「……まだ、ふるえているの?」と、雪の女王はたずねました。そして、カイの額にキスをしました。ああ、その冷たいこと! 氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました。——しかし、それはほんのつかのまで、すぐ気持ちがよくになりました。もう、まわりの寒さも気にならなくなりましたとある。——これは、雪の女王の「キス」によって、まさに「魔法がかかった」ということである。

また、「……カイが一番はじめに思いだしたのは、櫛のことでした。櫛は一羽の白いニワトリに結びつけられました。ニワトリは、櫛を背中に乗せて、あとから飛んで来ました」とある。——むろん、この「一羽のニワトリ」も、まさに「雪のひら」からできているも

のであるが、それでは、なぜ「ニワトリ」なのか？ もちろん、空を飛ぶ「鳥」は、実に多種多彩と存在するが、その中で、雪のよう^なに、「色の白い鳥」はと問えば、例えば、白鳥やシラサギ或いは白いハトやその他などがすぐに思い浮かぶが、ただ白鳥やシロサギでは「ひとひらの雪」としては少し大き過ぎるのか、また、白いハトでは少し小さ過ぎるのか、その結果として、「……雪のひらは、だんだんに大きくなって、とうとうしまいに、たかさんの大きな白いニワトリのようになりました」となるのか？ ただ「ニワトリ」は、ふつう空を飛ぶことのできない鳥である。それゆえ、ここで大事なのは、実際の「ニワトリ」は、ふつう空を飛ぶことはできないが、しかし、「雪のひら」から出来ている「ニワトリ」であれば、いくらでも「空を飛ぶこと」はでき得るのである。

さて、最後は、雪の女王の「額へのキス」であるが、一回目の「キス」では、主人公の「カイ」は、寒さを感じなくなり、そして、二回目の「キス」では、ゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも、忘れてしまいました。そして、「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「……今度キスをする、お前は死んでしまうからね」と言うのです。——これは、一体、どういうことなのか？ まず、考えられることは、主人公の「カイ」が雪の女王に最初に「額にキスされた」時、主人公の「カイ」は、「……ああ、その冷たいこと！ 氷よりも、もっと冷たくて、氷のかたまりになりかかっていたカイの心臓に、じかに、しみとおりました。そして、いまにも、死にそうな気がしました」とある。

つまり、ふつうであれば、雪の女王に「額にキスされる」と、多くの場合、恐らく、凍って死んでしまうのかも知れない。——それは、例えば、有名な「雪女」であれば、相手に息を吹きかけると、相手は「凍って死んでしまう」と全く同じことであり、ただ、雪の女王は、主人公の「カイ」を殺す気はないのであり、むしろ、一緒に住むことを考えているのであり、それゆえ、寒さに震えている主人公の「カイ」の「額にキス」をして、いわゆる「寒さを感じない」ようにしたのである。また、二回目の「キス」では、ゲルダのことも、おばあさんのことも、うちにいるみんなのことも忘れてしまいましたとあるが、それは、当然のことながら、主人公（カイ）の「家に帰りたいという気持ち」を取り除くためである。そして、「……もう、キスをしてあげないよ」と、雪の女王は言いました。「……今度キスをする、お前は死んでしまうからね」と言うのです。これは、つまり、今度、主人公の「カイ」の「額にキス」をする時は、それは、まさに「カイを殺す時になる」ということである。

七、雪の女王と主人公（カイ）はどこへ……

さて、カイは、雪の女王をじつとながめました。雪の女王は、それは美しい人でした。これ以上、賢い、やさしい顔は、考えられません。いつか窓の外から、手まねきをした時のように、氷でできているとは、とても思われません。カイの目には、雪の女王はまったく申しぶんのない美しい人に見えました。もう、すこしも、こわくありません。そこで女王に、算数の暗算が、それも、分数の暗算ができることや、国の平方マイルのことや、「人口はいくら？」のことなどを話しました。女王はしじゅう、にこにこしていました。けれども、カイは、自分の知っていることは、まだまだ、十分ではないような気がし

ました。そして、広い、広い大空を見あげました。雪の女王はカイをつれて、黒い雲の上を高く高く、どこまでも飛んで行きました。あらしが、ざあざあ、ごうごう！ と鳴っています。それはまるで、昔の歌をうたっているようでした。二人は、森や、湖や、海や、陸を越えて飛んで行きました。はるか下の方では、冷たい風がピューピュー吹いて、オオカミがほえていました。雪がきらきら光っています。その上を黒いカラスが、鳴きながら飛んで行きました。一方、はるか上の方には、月が大きく明るく輝いていました。その月をカイは、長い長い冬の夜じゆうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていたのです。(本文)

*

*

まず、雪の女王の「容姿・容貌」は、「……それは美しい人でした。これ以上賢いやさしい顔は考えられませんでした。いつか窓の外から手まねきをした時のように、氷でできているとはとても思われません。カイの目には、雪の女王は全く申し分のない美しい人に見えました」とある。——さて、ここで大事なことは、雪の女王は、ただ単に「美しい」だけの人ではなく、実は、「……これ以上賢いやさしい顔」は考えられまじんとある。つまり、雪の女王というのは、非常に「賢い」人(女性)でもあったのである。

一方、主人公の「カイ」は、「……もう少しも怖くなくなり、そこで女王に算数の暗算が、それも分数の暗算ができることや、国の平方マイルのことや、その他(人口はいくら?)のことなどを話しました」とある。——そうだとすれば、主人公の「カイ」という「男の子」は、実は「算数」が(かなり)得意ということになり、そのカイの「算数の暗算」(特に「分数の暗算」)その他などの話を聞いている時は、雪の女王は、終始、にこにこしていたということである。——これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、そもそも、雪の女王という人は、一体、何のために「カイ」という「男の子」を連れてきたのかと問えば、その一つは、雪の女王という人は、雪の女王の「お城」のその中でたった一人ですつと住んでいるのであり、それゆえ、どうしても「孤独」という問題がついてまわることになるが、そのために、誰か「話し相手」を求めたということもあるだろうが、それ以上に、雪の女王が求めたものは、それは、まさに「賢くて頭のいい子供」ということであり、それにぴったりと合っていたのが、まさに主人公の「カイ」という男の子であり、特に「算数」が得意だということも気に入った理由になるのだろう。というのも、雪の女王は、主人公(カイ)の「算数の暗算」(特に「分数の暗算」)その他などの話を聞いている時こそ、雪の女王は、終始、にこにこしていたという「事実」があるからである。

それはともかく、「……雪の女王は、カイを連れて、黒い雲の上を高く高くどこまでも飛んで行きました。あらしが、ざあざあ、ごうごう！ と鳴っています。それはまるで昔の歌をうたっているようでした。二人は、森や、湖や、海や、陸を越えて飛んで行きました。はるか下の方では、冷たい風がピューピュー吹いて、オオカミがほえていました。雪がきらきら光っています。その上を黒いカラスが鳴きながら飛んで行きました。一方、はるか上の方には、月が大きく明るく輝いていました。その月をカイは、長い長い冬の夜じゆうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていた」とある。

*

*

それでは、二人が最終的に辿り着いた場所は、一体、どこになのかと問えば、まず、雪の女王は、「夏のテント」をラップランドに張るということであるが、雪の女王のちゃん

とした「お城」は、もつと「北極」近くにある、スピッツベルゲンという島にあるということである。しかし、二人が最終的に辿り着いた地点は、そこではなく、実は、次のようなところである。――まず、トナカイは、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もつとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言い、そして、ラップ人の女は、「……ここ（ラップランド）から百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなければだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」となり、そこに「雪の女王のお城」があるのである。つまり、雪の女王は、一カ所にずっと留まっているのではなく、あちこちに移動しているのであり、今は、フィンマルケンというところにある「雪の女王のお城」にいるのである。ただ、気になるのは、「……（夜空には）月が大きく明るく輝いていましたが、その月をカイは、長い長い冬の夜^{よる}じゆうながめていました。そして、昼の間は、雪の女王の足もとで眠っていたのです」とあるが、これは、一体、どういうことを意味するのかと問えば、それは、次のようなことである。

まず、雪の女王は、今は、フィンマルケンというところにある「雪の女王のお城」にいるという。……もちろん、夏の季節であれば、ある程度は「雪や氷」なども溶けて、それなりの「動物や植物」などが見られるかも知れないが、しかし、冬の季節ともなれば、それこそ、見渡す限り、その大自然の風景は、もうほとんどすべて「雪と氷の世界」になってしまうだろうし、また、零下何十度というまさに「猛吹雪^{もうふうぶき}」という日々を多くなるかと思う。そうだとすれば、主人公の「カイ」という「男の子」は、冬の間は、外に出るということもなく、ほとんど「お城の中」で過ごしていたことになるかと思う。

それに加えて、大事なことは、なぜ、主人公の「カイ」は、「……昼間寝て、夜起きているのか？」という問題であるが、雪の女王というのは、もともと「雪と氷」とで出来ている存在であり、それゆえ、雪や曇りの「昼間」であればよいが、太陽がギラギラと光り輝く「昼間」は、なるべく避けているとともに、主人公の「カイ」にも、太陽が光り輝く「昼間」は、なるべく見せないようにしているのである。それは、その太陽のギラギラと光り輝く「光と熱^{エネルギー}」とによって、主人公（カイ）にかけられた雪の女王の「魔法」（魔力）が解けてしまう可能性もあるからである。それゆえ、昼間は、なるべく寝かせるようにして、そして、夜は、晴れば、オーロラをはじめ、月や星などの様子をながめながら、雪の女王から課せられている何らかの「課題」（難題）などをあれこれ深く「思考」（思索している）ことにもなるのだろう。

*

*

三、第三のお話

魔法を使うおばあさんの花園

三、第三のお話

魔法を使うおばあさんの花園

一、冒頭の文章

まず、冒頭の文章は、「……さて、カイがいなくなってから、小さいゲルダはどうしたでしょうか。それにしても、カイはどこへ行ってしまったのでしょうか。——知っている人はだれもありませんでした。教えてくれる人もありませんでした。男の子たちの話では、カイが自分の小さな櫓そりを、大きなりっぱな櫓そりにむすびつけて、通りを走りぬけて、そのまま町の門から出て行くのを見たというだけです。だれ一人、カイのいるところを知るものはありませんでした。みんなは、涙を流しました。ゲルダは、深い悲しみに沈んで、いつまでも泣いていました。——それで人々は、カイは死んでしまったのだ、町のすぐそばを流れている川に落ちて、おぼれてしまったんだと言いました。ああ、くる日も、くる日も、ほんとうに長い、暗い冬の日が過ぎました。——それでも、とうとう、暖かいお日様の輝く春になりました。「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、お日様は言いました。「……僕はそうは思いませんよ」と、ツバメは答えました。こうして、しいには、小さいゲルダも、そうは思わなくなりました」とある。(本文)

*

*

さて、ある日、突然、一人の「男の子」が行方不明になってしまった。これは、今日でも「大変な事件」であり、それゆえ、警察をはじめ、いろいろな人たちがその「男の子」を探し始めることになるが、それとともに、その時の状況を一緒に遊んでいた子供たちから聞いてみると、その男の子たちの話では、「……カイが自分の小さな櫓そりを、大きなりっぱな櫓そりにむすびつけて、通りを走りぬけて、そのまま町の門から出て行くのを見たというだけ」であり、だれ一人、カイのいるところを知るものはありませんでした。みんなは、涙を流しました。もちろん、「カイ」大好きの大遊び友だちの「女の子」(ゲルダ)も、深い悲しみに沈んで、いつまでも泣いていました。そして、とうとう人々は、「……カイは死んでしまったのだ、町のすぐそばを流れている川に落ちて、溺れてしまったんだ」と言うようになってしまったのです。そして、くる日も、くる日も、ほんとうに長い、暗い冬の日が過ぎました。——それでも、とうとう、暖かいお日様の輝く春になりました。しかし、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、思い詰めていて、それを口にする、「……わたしは、そうは思わないよ」と、(意外にも)お日様はそう言うのでした。しかし、女主人公の「ゲルダ」は、相変わらず、「……カイちゃんは、死んで、どこかへ行ってしまったのよ」と、そう思い込んでいるので、それをツバメに言うとうとう、今度も、「……僕はそうは思いませんよ」と、ツバメも答えるのでした。そのようなことを繰り返していくうちに、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」も、やがて、「……カイちゃんは、死んだのではなく、きっと生きていて、どこかにいるんだわ」と、そう思うようになっていくのである。

二、川の岸边へと行ってみる

ある朝、ゲルダは、「……わたし、あの新しい赤い靴をはいて行きましょう」と、言いました。「……あれは、カイちゃんにも、まだ見せなかつたわ。あれをはいて、川へ行つて、カイちゃんのことをたずねてみよう」と。そして、まだ夜が明けたばかりでしたが、ゲルダは、眠っているおばあさんに、そっとキスをすると、赤い靴をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へ行きました。「……あなたが、わたしのお友だちを取ってしまったというの、ほんとうなの？ もしカイちゃんを、かえしてくれたら、この赤い靴を、あなたにあげることよ！」という、不思議なことに、なんだか川の波が、うなずいたような気がしました。そこで、一番大切にしていた赤い靴をぬいで、両方とも川の中へ投げました。ところが、靴は岸の近くに落ちたものですから、小さい波が、すぐまたそれを岸のゲルダのところへ、押しかえしてきました。それはまるでゲルダの一番たいせつにしていくものを取るの、可哀そうだと、言っているようでした。なぜって、川はカイを取ってしまったのではないのですものね。けれども、ゲルダのほうでは、靴の投げかたが近すぎたのだと思えました。そこで、芦の中に浮かんでいるボートに乗って、その一番はずれまで行って、そこから靴を投げました。ところが、そのボートは、しっかりつないでなかったものですから、からだを動かしたとたん、するすると岸をはなれました。それに気がついて、いそいで岸にあがるうとしましたが、こちらのはしにもどらないうちに、もうボートは一メートル以上も岸からはなれていました。そして、そのまま、だんだん早くすべりだしました。(本文)

*

*

さて、ある朝、ゲルダは、「……わたし、あの新しい赤い靴をはいて行きましょう」と、言いました。「……あれは、カイちゃんにも、まだ見せなかつたわ。あれをはいて、川へ行つて、カイちゃんのことをたずねてみよう」と。そして、まだ夜が明けたばかりでしたが、ゲルダは、眠っているおばあさんに、そっとキスすると、赤い靴をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へ行きました」とある。――まず、アンデルセンの作品の中には、非常に頻繁に「靴」という「アイテム」(小道具)が登場してくるが、例えば、有名な『赤い靴』をはじめ、『マッチ売りの少女』の中にも、最近まで母親がはいていた大きな「木の靴」という形で出てくるものであり、それは、やはり、アンデルセンの「父親」が、実は貧しい「靴職人」であったことも関係はあるのだろう。

それはともかく、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、新しい「赤い靴」をはいて、たった一人で、町の門を出て、川へと行きました。そして、「……あなたが、わたしのお友だちを取ってしまったというの、ほんとうなの？ もしカイちゃんを、かえしてくれたら、この赤い靴を、あなたにあげることよ！」という、不思議なことに、なんだか川の波が、うなずいたような気がしました、とある。――例えば、川という存在が「赤い靴」をもたらしてそれを喜ぶかと問えば、もちろん、喜ぶはずがない。それでは、これは、一体、何なのかと問えば、それは、女主人公の「ゲルダ」にとって「一番大切にしていた赤い靴」(それは「彼女にとっての一番の宝物」)をあげるから、「……私の(何よりも大切な)カイちゃんを、かえして！」という「意味合い」になるのである。そして、最初は、その靴を岸の近くに投げたので、すぐまた岸に戻ってきてしまった。そこで今度は、「……芦の

中に浮かんでいたボートに乗って、その一番はずれまで行って、そこから靴を投げました。ところが、そのボートは、しっかりとつないでなかったので、からだを動かしたとたんにするすると岸をはなれました」となるのである。

つまり、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」が、川に「赤い靴」を投げるという（少し不自然な）行為は、結局、女主人公の「ゲルダ」を「ボート」へと乗せるためのものであり、それによって、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」は、その「ボート」に乗ったまま、どこへとも知れず、川をどんどん下流へと流されていくという、そういうハラハラドキドキするような展開がはじめて可能になるのであり、一方、若しも小さな女の子が自ら「歩きまわってカイを捜す」というような展開であれば、その「行動範囲」は余りにも限られた狭いものになってしまい、物語（ストーリー）としても広がりのないつまらないものになってしまうのである。

三、ゲルダを乗せたボートはそのまま川を下って……

さて、小さいゲルダは、びっくりして、泣きだしました。けれども、スズメたちのほかは、だれも聞いているものはありませんでした。といってスズメたちでは、ゲルダを岸につれて行くことはできません。そこで、岸にそって飛びながら、なぐさめるように、「……わたしたちはここよ！ わたしたちはここよ！」と、さえずりました。ボートは、流れのまにまに、川をくだって行きました。ゲルダは、靴下のまま、じっとボートの中にすわっていました。小さい赤い靴はあとから流れてきました、けれども、ボートのほうが、早いので、追いつくことはできません。

川の兩岸はきれいな景色でした。美しい花や、古い木々や、羊や牛のいる丘が見えました。けれども、人影はさっぱりありませんでした。「……もしかしたら、この川が、カイちゃんのところへ、わたしをつれて行ってくれるかもしれないわ」と、ゲルダは思いました。そう思うと、気もはればれとなって、ボートの中に立ちあがって、美しい緑の岸を、長いあいだながめていました。やがて、大きなサクラの園にさしかかりました。園の中には、赤と青に塗った奇妙な窓のある小さな家が一軒立っていました。屋根はわらぶきで、入り口には木の兵隊さんが二人立っていて、船で通る人たちに、担え銃の姿勢をしていました。ゲルダは、生きている兵隊さんだと思つて、声をかけました。けれども、もちろん、返事をするはずはありません。そのうちに、川の流れがボートを岸に近づけてくれて、すぐそのそばまできました。（本文）

*

*

さて、最初は、大変なことになってしまったと、泣いていた女主人公の「ゲルダ」も、川を下りながら、スズメたちになぐさめられたり、また、川の兩岸は、きれいな景色が広がり、例えば、美しい花や古い木々或いはまた羊や牛のいる丘などが見えましたが、一方、人影はさっぱりありませんでした。それでも、「……もしかしたら、この川が、カイちゃんのところへ、わたしをつれて行ってくれるかもしれないわ」と、そう思うと、ゲルダは、気もはればれとなって、心にも余裕ができてきて、ボートの中に立ちあがって、美しい緑の岸を長いあいだながめていたのでした。やがて、大きなサクラの園にさしかかり、そのサクラの園の中には、赤と青に塗った奇妙な窓のある小さな家が一軒立っていました。そ

れは、魔法を使う年老いたおばあさんの家でしたが、そのうちに、川の流れがボートを岸へと近づけてくれて、すぐそのそばまで来たということである。

四、魔法を使うおばあさんとの出遭い

さて、ゲルダは、もう一度、前よりも大きな声で叫んでみました。そうすると、家の中から、それはそれは年をとったおばあさんが、撞木杖にすがって出てきました。おばあさんは、きれいな花の絵をかいた大きな日よけ帽子をかぶっていました。「……おやまあ、可哀そうに！」と、おばあさんは言いました。「……こんな大きな、きつい流れの川を、よくまあこんな遠いところまできたものじゃな！」と、こう言っておばあさんは、水の中まではいってきて、撞木杖をボートにひっかけて、岸に引きよせました。そして、ゲルダを岸にあげてくれました。

ゲルダは、陸にあがれたので、うれしくはありましたが、この見たこともないおばあさんを、すこし気味わるく思いました。「……さあ、おいで。おまえはこの子だね。そして、どうしてここへ来たのだね、わたしに話してごらん」と、おばあさんは言いました。そこで、ゲルダは、なにもかも話しました。おばあさんは、頸をふりながら、「……ふん、ふん！」と言って、聞いていました。ゲルダは、すっかり話してしまっただけから、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねました。すると、おばあさんは、そんな子はまだここを通らないよ、けれど、いまにきつとくるだろうから、そんなに心配しないがいい。サクランボでもたべたり、花でもながめたりしておいで、ここに咲いている花は、どんな絵本よりもきれいで、おまけに、その一つ一つがお話をすることもできるんだよ、と言いました、それから、ゲルダの手をひいて、小さい家の中にはいりました。そして、入り口の戸をしめました。(本文)

*

*

さて、ここで大事なことは、まず、「撞木杖」というのは、いわば「T型の杖」のことであり、また、きれいな「……花の絵をかいた大きな日よけ帽子」をかぶっていましたとあるが、その「花の絵」の中には「バラの花」もあったということであり、そして、その年老いたおばあさんは、「……おやまあ、可哀そうに！ こんな大きな、きつい流れの川を、よくまあこんな遠いところまできたものじゃな！」と、こう言って、おばあさんは、水の中まで入ってきて、撞木杖をボートにひっかけて、岸に引きよせては、女主人公の「ゲルダ」という「女の子」を岸へと上げてくれました。

ゲルダは、陸に上がったので、うれしくはありましたが、この見たこともないおばあさんを少し気味悪く思いました。が、おばあさんは、「……さあ、おいで。おまえはこの子で、どうしてここへ来たのだね、わたしに話してごらん」と聞くので、ゲルダは、何もかも話したあとで、もしやカイちゃんを見かけませんでしたか、とたずねると、おばあさんは、そんな子はまだここを通らないが、いまにきつとくるだろうから、そんなに心配しないがいいよ。「……サクランボでもたべたり、また、花でもながめたりしておいで、ここに咲いている花は、どんな絵本よりもきれいで、おまけに、その一つ一つがお話をすることもできるんだよ」と言うのでした。それは、一体、なぜかと問えば、それは、この年老いたおばあさんは、実は「それらの花に魔法(の液)をかけていた」からであり、そし

て、ゲルダの手を引いて、小さい家の中に入り、入り口の戸を閉めたのでした。

五、魔法を使うおばあさんは……

窓はたいそう高いところにありました。そして、窓ガラスは赤やら青やら黄いろでしたので、お日様の光がいろいろの色になって、部屋へやの中に不思議な光がさしこんできました。テーブルの上には、それはみごとなサクランボがのっていました。ゲルダは、いくらでもお食べと、言われたものですから、好きなだけ食べました。こうして食べているあいだ、おばあさんは金のくしで、髪の毛をすいてくれました。すると、髪の毛は、波のようにちぢれて、美しく金色に輝きました。そして、バラの花のような、まるい可愛らしい顔のまわりにたれさがりました。——「……わたしは、とうから、おまえのような、可愛い女の子が、ほしかったんだよ」と、おばあさんは言いました。「……二人で、仲良くしていこうね！」、こうして、おばあさんがゲルダの髪をとかしているうちに、ゲルダはだんだん、仲よしのカイのことを忘れてゆきました。それは、このおばあさんが魔法を使うことができたからです。といっても、悪い魔法使ではなくて、ただ、自分の楽しみに、ちよつとばかり魔法を使うだけでした。この時も、可愛いゲルダを、手もとにおきたかっただけなのです。おばあさんは庭へ出て、撞木杖しゅもくづえをバラの木の茂みの方に、のばしました。すると、いままであんなに美しく咲いていたバラの花が、たちまち黒い土の中に沈んでしまつて、どこにそんなものがあつたか、見てもわからなくなりました。おばあさんは、もしゲルダがバラの花を見たら、自分のうちのバラの花を思いだし、それから、カイのことを思いだして、ここから逃げだしはしないかと、それが心配だったので。（本文）

*

*

さて、そのおばあさんの家の中なかは、高いところに窓があつて、その窓ガラスは赤や青や黄色でしたので、お日様の光がいろいろの色になって、部屋へやの中に不思議な光として射し込んで来ました、とある。（これはいかにも魔法使まほうつかひのおばあさんの部屋へやという感じになつていたのである）。そして、テーブルの上には、それは見事なサクランボがのつていて、いくらでもお食べと言われたので、好きなだけ食べたとある。（これはむろん、腹がすいていたからであるが、それとともに、このおばあさんへの疑い、や恐怖心などもあまりなかつたということである）。こうして食べているあいだ、おばあさんは金のくしで、髪の毛をすいてくれたが、髪の毛は、波のようにちぢれて、美しく金色に（魔法で変化して）輝きました。そして、バラの花のような、まるい可愛らしい顔のまわりに（髪は）垂れ下がりましたとある。（だとすれば、この女の子は丸い顔だったということである）。そして、「……わたしは、とうから、おまえのような可愛い女の子がほしかったんだよ」と、おばあさんは言いました。（この、可愛い女の子がほしかったというのは、このおばあさんの昔からの願望であるが、それとともに、ずっと一人暮らしなので、やはり誰か「話し相手」が欲しかったということにもなるのだらう）。そして、「……二人で、仲良くしていこうね！」といい、（これは女の子を監禁拘束するのではなく、むしろ自分の子供のように仲のよい関係を持ちたいということである）。こうして、おばあさんがゲルダの髪をとかしているうちに、ゲルダはだんだん、仲よしのカイのことを忘れてゆきました。それは、（一体、なせかと問えば）、このおばあさんは（実は）魔法を使うことができたからです。と

いっても、悪い魔法使いではなく、ただ、自分の楽しみにちよつとばかり魔法を使うだけでした。この時も、可愛いゲルダを手もとにおきたかっただけなのです。そこで、おばあさんは庭へ出て、撞木杖しゅもくづえをバラの木の茂みの方にのぼしました。すると、いままであんなに美しく咲いていたバラの花が、たちまち黒い土の中に沈んでしまつて、どこにそんなものがあつたか、見てもわからなくなりました。（それでは、なぜそのようなことをしたのかと問えば）、それは、おばあさんは、もしゲルダがバラの花を見たら、自分のうちのバラの花を思いだし、それから、カイのことを思いだして、ここから逃げだしはしないかと、それが心配だつたということである。つまり、いつまでも可愛いゲルダを手もとにおいておきたからだとということである。

六、おばあさんの庭にある花園

さて、ゲルダは、おばあさんにつれられて花園に出ました。——まあ、なんといいよいかおりでしよう！ なんといいよ美しさでしょう！ 花という花が、それも四季とりどりの花が、みないつしよに、いまをさかりと、咲き乱れていました。どんな絵本だつて、色どりがこんなに、はなやかで美しくはありません。ゲルダは、飛びあがつて喜びました。そして、お日様が、せいの高いサクラの木の上のうしろに沈むまで、遊んでいました。それから、青いスマレの花をつめた赤い絹のふとんの、きれいなベッドの中で眠りました。そして、ご婚礼の日の女王様のように、美しい夢を見ました。

あくる日も、暖かいお日様の光を浴びて花といつしよに遊びました。——こうして、いく日もいく日もすぎました。ゲルダは、今ではどの花も、みんなおぼえてしまいました。けれども、どんなにたくさん花があつても、どうしても、まだなにか一つ足りないような気がしてなりません。でも、それがなんの花だか、わかりませんでした。ある日のこと、ゲルダは、花の絵をかいたおばあさんの日よけ帽子をながめていました。その絵の中で一番美しいのは、バラの花でした。おばあさんは、庭のバラの花は残らず地面の下にかくしてしまいましたが、帽子にかいてあるバラの花を消すのを忘れていたのです。うっかりしていると、こうしたことがよくあるものですね。「……あら、そうだわ！」と、ゲルダは言いました。「……ここにはバラの花がないわ！」、こう言うと、花園の中へとびだしていつて、なんどもなんども、捜してまわりました。けれども、一つも見つかりません。ゲルダは、とうとうそこにすわつて、泣きだしてしまいました。すると、ゲルダの熱い涙が、ちょうどバラの木の沈んだ地面の上に落ちました。そして、温かい涙で土がうるおされますと、たちまち、バラの木が土を破つて出てきて沈む前とおなじように、きれいな花を咲かせました。ゲルダはそれに抱きついて、花にキスをしました。そのとたんに、うちにあつた美しいバラの花のことを思いだし、それといつしよに、小さいカイのことも思いだしました。（本文）

*

*

さて、主人公の「ゲルダ」は、おばあさんにつれられて花園に出ると、「……まあ、なんといいよいかおりでしよう！ なんといいよ美しさでしょう！ 花という花が、それも四季とりどりの花が、みないつしよに、いまをさかりと、咲き乱れていました。どんな絵本だつて、色どりがこんなに、はなやかで美しくありません。ゲルダは、飛びあがつて喜

びました。お日様が、せいの高いサクラの木のうちろに沈むまで、遊んでいました」とある。——むろん、この「花園」は、自然のままの草花ではなく、当然のことながら、おばあさんの「魔法がかかった花園」であり、だからこそ、「……なんというよい香りでしょう！　なんという美しさでしょう！　花という花がそれも四季色とりどりの花がみんな一緒に今が盛りと咲き乱れていて、どんな絵本でも色どりがこんなに華やかで美しくはありません」となるのである。——これは、むろん、主人公の「ゲルダ」をここにできるだけ引き留めておくためのものであるが、しかも、夜は、青いスミレの花をつめた赤い絹のふとんの、きれいなベッドの中で眠ったので、ご婚礼の日の女王様のように、美しい夢を見ました、と連なるのである。……それもこれも、みんないつまでも可愛いゲルダを手もとおいておきたかったからに他ならないのである。

こうして、来る日も来る日もいく日も過ぎしたので、女主人公のゲルダは、今ではもうどの花もみんな覚えてしまったが、どんなにたくさんのお花があっても、どうしてもまだ何か一つ足りないような気がしてならず、でも、それが何の花だかわからないままでしたとある。——これは、非常に「大事な感覚」(自覚)であり、例えば、若い時の釈迦なども、他人から見れば、すべてのことに恵まれていた人であったが、しかし、それらのものでは、結局、釈迦の「心」(魂)を真に「心の底から満たすものではなかった」のであり、それゆえ、「心」(魂)を真に満たしてくれるものを求めて「出家」をしているのである。

また、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、何をどうしてよいかよく分からず、あれこれ無為に過ごしてしまうことも多いかと思うが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真に「深く満たしてくれるもの」であるが、ある日、ある時、それは何かを「切っ掛け」として、突然、「……あつ、これだ！」「……自分が知らず識らずのうちに探し求めていたのは、ああ、これだったのだ！」というように、突然、あることに「思い至ること」はよくあることなのである。

それと同じように、ある日のこと、女主人公のゲルダは、花の絵をかけたおばあさんの日よけ帽子をながめているうちに、その絵の中で一番美しいのは、バラの花と気づくのである。つまり、おばあさんは、庭のバラの花は残らず地面の下に隠したが、帽子にかいてあるバラの花を消すのをすっかり忘れてしまったのである。「……あら、そうだわ！」と、ゲルダは言いました。「……ここにはバラの花がないわ！」と、こう言うと、花園の中へ飛び出して行って、何度も何度も捜してまわりました。けれども、一つも見つかりませんでした。ゲルダは、とうとうそこにすわって泣き出してしまいました。すると、ゲルダの熱い涙が、ちょうどバラの木の沈んだ地面の上に落ちました。そして、温かい涙で土がうるおされると、(これは「心の底からの涙」によっておばあさんがかけた魔法が解けてしまい)、たちまち、バラの木が土を破って出てきて沈む前と同じよう、きれいな花を咲かせました。ゲルダはそれに抱きついて、花にキスをしました。(バラは真実の花でもあり、それへのキスによって記憶の魔法も解けて)、そのとたんに、うちにあつた美しい「バラの花」のことを思い出し、それと一緒に「小さいカイ」のことも思い出しました、となるのである。

七、バラの花

さて、「……まあ、わたしっしたら、どうして、こんなところにぐずぐずしていたんでしよう！」と、ゲルダは言いました。「……カイちゃんを、捜しに出かけたのに。——ねえ、カイちゃんが、どこにいるか知らないこと？」と、バラの花にたずねました。「……カイちゃんは死んで、いなくなったと思う？」と聞くと、「……死んだではありませんわ」と、バラの花は言いました。「……わたしたち、今まで地面の下にいましたの。そこには死んだ人が、みな、いましたけれど、カイちゃんは見えませんでしたもの」と答えると、「ありがとう！」と、ゲルダは言いました。そして、こんどは、ほかの花のところへ行って、花びらの中をのぞきながら、「……カイちゃんがどこにいるか知らないこと？」と、たずねてまわりました。——ところが、どの花も日なたぼっこをしながら、うつらうつらと、自分たちのお話や物語ばかりを夢に見ていました。ゲルダは、そういうお話や物語を、たくさん聞かされましたが、カイのことを知っている花は一つもありませんでした。(本文)

*

*

さて、女主人公の「ゲルダ」は、おばあさんの魔法が解けると、「……まあ、わたしったら、どうして、こんなところにぐずぐずしていたんでしよう！」、「……カイちゃんを、捜しに出かけたというのに」と思い出して、そこでバラの花に、「……ねえ、カイちゃんが、どこにいるか知らないこと?」、「……カイちゃんは死んで、いなくなったと思う?」とたずねると、バラの花は、「……死んだではありませんわ」、「……わたしたち、今まで地面の下にいましたの。そこには死んだ人がみないましたけれど、カイちゃんは見えませんでしたもの」と答えるのでした。——つまり、バラの花だけが「事実(真実)を語る」のであり、ほかの花々は、「……どの花も日なたぼっこをしながら、うつらうつらと自分たちのお話や物語ばかりを夢に見ているだけで、カイのことを知っている花は一つもありませんでした」となるのである。——つまり、バラの花だけが「事実(真実)を語る」のであり、ほかの花々は、自分たちの「お話や物語」ばかりを夢に見ていて、それを語るだけという「展開」になり、それには、例えば、オニユリ、ヒルガオ、マツユキソウ、ヒヤシンス、タンポポ、スイセンなどの、それぞれの花の自分たちの「お話や物語」などが次々と語られていくが、この場面は、映画やドラマ或いは漫画やアニメその他などでは、多くの場合、省略されることも多いかと思うので、それゆえ、ごく簡単に説明をして終わりにしたいと思う。

八、オニユリ

では、火のようなオニユリは、なんと言ったのでしょうか。「……ドン! ドン! と、いう、太鼓の音がきこえるでしょう。あれは、たった二つの音しかないの。いつまでも、ドン! ドン! と。女たちの嘆きの歌をお聞きなさい。坊さんたちの叫び声をお聞きなさい。——長い真っ赤な衣装をまとったヒンズー人(インド人)の女が火葬のたきぎの上に立っています。炎が、女と死んだ夫のまわりに、燃えあがりました。けれど、ヒンズー人の女は、ぐるりととりまいている人々の中の一人の男の子のことを、心に思っていたのです。その男の目は、炎よりも熱く燃えています。その男の目の火は、やがて女のからだ

を灰に焼きつくす炎よりも、もっと強く女の心を燃やします。(女の)心の炎は、火葬の炎の中で、滅びてしまうでしょうか?」「……そんなこと、わたしには、わからないわ」と、ゲルダは言いました。「……これがわたしのお話なの」と、火のようなオニユリは言いました。(本文)

*

*

まず、このヒンズー人の女は、生きているのか、それとも、死んでいるのか、よく分からない。また、一人の男の子は、この女の子(息子)なのか、それとも、何か恋人(愛人?)なのか、それもよく分からない。——例えば、女の人も夫も死んでいて、その二人の親の「火葬」される様子を、一人の男の子(息子)が熱い思いで見守っているという状況なのか? それとも、この女の人は、まだ生きていて、生きながら火葬されようとしているのか? それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、この女の人は、何か「浮気や不倫」のような「罪」を犯して、そのために、まさに「火あぶりの刑」になろうとしているが、その「不倫相手」こそは、まさに「二人の男の子」であり、ヒンズー人の女は、ぐるりと取り巻いている人々の中のたった「一人の男の子」のことだけを心に思っているのであり、一方の、その男の子の目は、炎よりも熱く燃えていて、その男の目の火は、やがて女のからだを灰に焼きつくす炎よりも、もっと強く「女の心」を燃やします。その燃え上がる(女の)「心の炎」は、火葬の炎の中で滅びてしまうのでしょうか、それとも、滅びずに男の心の中に残るのでしょうか?」ということであり、それに対して、「……そんなこと、わたしにはわからないわ」と、ゲルダは言うのでした。——これは、ちろろん、火のような「オニユリ」という花から「連想」(イメージ)される「話」ということになるのだろう。

九、ヒルガオ

次に、ヒルガオは、「……狭い山道の上に突き出るように、昔の騎士の城がそびえています。茂ったツルニチニチソウが古びた赤い石壁の上を、葉を一枚一枚かさねながら、高いバルコニーのところまで、はいあがっています。そのバルコニーに美しい姫君が立っています。そして、手すりによりかかって、下の道を見おろしています。どのようなバラの花も、この姫君ほど清らかで美しくありません。風に運ばれてくるリングゴの花も、この姫君ほどかろやかではありません。おお、美しい絹の着物がさらさらと鳴っています!」、そして、姫君は、「……あの方は、こないのでしょうか?」と言うので、「……あなたのおっしゃるの、カイちゃんのこと?」と、ゲルダはたずねました。「……わたしは、ただわたしのお話を、わたしの夢をお話しただけよ」と、ヒルガオは答えました。(本文)

*

*

さて、今度は、狭い山道の上に突き出るように、昔の騎士の城が聳そびえていて、茂ったツルニチニチソウが古びた赤い石壁の上を、高いバルコニーのところまで這い上がっています。その城の高い「バルコニー」には、どのようなバラの花よりも美しい姫君が一人立っていて、手すりによりかかって、下の道を見おろしながら、「……あの方は、こないのでしょうか?」と、昼の間、ずっと「美しく咲いた」まま、ひたすら「恋しい人」を待っているという情景であるが、これも、やはり「ヒルガオ」という花から「連想」(イメージ)

される話になるのだろう。——つまり、茂る「ツルニチニチソウ」が、いわば「ヒルガオのつるや茎や葉っぱ」などであり、そして、そこに「輪美しく咲いている「ヒルガオの花」こそは、どのようなバラの花よりも清らかで美しい、まさに一人の「姫君」になるということである。

十、マツユキソウ（別名スズラン）

さて、次は小さなマツユキソウであり、「……木と木のあいだに、長い板が綱でつるしてあるのよ。それは、ブランコよ。二人の可愛らしい女の子が、——雪のように白い着物を着て、帽子には、長い緑色の絹のリボンをはらひらせながら……。——その二人の女の子は、ブランコしているのよ。その二人の兄さんは、ブランコに立って乗り、綱に腕をまきつけて、からだをささえているのよ。なぜって、片方の手には小さいお皿を、もう片方の手には陶製パイプを持っているからなの。こうして、シャボン玉を吹いているの。ブランコがゆれて、シャボン玉が、いろいろ美しい色にかわりながら飛んで行くことよ。一番おしまいシャボン玉は、まだパイプのさきにぶらさがって、風にゆられているわ。ブランコがゆれる。小さな黒い犬が、シャボン玉のようにかゝる、後足で立って、いっしょにブランコに乘ろうとしているわ。ブランコがゆれるので、犬がしりもちをついて、ほえて、おこっていることよ。からかわれているのだわ。シャボン玉がパチンとはじけたわ。——ゆらゆらゆれるブランコと、パチンとはじける水のあわ、これがわたしの歌なのよ。」

「……あなたのお話は、とてもおもしろそうね。けれども、あなたは悲しそうに話すのね。それに、カイちゃんの話は、なんにも言ってくれないわ。じゃ、ヒヤシンスさんはなんのお話？」と聞くのであった。（本文）

*

*

まず、「……二人の可愛らしい女の子が、——雪のように白い着物を着て、帽子には、長い緑色の絹のリボンをはらひらせさせて」とあるが、まず、「雪のように白い着物を着て」とは、白い「スズランの花」のことであり、そして、「二人の可愛らしい女の子」とは、「花の中」にいるいわば「雌蕊」のことであり、そして、白い「スズランの花」が風にゆらゆら揺れている様子を「ブランコ」にたとえているとともに、一方、スズランの「花の中」にいるのが一人の兄さん（いわば雄蕊）であり、それは、ブランコに立っている状態で、片方の手には小さいお皿を、もう片方の手には陶製パイプを持っていて、こうして、シャボン玉を吹いているの。この「シャボン玉」というのは、スズランの花に付いている「水滴」（露）のことであり、そして、白い「スズランの花」が風に吹かれて「ブランコ」のように揺れると、その「スズランの花」に付いている「水滴」（露）がゆれて、いわば「シャボン玉」のように飛び散るのよ、となるのである。——つまり、「ブランコ」とは、風にゆらゆら揺れている白い「スズランの花」のことであり、そして、「二人の女の子とその兄さん」とは、「花の中」にいるいわば「雌蕊と雄蕊」のことであり、そして、「シャボン玉」とは、その「スズランの花」に付いている「水滴」（露）が風にゆれて飛び散る様子になるのだろう。……ちなみに、「……帽子には、長い、緑色の絹のリボンをはらひらせながら……」とは、白い「スズランの花」をささえている緑色の「長い枝」のことである。（ただ、今日の科学では、「花の中」の「中央に一本あるのが雌蕊」、そして、ま

わりに「数本あるのが雄蕊」となるが、これは作者の勘違いなのか、それとも意図的なものなのかは、ファンタジーな話なのでどちらでもよいのだろう。

十一、ヒヤシンス

ヒヤシンスは、「……あるところに、三人の美しい姉妹がありました。三人とも、すきとおるようにきれいでした。一人は赤、一人は青、もう一人は、まっ白の着物をきていました。三人はお月様の明るい夜、静かな湖のほとりで、手をとりあっておどっていました。三人とも、妖精の娘などではなくて、人間の子でした。あたりには、甘いかおりがただよっていました。やがて、娘たちの姿は、森の中へ消えました。かおりは、ますます強くなりました。——三人の美しい娘を入れた三つの棺が、森の茂みから出て、湖の上をすべって行きました。ホタルがそのまわりを、小さなあかりのように光りながら飛んでいます。踊りをおどった娘たちは、眠っているのでしょうか、それとも、死んだのでしょうか？

——花のかおりは、こう言っています。あれは娘さんたちの、なきがらです。夕べの鐘が、死んだ人たちのために、鳴っています。」「……あなたのお話で、わたし、すっかり悲しくなってしまったわ」と、ゲルダは言いました。「……あなたのかおりは、強いね、わたし、その死んだ娘さんたちのことを思いださずにはいられないわ。ああ、だけどカイちゃん、ほんとうに死んでしまったのかしらん？ 地面の下に沈んだバラの花は、そんなことはないと言っているけれど。……「カラン、カラン！」と、ヒヤシンスの鐘が鳴りました。「……わたしたちは、カイちゃんのために鳴っているではありません。そんな人、知りませんわ。わたしたちは、ただわたしたちの歌をうたっているだけよ。わたしたちの知っているたった一つの歌よ」。(本文)

*

*

まず、ヒヤシンスには、「赤、青、黄色、そして、白の花」などが咲きますが、ここでは、「……あるところに、三人の美しい姉妹がありました。三人ともすきとおるようきれいでした。一人は赤、一人は青、もう一人は、まっ白の着物をきていました。三人はお月様の明るい夜、静かな湖のほとりで、手をとりあっておどっていました。三人とも、妖精の娘などではなくて、人間の子でした。あたりには、甘いかおりがただよっていました。やがて、娘たちの姿は、森の中へ消えました。かおりは、ますます強くなりました。——三人の美しい娘を入れた三つの棺が、森の茂みから出て、湖の上をすべって行きました。ホタルがそのまわりを、小さなあかりのように光りながら飛んでいます。踊りをおどった娘たちは、眠っているのでしょうか、それとも、死んだのでしょうか？ ——花のかおりは、こう言っています。あれは娘さんたちの、なきがらです。夕べの鐘が、死んだ人たちのために、鳴っています」とある。——これは、非常に美しい「情景」(描写)になっているが、ここで大事なことは、ヒヤシンスには、赤、青、黄色、そして、白の花が咲くこととから、(黄色を除いた)、三人の美しい姉妹という想像(イメージ)になり、また、ヒヤシンスは、かなり「甘いかおり」をまわりに漂わすこと、また、ホタルは、いわば彼女たちの「靈魂」であり、そして、なぜ「なきがら」(死んだ人)になるのかと問えば、それは、次のような古代「ギリシア神話」の中の物語によることになるのだろう。

さて、「ヒヤシンス」という名は、古代「ギリシャ神話」の「美少年」(ヒュアキント

ス)に由来するとある。そして、愛する「医学の神」(アポロン)と一緒に「円盤投げ」に興じていたが、その楽しそうな様子を見ていた「西風の神」(ゼピュロス)も「美少年」(ヒュアキントス)を愛していたので、やきもちを焼いて、意地悪な風を起こして、その風によってアポロンが投げた円盤の軌道が変わって、「美少年」(ヒュアキントス)の額を直撃してしまった。アポロンは「医学の神」の力をもって懸命に治療するが、その甲斐なく「美少年」(ヒュアキントス)は、大量の血を流して死んでしまう。「ヒアシンス」という花は、この時に流れた「大量の血」から生まれたとなっている。恐らく、そのような神話からの「連想」(イメージ)になるのだろう。

十二、タンポポの花

そこで、ゲルダは、タンポポのところへ行きました。タンポポの花は、つやつやした緑の葉のあいだから、輝いていました。「……小さい明るいお日様みたいなタンポポさん！」と、ゲルダは言いました。「……わたしのお友だちはどこにいるか、知っていたら教えてちょうだいな」と。すると、タンポポは、それは美しく輝いて、再びゲルダをながめさせた。タンポポは、どんな歌をうたったでしょうか。でも、それはカイのことではありませんでした。「……とある小さな中庭に、春のはじめのころ、神様のお日様が暖かく輝いていました。その光は、お隣りの家の白い壁を下の方まで、すべり落ちていました。その壁のそばに、春のさきがけの黄色い花がさいっていました。暖かいお日様の光を浴びて、輝いている黄金でした。年とったおばあさんが、椅子いすに腰かけて、日なたぼっこをしています。そこへおばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちよつと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました。口に黄金、朝の空にも黄金！ ねえ、これがわたしの小さなお話よ」と、タンポポは言いました。(本文)

*

*

さて、タンポポの花は、「……とある小さな中庭に、春のはじめのころ、神様のお日様が暖かく輝いていました。その光は、お隣りの家の白い壁を下の方まで、すべり落ちていました。その壁のそばに、春のさきがけの黄色い花(タンポポの花)が咲いていました。暖かいお日様の光を浴びて、黄金に輝いていました。年とったおばあさんが、椅子いすに腰かけて、日なたぼっこをしています。そこへおばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちよつと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました。口に黄金、地に黄金、朝の空にも黄金！ ねえ、これがわたしの小さなお話よ」とある。

まず、ここで「大事な文章」は、「……おばあさんの孫の、女中に行っている、貧しい美しい娘が、ちよつと、ひまをもらって帰ってきました。そして、おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました。口に黄金、地に黄金、朝の空にも黄金！」というところであり、それは、次のようなことである。つまり、(恐らく一人で暮らす)おばあさんにとって、孫の、女中に行っていて、ちよつと、ひまをもらって帰ってきた、貧しい美しい娘こそは、まさに黄金に輝くかわい「タンポポの花」でもあり、その孫に会えることは非常にうれい、ことであり、しかも、その孫娘まじむすめ

は、「……おばあさんにキスをしました。このめぐまれたキスには、黄金が、まごころの黄金がありました」とあるが、これは、「……おばあさんのことを心から愛し、心から心配し、心から気づかっている真まごころの輝きがあつた」ということであり、口に黄金とは、愛情のこもったキスややさしい言葉、地に黄金とは、春のさきがけの黄色い花（タンポポの花）や心やさしい孫娘まごむすめの存在、そして、朝の空にも黄金とは、暖かいお日様の黄金の光、そのお日様の黄金の光を浴びて日なたぼっこをしている、（恐らく一人で暮らす）おばあさんにとって、今はまさにこの上もない「幸せな状態」にあるということである。

十三、ゲルダは……

さて、ゲルダは、「……ああ、お気のどくなおばあさん！」と、ため息をつきました。「……そうよ、きつと、わたしのことをおもって、悲しんでいらつしやるわ。ちようど、カイちゃんがいなくなつた時のように。でも、わたし、じきに、うちへ帰るわ。カイちゃんをつれて。——花たちにたずねても、なんにもならないわ。みんな、自分の歌ばかりうたつていて、わたしには、なんにも教えてくれないんですもの」。こう言いながら、ゲルダは、はやく走れるように、可愛い着物のすそをからげました。ところが、スイセンの上をとり越した時、それがゲルダの足を打ちました。ゲルダは立ちどまって、細長い黄色い花を見て「……なにか知つてるとでもいうの？」と、言いました。そして、スイセンのほうへからだをかがめました。では、スイセンはなんと叫んだでしょう。（本文）

*

*

さて、女主人公のゲルダは、タンポポの花の話から、家に残したきたおばあさんのことを思い出して、「……ああ、お気のどくなおばあさん！」「……そうよ、きつとわたしのことを思つて悲しんでいらつしやるわ。ちようどカイちゃんがいなくなつた時のように。でも、わたしじきにうちへ帰るわ。カイちゃんを連れて。——花たちにたずねても何にもならないわ。みんな自分の歌ばかりうたつていて、わたしには何にも教えてくれないんですもの」。こう言つて、ゲルダは、はやく走れるように可愛い着物のすそをからげました。が、スイセンの上をとり越した時、それがゲルダの足を打ち、ゲルダは立ちどまって、細長い黄色い花を見て「……なにか知つてるとでもいうの？」と聞くのでした。では、スイセンは何と言つたでしょうと続くのである。

十四、スイセン

スイセンは、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることができるよう！」と、言いました。「……まあ、まあ！　なんて、わたしは、いいにおいなんでしょう——上の屋根裏やねうらの小さな部屋へやに、可愛い踊り子が、衣装いしやうをなかばつけて立っていますよ。踊り子は片足で立ったり、両足で立ったりしています。こうして、世界じゆうを、トントンと踏ふんでいるのです。でも、幻みたいなのですよ。踊り子は、手に持っている布ぬいにティーツトから水をそそいでいます。それはコルセットです。——きれいな好きは、よいことですよ！　白い上着が、くぎにかかっています。これもティーポットの中で洗つて、屋根の上でかわかしたのです。それを踊り子はきて、サフラン色のスカーフを首にまきます。そ

うすると、上着は、いちだんと白く輝きます。足をあげて！ ほら、一本の茎の上に、す
らりと立ったところをごらんなさい！ わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ること
ができるのよ！」。「……そんなこと、どうだつてかまわないわ」と、ゲルダは言いました。
「……わたしに、わざわざ話すほどのことじゃないわよ。こう言つて、庭のはずれまで、
走つて行きました。(本文)

*

*

さて、スイセンは、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見ることのできるのよ！」
と言っているが、これは、恐らく、「……遠い古の神話のナルキソスは、水面に美しく
映える麗しき己がその姿に恋こがれては、その場から一時も離れずに、水面に映る己が
姿を見入るといふ、その恋ゆえに、やがて若きその身はその場で朽ち果て、その朽ち果
てしナルキソスの場所からは、一輪の水仙の花の姿となりて蘇る」といふ神話にある
ように、スイセンの花というのは、水面に映る麗しき「己が姿」を見ているのである。

次に、「……上の屋根裏の小さな部屋に、可愛い踊り子が、衣装をななばつて立つて
いますよ。踊り子は片足で立ったり、両足で立ったりしています。こうして、世界じゅう
を、トントンと踏んでいるのです。でも、幻みたいなものですよ。踊り子は、手に持つて
いる布にティーポット(いわば雨)から水をそそいでいます。それはコルセット(いわば
花びらをまとめている部分)です。——きれいはきは(汚れを水で落とすことは)、よい
ことですよ！ 白い上着が、くぎにかかっています。これもティーポット(いわば雨)
の中で洗つて、屋根の上でかわかしたのです。それを踊り子はきて、サフラン色のスカ
ーフを首にまきます。そうすると、上着は、いちだんと白く輝きます。足をあげて！ ほら、
一本の茎の上に、すらりと立ったところをごらんなさい！」とある。——これは、「スイ
センの花」をいわば「踊り子」に見立てているのであり、片足(一本の茎)で立ったり、
両足(二本の茎)で立ったりして、風に吹かれて動いている「スイセンの花」の姿は、ど
こか「踊り子」に似ているということであり、また、「……白い上着で、サフラン色のス
カーフを首にまく」とあるが、これは、いわば「花びら」が「白色」であり、そして、「中
央」が「サフラン色(黄色)」ということになるのだらう。——一方、女主人公のゲルダ
という「女の子」は、スイセンの花の、「……わたしは、自分が見えるのよ。自分を見る
ことのできるのよ！」と言ふことに対して、「……そんなこと、どうだつてかまわないわ
」と言ひ、また、「……わたしに、わざわざ話すほどのことじゃないわよ」と、こう言つて、
庭のはずれまで走つて行くのでした。

十五、おばあさんの庭の戸から外へと……

庭の戸は閉まっていました。けれども、さびついたかすがいをゆさぶると、それが、は
ずれて、戸があきました。そこで、ゲルダは、はだしのまま、広い世の中へ駆けだしまし
た。そして、三度も、あとをふりかえつてみましたが、だれも追いかけてくる様子はあり
ません。とうとう、もうこれ以上走ることができなくなつて、かたわらの大きな石の上に
腰をおろしました。そして、ふとあたりを見まわしますと、いつのまにか夏はどうに過ぎ
て、秋もだいぶ深まっていました。あの美しい花園にいたのでは、それに気づくはずはあ
りませんでした。あそこでは、いつもお日様が輝いていて、四季の花がとりどりに咲いて

いるものですか。「……まあ、たいへん。ずいぶん、道草をくってしまったわ」と、ゲルダは言いました。「……もう秋になってしまったのね。休んでなんかいられないわ！」と、そこで、立ちあがって、また歩きだしました。ああ、ゲルダの小さな足は、どんなにか傷つき、そして、疲れはてたことでしょう！あたりを見まわしても、目にうつるのは、わびしく、さむざむとしているものばかりでした。細長いヤナギの葉は、すっかり黄色になって、霧がその葉から水玉になって、したたっていました。葉が一枚、また一枚と散っていました。ただ、リンボクだけが、口がまがりそうな、すっぱい実をつけていました。ああ、見渡すかぎり、なんと灰色の陰鬱な世界でしょう！（本文）

さて、女主人公のゲルダは、魔法を使うおばあさんの庭園から、やっと逃げ出すことになるが、それは、「……庭の戸は閉まっていたが、さびついたかすがいをゆさぶると、それが外れて戸が開きました。そこで、ゲルダは、裸足のまま広い世の中へと駆け出して、三度もあとを振り返って見ましたが、誰も追いかけてくる様子はありませんでした」とある。——これは、魔法を使うおばあさんは、可愛いゲルダを強制的に監禁拘束するつもりは全くなく、女主人公のゲルダが出て行きたいと心からそう願うならば、その「ゲルダの心」（意志）にまかせて、いたということである。そして、やがて、とうとうもうこれ以上走ることができなくなり、かたわらの大きな石の上に腰を下ろしてふとあたりを見まわしますと、いつのまにか夏はどうに過ぎて、秋もだいぶ深まっていたのでした。

それは、あの（魔法のかかった）美しい花園にいたのでは、それに気づくはずはありませんでした。あそこでは、いつもお日様が輝いていて、四季の花がとりどりに咲いているのですから。女主人公のゲルダは、「……まあ、たいへん。ずいぶん道草をくってしまったわ」、「……もう秋になってしまったのね。休んでなんかいられないわ！」と、再び、立ち上がって、また歩き出しました。ああ、ゲルダの小さな足は、どんなにか傷つき、そして、疲れ果てたことでしょう！あたりを見まわしても、目にうつるのは、わびしく、さむざむとしているものばかりでした。細長いヤナギの葉は、すっかり黄色になって、霧がその葉から水玉になって、したたっていました。葉が一枚、また一枚と散っていました。ただ、リンボクだけが、口が曲がりそうな、すっぱい実を付けていました。ああ、見渡す限り、なんと灰色の陰鬱な世界でしょう、となるのである。——これは、女主人公のゲルダが自分の家を出たのは、春であり、それから川を下って魔法を使うおばあさんの家で一緒に時を過ごすことになるが、それは、春から夏、そして、夏から秋、しかも今はすでに「晩秋」になってしまったという「時の経過」を、女人公のゲルダの「心の声」（せりふ）とともに、まわりの風景の様子で具体的に表現（描写）していることになるのである。

*

*

四、第四のお話
王子と王女

四、第四のお話

王子と王女

一、冒頭の文章

さて、ゲルダは（疲れて）また休まなければなりません。すると。ゲルダが腰を下ろしたちようど向こうの雪の上を、一羽の大きなカラスがびよんびよんと飛んでいました。その時、カラスは立ちどまって、長いことゲルダの顔を見ていましたが、やがて頭をゆらゆらさせながら、「……カア！ カア！ こんにちは、こんにちは！」と、言いました。これより上手には言えなかったのです。けれども、この小さな女の子が好きになったので、こんな広い世の中をたった一人ぼっちでどこへ行くの、とたずねました。この、一人ぼっち、という言葉は、ゲルダにもよくわかって、その中に含まれているいろいろの意味をしみじみと感じました。そこで、これまでの身の上をすっかり話して聞かせました。そして、もしやカイちゃんを見かけませんか、とたずねました。（本文）

*

*

さて、これが「第四話」（王子と王女）の冒頭部分であり、女主人公のゲルダが疲れて石の上に腰掛けていると、ちようど向こうの雪の上を、一羽の大きなカラスがびよんびよんと飛びはねていたが、その時、カラスは立ちどまって、長いことゲルダの顔を見ていました。やがて、「……カア！ カア！ こんにちは、こんにちは！」と言ひ、この小さな女の子が好きになったので、こんな広い世の中をたった一人ぼっちでどこへ行くの、とたずねてみると、女主人公のゲルダは、これまでの身の上をすっかりカラスに話して聞かせ、そして、もしやカイちゃんを見かけませんか、とたずねるのでした。——これが一羽の大きな「カラス」と女主人公「ゲルダ」との最初の「出遭い」であり、ここから、まさに「一羽のカラスと一人の女の子」の旅と会話が続くことになるのである。……ちなみに、「二人ぼっち」という言葉は、やさしいおばあさんも大好きなカイちゃんも、その他、親しい人たちも誰もいないという状況であり、その「心細さや寂しさその他」などを身をもってしみじみと感じていたということである。それゆえ、この一羽の大きな「カラスと、の出遭い」は、女主人公（ゲルダ）にとつては、非常に「嬉しいことだった」に違いない。

二、一羽のカラスからの新たな情報

さて、カラスは、もつともらしくうなずいて、「……あれかもしれん！ あれかもしれん！」と言うので、「……まあ、ほんと！」と、ゲルダは思わず大きな声で言いました。そして、カラスを息が詰まるほど強く抱きしめてキスをしました。「……落ちついて、落ちついて！」と、カラスは言いました。「……僕は、あれがカイちゃんじゃないかと思えますよ。でも、今では王女様のことと頭がいっぱいで、あなたのこととは忘れてしまつたらしい。」「……カイちゃんが王女様のところにいるんですって？」と、ゲルダはたずねました。「……さよう！ まあ、お聞きなさい」と、カラスは言いました。「……だが、あなたたちの言葉で話をするのは、どうも骨が折れるよ。あんたにカラスの言葉がわかるのだったら、もつとうまく話せるんですがね！」と言うと、「……そうね、でも、それは、

ならわなかったのよ」と、ゲルダは言いました。「……おばあさんだったら、わかるんですけど、それにおばあさんは赤ちゃんの言うこともわかるのよ。あたしもならっておけばよかったわね」。(本文)

*

*

さて、カラスは、「……あれかもしれない！ あれかもしれない！」と言うと、「……まあ、ほんと！」と、ゲルダは思わず大きな声で言っつて、カラスを息が詰まるほど強く抱きしめてキスをしました。すると、「……落ちついて、落ちついて！」と、カラスは言い、「……僕は、あれがカイちゃんじゃないかと思えますよ。でも、今では女王様のことと頭がいっぱいで、あなたのことは忘れてしまつとるらしい」と言うのでした。女主人公のゲルダは、「……カイちゃんが女王様のところにいるんですって？」とたずねるので、「……さよう！ まあ、お聞きなさい」と、カラスは言いました。そして、興味深いのは、ここからであり、それは、「……だが、あなたたちの言葉で話をするのは、どうも骨が折れるよ。あなたにカラスの言葉がわかるのだつたら、もつとうまく話せるんですがね！」と言うのであった。——まず、カラスは、まさに「鳥類」であり、それゆえ、本来、人間の「言葉」を話すことはできない。(でき得るのは、オウムのように言葉を真似るだけである)。ところが、童話や絵本或いは漫画やアニメ、その他などでは、例えば、イヌやネコ或いはその他の動物や植物、時には、人工物までが、まるで人間のように平気で言葉をしゃべったり、また、われわれ人間と対等に会話をしたりするものである。それは、もちろん、いわゆる「ファンタジー」ということになるが、それでは、その「ファンタジー」は、一体、どこから生じて来るのかと問えば、それはもちろん、われわれ人間の「頭の中」(或いは「心の中」)からであり、それは、われわれ人間の「思考(思索)能力」(つまり「人間の脳」)が持ち合わせている「空想(想像)能力」の素晴らしさであり、われわれ「人間の脳」というのは、現実を遙かに超越した「超次的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということであり、例えば、過去、現在、未来という、まさに「時空」を、あつという間に自由自在に「行き来」でき得る「タイムマシン」を持ち合わせていて、どのような時代、どのような場所、あるいは、どのような人間、動植物、恐竜、自然、宇宙、その他、何にでも、あつという間に会つたりでき得るのである。例えば、宇宙空間を自由自在に行き来できるのはじめ、恐竜がいた時代、古代エジプトのピラミッド時代、その他の、ありとあらゆる時代とあらゆる場所、また、未来社会のありとあらゆる場所とあらゆる空間、その他、その人が「空想や想像」の翼を拡げさえすれば、あつという間に自由自在に行き来ができるということである。そして、そういう、われわれ人間の「思考(思索)能力」(つまり「人間の脳」)が持ち合わせている、現実を遙かに超越した「超次的思考」が何の苦もなく平気ででき得るということが、結果として、今日のようなかなり高度な「文化・文明」などを築き上げることを可能にして来た「最大の理由」の一つにもなるのだから。——それはともかく、一羽のカラスは、あなたにカラスの言葉がわかるのだつたら、もつとうまく話せるんですがね！」と言うと、「……そうね、でも、それは、ならわなかったのよ」と、ゲルダは言いました。

三、この国の女王様の結婚相手(花婿)選び

さて、カラスは、「……なに、かまいませんよ」、「……できるだけやってみましょう。けれども、うまく話せるかどうか?」、こう言つて、カラスは知っていることを話しはじめました。それは、「……今、僕たちのいるこの国に一人の王女様がおいでです。たいへんおりのかたでね、世界中の新聞をみな読んでしまつて、それをまた、忘れてしまうという、まあそれほどおりこうなかなんです。ついこのあいだ、王女様は、王座におつきになったんだけど、ただそれだけじゃ、ちっとも面白くないんだつてね。みんなが言つてるんですよ。そこで王女様は、ふと、こんな歌を口ずさみました。その歌というのは、『どうして、わたしは結婚してはいけないの』といったようなものでした。『……そうよ、この歌のとおりだわ』と、王女様は言つて、結婚なさろうと思つたんです。しかし、お嬢さんになる人は、話しかけられたら、すぐ答えられる人でなくてはいけないんです。ただ上品ぶつて突つ立っているばかりではだめなんです。だつて、そうでしょう。そんな人は、退屈ですからね。そこで、女官たちを太鼓をたたいて集めさせました。みんなは、王女様の心持ちを聞いて、とても喜んで、『……それはけっこうなことですわ!』と言いました。『……わたくしも、このごろ、そのようなことを考えておりましたの』つて。——僕のことを、いちいちほんとうのことなんですよ」と、カラスは言いました。「……実を言つと、僕には人間に飼われている許嫁がいましてね。それがお城の中を自由に歩きまわることができるもんだから何もかも話してくれたんです」。(本文)

*

*

さて、カラスの話だと、「……今、僕たちのいるこの国に一人の王女様がいいて、それは、大変おりの口の方であつて、世界中の新聞をみな読んでしまうほどであるが、それに加えて、ついこの間、王女様は、王座にお就きになりましたが、それだけでは少しも面白くないということ、王女様は、結婚したいと思つたようになります。しかし、結婚相手(お嬢さん)になる人は、話しかけられたら、すぐ答えられるような人でなくてはずならず、ただ上品ぶつて突つ立っているばかりではだめであり、そんな人は、退屈だけであるからです。そこで、女官たちを集めて、そのことを告げると、とても喜んで、「……それはけっこうなことですわ!」と言つたのです。——この僕の話すことは、いちいちほんとうのことであり、それは、「……実を言つと、僕には人間に飼われている許嫁がいいて、それがお城の中を自由に歩きまわることができると、何もかも話してくれたんです」となるのである。——まず、一人の王女様がいいて、それは、大変おりの口の方であり、世界中の新聞をみな読んでしまうほどであるが、ごく最近、王座にもお就きになり、また、結婚したいと思つたようになりますが、ここで大事なのは、その「結婚相手」(お嬢さん)になる人の「条件」としては、王女様自身、大変おりの口な方なので、それゆえ、「……話しかけられたら、すぐ答えられるような人でなくてはならず、ただ上品ぶつて突つ立っているばかりではだめであり、そんな人は、退屈なだけだから」と言つたのです。しかも、この話をしているカラスには、人間に飼われている許嫁がいいて、それがお城の中を自由に歩きまわることができるので、何もかも話してくれたということである。

四、王女様の結婚相手を新聞で募集する

さて、その許嫁といふのは、言うまでもなく、やはりカラスでした。なぜなら、類は

友を呼ぶといひますからね。「……そこでさつそく、ハート型と、王女様の頭文字とで、縁どつた新聞が出たんです。それには、姿のりっぱな青年なら誰でもお城へ来て、王女様とお話することができる、そして、その話ぶりが退屈でなく、しかも一番上手にできた人を、王女様は、お婿さんに選ぶと、こう書いてあるんです。——そうなんです。そうなんです！」と、カラスは言いました。「……僕のいうことを信じてください。これは、僕がここにいるのと同じように、たしかなことなんです。さて、人々はぞろぞろやってきました。それはたいへんな混雑でしたよ。ところが、最初の日も、その次の日も、うまくいったものは一人もありませんでした。往来にいるうちこそ、みんなは、よくおしゃべりができましたが、いったんお城の門にはいつて、銀づくめの番兵を見たり、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あったり、明るいきらきらした大広間に通されたりしますと、もう、ぼうつとなつてしまうのです。いよいよ王女様のいらっしゃる王座の前に立ちますと、王女様の言った一番おしまいのことばを繰り返すのが関の山です。でも王女様は、ご自分のいった言葉を、もう一度聞く必要はありませんからね。その場へ出ますと、まるでかぎタバコをおかになに呑みこんで、気が遠くなつてしまうようでした。往来へまた出るまでは、そうなんです。そして、外へ出ると、またもや、ぺらぺらおしゃべりができるのです。人々の列は、町の門からお城までつづきました。僕もそこへ行つて、自分が見てきたんですよ」と、カラスは言いました。「……みんなは、おなかはへる、のどはかわく、けれども、お城ではなまぬるい水一杯もらえませんが。なかに頭のいい連中がいて、バターパンを持つてきたものもあります、隣りの人にわけてやろうなどとはしませんでした。それは、ああして、ひもじそうな顔をしているがいい、そうすれば、王女さまもこの男をお選びにはなるまい、と、こんふうに考えていたからなんです」。(本文)

さて、カラスの許嫁とは、むろん、まさに同類の「雌ガラス」になるが、それはともかくも、さつそく、「……ハート型と王女様の頭文字とで縁どつた新聞が出るが、それには、姿のりっぱな青年なら誰でもお城へ来て、王女様とお話することができる、その話ぶりが退屈でなく、しかも一番上手にできた人を、王女様は、お婿さんに選ぶ」と、こう書いてあったのです。——すると、人々はぞろぞろやってきて、それはたいへんな混雑でしたが、最初の日も、その次の日も、うまくいったものは一人もいませんでした。……というのも、往来にいるうちこそ、みんなはよくおしゃべりができましたが、いったんお城の門に入つて、銀づくめの番兵を見たり、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あったり、明るいきらきらした大広間に通されたりすると、もうぼうつとなつてしまうのです。いよいよ王女様のいらっしゃる王座の前に立つと、王女様の言った一番おしまい言葉を繰り返すのが関の山であり、でも王女様は、ご自分のいった言葉をもう一度聞く必要はないですからね。その場へ出ると、まるでかぎタバコをお腹に呑みこんで、気が遠くなつてしまうようでした。往来へまた出るまでは、そうなんです。そして、外へ出ると、またもや、ぺらぺらおしゃべりができるのです。——これは、当然、余りに過度の「緊張感と圧迫感」その他などで押しつぶされてしまい、本来の自然な「対応や思考」などが想うように出来ない、そのような「心理状態」に深く陥つてしまったということである。

そして、人々の列は、町の門からぼうつとお城まで続いています、僕もそこへ行つて、自分で実際見てきたんですよ、とカラスは言いました。「……みんなは、おなか減るわ、

のどは渴くわ、けれども、お城ではなまぬるい水一杯もらえません。なかには頭のいい連中がいて、バタパンを持ってきたものもあるが、隣りの人にわけてやろうなどはしませんでした。それは、「……ああして、ひもじそうな顔をしているがいい、そうすれば、王女様もこの男をお選びにはなるまい」と、そう考えていたからです。——これは、むろん、いわばお互いがお互い「恋敵」(或いは「ライバル同士」)であって、少しでも「自分」が王女様を選ばれるようにと、まさに「自分の状態」(条件)などを少しでもよくし、一方、他の「人たちの状態」(条件)などを少しでも悪くして、それらの「競争相手」に何が何でも勝ちたいというような「心理状態」でもあるのだろう。

五、一人の少年が三日目にお城にやってきた

さて、女主人公のゲルダは、「……で、カイちゃん、カイちゃんのこととは?」、「……いつきたの、その人ごみの中にいたの?」と聞くので、「……まあ、しばらく、しばらく、もうすぐその話になるですよ。さて、三日目のことでした。一人の少年が馬にも馬車にも乗らないで元気いっぱいにお城をめざして歩いてきました。その目はあんたの目のように輝いていました。それから長い美しい髪の毛をしていました。けれども、着物はみすぼらしかったのです。すると、「……カイちゃんだわ!」と、ゲルダはうれしそうに叫びました。「……ああ、とうとう見つかったわ!」と、こう言って、手を打って喜びました。「……背中小さなランドセルをしょっていましたっけ」とカラスが言うと、「……いいえ、それはきつと櫛よ!」と、ゲルダは言いました。「……櫛を持ったまま、どこかへ行ってしまったんですもの。」「……そうかもしれないですね!」と、カラスは言いました。「……僕は、そうよく見たわけじゃないんですから。けれども、ぼくの許嫁の話によると、その少年はお城の門をくぐって、銀ずくめの番兵を見ても、階段をのぼって金ぴかのお役人に出あっても、少しもびくびくしなかったそうですよ。それどころか、その人たちにうなずいてみせて、『……そうして階段に立っているのは退屈でしょう。では、僕は奥へ行きますよ』と言ったんですって。広間にはあかりがきらきら輝いていて、顧問官や大臣たちがはだしで金のうつわを運んでいました。これを見ては、誰だっておごそかな気持ちにならないではいられないでしょう。それなのに、この少年の靴ときたら、おそろしく大きな音をたてて鳴るんですって。それでも、いっこう怖がらなかったそうですよ。(本文)

さて、女主人公のゲルダは、何よりも「大好きなカイちゃんの話」が聞きたいのであり、それゆえ、「……で、カイちゃん、カイちゃんのこととは?」、「……いつきたの、その人ごみの中にいたの?」と、せわしく聞くと、「……まあ、しばらく、しばらく、もうすぐその話になるですよ」と言って、次のように話を続けるのです。

それは、「……さて、三日目のことでした。一人の少年が馬にも馬車にも乗らないで元気いっぱいにお城をめざして歩いてきました。その目はあんたの目のように輝いていました。それから長い美しい髪の毛をしていました。けれども、着物はみすぼらしかったのです」と言うと、「……カイちゃんだわ!」と、うれしそうに叫び、「……ああ、とうとう見つかったわ!」と、こう言って、手を打って喜びました。——さて、少年は、馬にも馬車にも乗らず歩いてきた。だとすれば、あまり「裕福」ではないという「一つの目安」に

はなるが、断定はできない。また、その目は「輝いていた」とすれば、何らかの強い「意志や志」などを持っていたのかも知れない。また、長い美しい髪の毛は、その人の一つの特徴であり、そして、着物はみずぼらしかったとすれば、それは、やはりあまり「裕福」ではないという「一つの証拠」になるが、それは、もし裕福であれば、当然、これから「王女様」にお会いするのにふさわしい「真新しい正装」に着替えるに違いないからである。そして、この話を聞いて、女主人公のゲルダは、「……カイちゃんだわ!」と、叫ぶことになるが、それには「確証」(つまり「揺るぎない確たる証拠」)はないが、そう思いたい気持ちでいっばいだ、たということになるのだろう。

ところが、すぐその後、「……背中に小さなランドセルをしょっていましたっけ」と、カラスにそう言わせることで、作者(アンデルセン)は、その少年がゲルダが捜し求めている「カイ」ではないことを(読者には)暗に示しているとともに、当のゲルダも、「……いいえ、それはきつと櫛よ!」、「……櫛を持ったまま、どこかへ行ってしまったんですもの」と言いながらも、その少年が「カイ」だと思ひ込みたいのである。そこで、「……そうかも知れませんか!」と、カラスは言い、「……僕は、そうよく見たわけじゃないんですから。けれども、ぼくの許嫁の話によると、その少年はお城の門をくぐって、銀ずくめの番兵を見ても、階段をのぼって金びかのお役人に出あっても、少しもびくびくしなかったそうですよ。それどころか、その人たちにうなずいてみせて、『……そうして階段に立っているのは退屈でしょう。では、僕は奥へ行きますよ』と言ったんですって。広間にはあかりがきらきら輝いていて、顧問官や大臣たちがはだし(音を立てない)で金のうつわを運んでいました。これを見ては、誰だっておごそかな気持ちにならないで鳴るんですって。それでも、いっこう怖がらなかったそうですよ」とある。——つまり、この少年は、何を見聞きしても何ら「物怖じ」(動じる)こともなく、非常に強い「意志や志」などを持つていたということである。それに比べて、今までの人たちというのは、余りに過度の「緊張感と圧迫感」その他などで押しつぶされてしまい、本来の自然な「対応や思考」などが想うように出来ない、そのような「心理状態」に深く陥ってしまったということである。

六、少年と王女様との出会い

さて、ゲルダは、「……確かにカイちゃんだわ!」、「……カイちゃんが新しい靴を持っていたの、わたし知っているわ。おばあさんの部屋で、キュッ、キュッと鳴ったのを聞いたことがあるわ」と言うと、「……そうです。キュッ、キュッって鳴ったんです」と、カラスは言いました。「……それから、元気よく王女様の前へ進みました。王女様は紡ぎ車ほどもある大きな真珠に腰かけていました。まわりには、女官たちが自分たちの小間使いと、そのまた小間使いの小間使いとを連れて、また、貴族たちが自分たちの小間使い、そのまた召使いとを連れてずらりと並んでいました。その召使いがまたボーイを連れてくるんです。そして、入り口に近く立っている者ほど、偉そうにしていました。召使の召使に仕えているボーイなぞは、いつもスリッパで歩きまわっているくせに、この時はとても顔さえじかに見られないくらい、偉そうに入り口に立っているんです」。……まあ、どん

なに怖かったでしょうね」と、ゲルダは言いました。「……で、カイちゃんは王女様と結婚したの？」と聞くのでした。(本文)

*

*

さて、この場面は、王女様は紡ぎ車^{つむぐるま}ほどもある大きな真珠^{まゝ}に腰かけているのを初めとして、女官たちは、自分たちの小間使いと、そのまた小間使いの小間使いとを連れて、また、貴族たちは、自分たちの召使いと、そのまた召使いとを連れて、ずらりと並んでいました。その召使いがまたボーイを連れていて、入り口に近く立っている者ほど、偉そうにしていました。そのような実に数多くの貴族や女官或いは役人や召使いなどがいる前で、この少年は王女様に謁見^{えつけん}(お会いした)ということである。——すると、女主人公のゲルダは、「……まあ、どんなに怖かったでしょうね」、「……で、カイちゃんは王女様と結婚したの？」と聞くのでした。

七、二人の出会いの結果は？

さて、カラスは、「……僕だつてカラスでなかったら、王女様と結婚しますよ。たとえ僕が婚約していてもですよ。その人は、僕がカラスのことばで話す時のように、すらすらと上手に話をしたそうですよ。これは、許嫁^{いいなすけ}から聞いたんです。少年は元気な、可愛らしい人でした。お城へきたのも、決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思ってきました。ところが、少年は王女様が気に入る、王女様のほうでも少年が気に入ったというわけなんです」。

すると、女主人公のゲルダは、「……そうだわ、きっとそうよ！ その人、カイちゃんだわ!」、「……カイちゃんは、とても利口で、分数の暗算だつてできるんですもの!」
と言い、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてつてちょうだいな」と頼むと、「……さあ、口で言うのは、たやすいことですがね」と、カラスは言い、「……さてと、どうしたらいいかしらん。ひとつ、ぼくの許嫁^{いいなすけ}と相談してみましよう。何かいい知恵を貸してくれるかもしれません。というのはね、あんたのような小さい娘さんは、お城へ入ることとても許されないうですよ」と言うと、「……いえ、そのことなら大丈夫よ」と、ゲルダは言いました。「……カイちゃんは、わたしが来たことを聞けば、すぐ出てきて、あたしを入れてくれるわよ」と言うので、「……じゃあ、あそこの木戸のところまで待っていてください」と、カラスはこう言うと、頭をふりふり飛んで行きました。(本文)

*

*

さて、いよいよ「二人」(少年と王女様)の対面になるが、その少年は、「……僕がカラスのことばで話す時のように、すらすらと上手に話をしたそうですよ。これは、許嫁^{いいなすけ}から聞いたんです。少年は元気な、可愛らしい人でした。お城へきたのも、決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思ってきました。ところが、少年は王女様が気に入る、王女様のほうでも少年が気に入ったというわけなんです」とある。——まず、この少年の(外から見た)「印象」は、元気な、可愛らしい人でした。一方、この少年の「内面」は、「……決して王女様に結婚を申し込むためではなく、ただ、王女様が賢いというものだから、それを知りたいと思つ

てきたんです」とある。——つまり、王女様は「賢い」（大変お利口の方であり、世界中の新聞をみな読んでしまうほど）と言われているが、その「噂」は本当なのかどうか確かめに来たということである。だとすれば、この少年自身、かなり「賢い頭のいい人間」ということになり、それゆえ、「……すらすらと上手に話をした」としても、何も不思議なことにはならないのである。

*

*

ところで、国王が「賢い」という「噂」を聞いて、それが本当かどうか確かめに来たということでは、有名な「シバの女王」の話があり、それは、次のようなものである。つまり、「……シバの女王は、ソロモン王の知恵の噂を伝え聞くと、極めて大勢の随員を伴い、香料や非常に多くの金や宝石などの贈り物をラクダに積んで、難問を以って彼（の知恵）を試そうとエルサレムを訪れた。シバの女王は、ソロモン王に数々の質問（あらかじめ考えておいたすべての質問）を浴びせるが、ソロモン王に答えられないことは何も無かった。また、王の宮殿、食卓の料理、居並ぶ臣下、神殿の祭礼などの様子を目の当たりにした女王は、「……わたしが国でああなたの御事績とあなたのお知恵について聞いていたことは、本当のことでした。わたしは、ここに来て、自分の目で見るまでは、そのことを信じてはいませんでした。しかし、わたしに知らされていたことはその半分にも及ばず、お知恵と富はうわさに聞いていたことを遙かに超えています」と感嘆し、ソロモン王が仕える神を称え、金二〇〇キカル（約六・八四トン）と非常に多くの香料や宝石などを贈った。ソロモン王もシバの女王に対して贈り物をしたほか、彼女の望むものを与えた。こうして女王一行は故国に帰還した」（旧約聖書）という内容である。これを映画化したのが有名な『ソロモンとシバの女王』であり、また、歌にしたのが有名な『シバの女王』になるのである。

*

*

さて、女主人公のゲルダは、カラスから少年の話を聞いて、「……そうだわ、きっとそうよ！ その人、カイちゃんだわ！」、「……カイちゃんは、とても利口で、分数の暗算だってできるんですもの！」と言い、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてってちょうだいな」と頼むのであった。——まず、その少年は、かなり「賢い人間」ということから、女主人公のゲルダは、「……その人、カイちゃんだわ！」、「……カイちゃんも、とても利口で、分数の暗算だってできるんですもの！」ということ、ぜひその「少年」に会いたいということになり、「……ねえ、どうか、わたしをお城へ連れてってちょうだいな」と頼むことになるのである。——一方、カラスは、城の中に入ることは、そう簡単なことではなく、「……あなたのような小さい娘さんは、お城へ入ることはとても許されてはいない」ということで、どうしたものか？ とにかく、ぼくの許嫁と相談してみるから、「……じゃあ、あそこの木戸のところまで待っていてください」となって、カラスは、頭をふりふり飛んで行ったということである。

八、ゲルダを裏門のところへ……

さて、夕方、あたりが暗くなってから、カラスはやっともどってきました。そして、「……けっこう！ けっこう！」と、言いました。「……僕の許嫁が、くれぐれもよろしくと

言っていましたよ。それから、ここに少しばかりパンを持ってきました。あれがお城の台所で見つけたんです。そこには、まだたくさんありますよ。さぞ、おなががすいたでしょう。——お城の中へ入ることは、とてもできませんよ。あなたは、そのとおりはだしでしょう。銀づくめの番兵や、金びかのお役人たちが、とても許してはくれないでしょう。でも、泣かなくてもいいですよ。どうにかして連れてってあげますからね。じつは、僕の許嫁は、寝室に通じる狭い裏階段を知っていますし、鍵のありかだって知っているんですよ！」。そこで、カラスとゲルダは、庭の中へはいつて大きな並木道を通っていくと、木の葉が一枚、また一枚と散っています。そして、やがて、お城の明かりが一つ、また一つと消えていった時、カラスは、ゲルダを裏口のところへ連れていき、そこは少し開いていました。ああ、ゲルダの胸は、どんなに心配とあこがれとで高なったことでしょう！ まるで何か悪いことでもしようとしているような心持ちでした。でも、ゲルダは、ただその人がほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイがほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイがほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイがほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。……結構、結構！」と

*

*

さて、夕方、カラスは、あたりが暗くなってから戻ってきて、「……結構、結構！」と言いながら、「……僕の許嫁がくれぐれもよろしくと言っていましたよ。それから、ここに少しばかりパンを持ってきました。あれ（許嫁）がお城の台所で見つけたんです。そこにはまだ沢山ありますよ。（これは少しぐらい持って来ても誰も気づきませんよという意味合いも含まれているのだろう）。そして、「……さぞ、お腹がすいたでしょう」というのは、これは、カラスの「許嫁」（雌のカラス）だからこそ気が付くことであり、雄のカラスでは恐らく気が付かないものである。——そして、（正面から）お城の中へ入るとは、とても出来ませんよ。あなたは、その通り裸足でしょう。銀づくめの番兵や金びかのお役人たちがとても許してはくれないでしょう。でも、泣かなくてもいいですよ。どうにかして連れてってあげますからね。実は、「……僕の許嫁は、寝室に通じる狭い裏階段を知っていますし、鍵のありかだって知っているんですよ」とある。——これが、すなわち、「……結構、結構！」ということであり、その狭い「秘密の裏階段」を上がっていけば、やがては「二人」（王子と王女）の「寝室」へと通じているというのである。そこで、カラスとゲルダは、まず、庭の中へはいつて大きな並木道を通っていくと、木の葉が一枚また一枚と散っていると、やがて、お城の明かりも一つまた一つと消えていったとき、カラスは、ゲルダを裏口のところへと連れていくと、そこは少し開いていました。これは、当然、カラスの「許嫁」が二人のために少し開けておいたということである。

さて、その女主人公のゲルダの「胸」（心）は、「……どんなに心配とあこがれ（期待）とで高なったことでしょう！ まるで何か悪いことでもしようとしているような心持ちでしたが、（これは当然密かに、お城の中に忍び込んで、いるからであり）、しかし、ゲルダは、ただその人がほんとうにカイかどうか知りたかっただけなのです。そうです、それはカイ

に違いありません。ゲルダは、カイの賢そうな目と、長い髪の毛とを、ありありと思ひ浮かべ、また、自分たちがうちのバラの花の下にすわっていた時のように、にこにこしているカイの姿がはつきり目に見えるようでした。(これはもう期待で胸が一杯になっているということであり)、そして、カイがゲルダを見て、どんなに遠い道を、自分のためにはるばる歩いてきたかを聞いたら、また、自分がうちへ帰らないので、どんなにみんなが悲しんでいるかを知ったら、きつと喜んでくれるでしょう。ああ、そう思うと、心配でもあり、うれしくもありました。

これは、非常に興味深いところであり、それは、われわれ人間というのは、まだその「目的」に到達しないうちから、その「目的」に到達した時のことをあれこれ「想像」(イメージ)して、その時には、「……こう言おう、こうしよう」とか、また、例えば、文学賞でもアカデミー賞でも、その他、何の「賞」でもよいが、或いは、何らかの試合に勝ったり、優勝したりした時に、その時には、「……こういうコメントを言おうとか、こういうパフォーマンスをしよう」などと、あれこれ想像し考えたりするものである。それと全く同じように、女主人公のゲルダも、カイに会った時のことをあれこれ想像し考えたりしているのであり、そう思うと、心配でもあり、(それはそうなるかならないかどちらになるか心配でもあり)、また、うれしくもありました。(それはそうだった時のことをあれこれ考るとうれしくもあった)ということである。

九、秘密の回廊から最初の広間へ

やがて、二人は、階段を(登って)上に来ました。そこには小さいランプが棚の上に灯っていました。床の真ん中にお城のカラスが立っていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめました。ゲルダは、おばあさんから教わっていた通り、丁寧におじきをしました。「……可愛いお嬢さん、あなたのことは、わたしの許嫁がとてもほめておりまして」と、お城のカラスは言いました。「……あなたの、よく人の申します履歴とかいうものは、ずいぶん悲しいんですね。——では、そのランプを持ってくださいませんか。ご案内しますわ。ここを真っ直ぐにはいりましょう。そうすれば、誰にも会いませんから。……あたしたちのすぐあとから、何かがついてくるような気がするわ」と、ゲルダは言いました。そう言えば、たしかに、すぐ横を、さっさっ！ と通り過ぎるものがありました。それは、壁にうつった影のようなもので、たてがみをなびかせ、細い脚をしている馬や、獵師たちや、馬に乗った紳士や貴婦人、そういった人たちでした。——「……あれはただの夢なんですの」と、カラスは言いました。「……ああして、ご主人たちの考えを狩りにお誘いするために来たのです。でも、かえって、都合がようございました。おやすみになつているところを、一層よくご覧になれますもの。ですけれど、あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね。……そんなことは、言うもんじやないよ」と、森のカラスは言いました。(本文)

さて、二人は、いよいよ「階段」を(登って)上に来ると、「……そこには小さいランプが棚の上に灯つているとともに、床の真ん中にはお城のカラスが立っていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめました」とある。——まず、「……小さいランプが棚の

上に灯ともっていた」のは、当然、カラスの「許いいなすけ嫁めかけ」（お城のカラス）が火を灯ともしたのであり、普段は、真つ暗の所なのである。そして、「……床の真ん中にお城のカラスが立たっていて、頭をあちこちに回しながらゲルダをながめた」のは、この「お城のカラス」は、二人が来るのを、ここでずつと待まちっていたとともに、「……頭をあちこちに回まわっていた」のは、ほかに誰たれかいないかと警戒しながら、女主人公のゲルダを見たということである。すると、女主人公のゲルダは、おばあさんから教おしわっていた通り、丁寧におじきをしました。「……可愛いお嬢さん、あなたのことは、わたしの許いいなすけ嫁めかけがとてもほめておりましたわ」と、お城のカラスは言いいました。「……あなたの、よく人の申まをします履りれき歴れきとかいうものは、ずいぶん悲かなしいんですね」とある。——これは、雄おとこのカラスから、主人公（ゲルダ）の今の「境遇」（大好きなカイが行方不明になり、それを必死になって捜し回まわっている事）などをあれこれ聞いていたからである。そして、その「お城のカラス」は、それでは、「……そのランプを持ってくださいませんか。ご案内しますわ。ここを真つ直ぐにはいりましよう。そうすれば、誰にも会あいませんから」と言いうと、女主人公のゲルダは、「……あたしたちのすぐあとから、何かがついてくるような気がするわ」と言いうのでした。

そう言えば、確かに、すぐ横を、さっさつ！ と通り過ぎるものがありました。それは、壁にうつった影のようなもので、たてがみをなびかせ、細い脚あしをしている馬や、獵師あしたちや、馬に乗った紳士や貴婦人、そういった人たちでした。——「……あれはただの夢なんですよ」と、（お城の）カラスは言いいました。「……ああして、ご主人たちの心を狩うりにお誘いうするために来たのです」とある。——これは、一体、何なのか？ 壁にうつった影のようなものとある。だとすれば、例えば、狩うりを描えいた「絵画や写真或いは映写」のよようなものか？ アンデルセンの時代には、写真はあつたが、まだ正式の映写機はなかつた。何か影かげ絵えのようなものが動うごいているのか？ それとも、実際に馬車ばしやがややつて来ていて、その影が壁に映うつっているのか、それとも、人間の「夢の中」に現あわれるものなのか？ 何とも判別はんべつしがたいが、お城のカラスは、かえって、都合がよろようございました。おやすみにななっているところを、一層よくご覧らんになれますもの。ですから、あなたがいまに出世して、立派な身分身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」とある。——さて、この「……あなたがいまに出世して、立派な身分身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」とあるのは、もし女主人公のゲルダが王子様の「親おやしいお友ともだち」であれば、当然のことながら、何らかの「優遇処置」がとられて、例えば、お城に仕えるようになり、やがて立派な身分身分になった時には、お礼の気持ちをお忘れなくね」ということであり、それに対して、「……そんなことは、言うもんじゃないよ」と、森のカラスは言いうのでした。

十、最初の広間から二人の寝室へ

さて、みんなは、最初の広間に入りました。広間の壁には美しい花模様をつけたバラ色の縹しゆす子が張りつめてありました。さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行いきました。けれども、その走り方があまり早くて、ゲルダにはご主人の姿が目に止とまりませんでした。広間は、広間から広間へと通りぬけることにだんだん立派りっぱになっていきました。全くもう目を丸くするばかりでした。こうして、いよいよみんなは寝室へ来きました。寝室の天井は、葉を一杯にひろげた大きなシェロの木きの形かたちになっていました。その葉

はガラス、しかも上等のガラスでできていました。そして、床の真ん中に立っている一本の太い黄金こがねの幹に、ユリの花のようなベッドが二つつるしてありました。その一つは、まっ白で、それには王女が寝ていました。もう一つは、赤くて、その中にこそ、ゲルダの捜しているカイが寝ているはずです。ゲルダは、赤い花びらの一つを、そっとわきへ寄せてみました。日にやけた頸すじが見えました。——ああ、カイでした！——ゲルダは大声で名を呼びながら、ランプを差し出しました。——その時、さっきの夢が馬に乗って、ざわざわ部屋の中へ戻って来ました。——その人は、目を覚まして、顔をこちらへ向けました。すると、——それは、カイではありませんでした。(本文)

*

*

さて、みんなは、「……最初の広間に入ると、広間の壁には美しい花模様をつけたバラ色の繻子しゆす(織物)が張りつめてありました。さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行きました。けれども、その走り方があまり早く、ゲルダにはご主人の姿が目にとまりませんでした」とある。——さて、ここにも「……さっきの夢は、もうこの広間をざわめきながら通り過ぎて行きました。けれども、その走り方があまり早く、ゲルダにはご主人の姿が目にとまりませんでした」とある。これは、一体、何なのか？ さっきの「夢」とある。この「馬に乗った夢」とは、王子が見ている「夢」なのか？ その「夢」が勝手に動き回っているのか？ それとも、その「夢」というのは、王子とは関係なく、いわば「……勝手に、独自に動き回っている夢であり、実体のないもの、例えば、何らかの亡霊や幽霊、その他のようなものなのか？ 何とも判別しがたいものである。

それはともかく、広間は、広間から広間へと通りぬけることにだんだん立派になっていき、全くもう目を丸くするばかりでした。こうして、いよいよみんなは寝室へ来ました。寝室の天井は、葉を一杯にひろげた大きなシエロの木の間になっていて、その葉はガラス、しかも上等のガラスでできていました。そして、床の真ん中に立っている一本の太い黄金こがねの幹に、ユリの花のようなベッドが二つつるしてあり、その一つは、まっ白で、それには王女が寝ていて、もう一つは、赤くて、その中にこそ、ゲルダの捜しているカイが寝ているはずですが、その時、また、「……さっきの夢が馬に乗って、ざわざわ部屋の中へ戻って来ました」とある。これは、王子が見ている「夢」なのか？ それとも、王子とは関係なく、勝手に独自に動き回っている夢なのか？ その人(王子)は、目を覚まして、顔をこちらへ向けましたが、それは、カイではありませんでした、となるのである。

十一、二人は目を覚まし、ゲルダはその経緯いきさつを話す

さて、王子は、頸すじのところだけカイに似ていたのです。けれども、若くて美しい人でした。その時、白いユリの花のベッドから王女が顔をのぞかせて、そこにいるのはだれ、と、たずねました。ゲルダは泣きながら、いままでの身の上話やガラスが親切にしてくれたことなどをすっかり話しました。「……まあ、可哀そうに！」と、王子も王女は言いました。それからカラスをほめて、自分たちは少しも気を悪くしてはいないけれど、こんなことは、たびたびするものではないよ、と話して聞かせました。それはそれとして、カラスたちは、ごほうびをいただくことになりました。「……おまえたちは、自由に飛びまわりたいかい？」、それとも、「……お城づきのカラスになつて、台所のおこぼれならな

んでもいただける、ちゃんとした職を持ちたいかい？」と、王女は聞きました。すると、二羽のカラスはおじきをして、ちゃんとした職のほうをお願いしました。それは、年を取ってからのことを考えたからでした。そして、「……年を取ってからのために、ちゃんとした職を持っていることは、よいことだと思いますから」と、(王女に)言いました。

さて、王女は、ベッドから出て、ゲルダをそれに寝かせました。ゲルダにとって、これ以上うれしいことはありませんでした。ゲルダは、小さな手を合わせて、「……人に對しても動物に對してもなんて親切なんですよ！」と、心に思いました。そして、目をつぶって、やすらかに眠りました。すると、またもや、いろいろの夢が飛んで入ってきました。その夢たちは、神様の天使のように見え、みんなで一つの小さな櫛そりをひいていました。その櫛にはカイが乗ってうなずいていました。けれども、それはみな、ただの夢でしたから、目を覚ますと、たちまち消えてしまいました。(本文)

*

*

さて、女主人公のゲルダは、王子と王女の「寝室」へと忍び込み、その「王子」の顔を見てみると、「……王子は、頸くびすじのところだけカイに似ているだけでしたが、若くて美しい人でした。その時、一方の王女が顔をのぞかせて、そこにいるのは誰と聞くので、女主人公のゲルダは、今までの身の上話やカラスが親切にしてくれたことなどを泣きながらすっかり話すと、「……まあ、可哀そうに！」と、王子も王女も言い、それからカラスをほめて、このようなことは度々たびたびするものではないと諭さとされながらも、カラスたちは、ご褒美ほうびをいただくことになり、それは、「……おまえたちは、自由に飛びまわりたいかい？」、それとも、「……お城づきのカラスになって、台所のおこぼれならなんでもいただける、ちゃんとした職を持ちたいかい？」というものでした。——これは、少し前に、主人公(ゲルダ)に對して、もし、「……あなたがいまに出世して、立派な身分になった時は、お礼の気持ちをお忘れなくね」ということが、凶はからずも、ここで「実現したこと」になり、二羽のカラスは、丁寧におじきをして、ちゃんとした職のほうをお願いし、それは、年を取ってからのことを考えた上であり、「……年を取ってからのために、ちゃんとした職を持っていることは、よいことだと思いますから」と、(王女様に)丁寧に答えるのでした。

さて、王女は、ベッドから出て、ゲルダをそれに寝かせました。それは、見るからに疲れきっている様子だったからでしょう。ゲルダにとつて、これ以上うれしいことはありませんでした。ゲルダは、小さな手を合わせて、「……人に對しても動物に對してもなんて親切なんですよ！」と、心に思いました。そして、目をつぶって、やすらかに眠りました。すると、またもや、いろいろの夢が飛んで入ってきました。その夢たちは、神様の天使のように見え、みんなで一つの小さな櫛そりをひいていました。その櫛にはカイが乗ってうなずいていました。けれども、それはみな、ただの夢でしたから、目を覚ますと、たちまち消えてしまいました。——さて、ここにも「夢」の話が出て来るが、この「夢」は、自分の「脳」(頭)が「自発的に見ている夢」ではなくて、むしろ、人間の「脳」(頭)の中に外から「いろいろの夢が飛んで入ってくる」という「考え方」であり、それゆえ、馬に乗った人たちの「夢」も、勝手に独自に動き回っている夢であり、その「夢」がまさにあちこちを勝手に動き回っていたということになるのである。

十二、翌日、馬車に乗って新たな出発

あくる日、ゲルダは、頭の前から足のつま先まで絹とビロードの着物を着せられました。そして、いつまでもお城にいて、楽しく暮らすようにと、親切にすすめられました。けれども、ゲルダはそれをおことわりして、小さな馬車と、それをひく一頭の馬と、一足の小さな長靴ながぐつと、これだけいただきたいと願いました。そうしたら、もう一度、広い世の中へ出て行って、カイを捜してみたい、と言いました。

すると、長靴ばかりでなく、手をあたたためるマフまでもいただきました。そして、きれいに旅のしたくができあがりしました。こうして、いよいよ出発の時がきますと、門の前に、何から何まで金でできている新しい馬車が止まりました。それには、王子と王女の紋章が、星のように輝いていました。御者ごしやと、従者と、先乗りと、そうです。先乗りまでもですよ、みんな金の冠をかぶってひかえています。王子と王女はゲルダの手を取って馬車に乗せてくれました。そして、ゲルダの幸福を祈ってくださいました。もう今では結婚をすませていた森のカラスが、三マイルばかり送ってくれることになりました。カラスは、ゲルダとならんで馬車に乗っていました。というのは、カラスはうしろ向きに、馬車に乗って行くことはできないからです。もう一羽のカラスは門のところ立って、翼をばたばたさせました。いっしょに送ることができなかったわけは、お城でちゃんとした職を持つようになつて、その上、たべるものがたくさんになってからというもの、よく頭痛がしたからです。馬車の内側は、甘いビスケットが詰めてあり、座席の下にも、くだものやコショウ入り菓子が入っていました。——「……さようなら！ さようなら！」と、王子と王女は叫びました。ゲルダは泣きました。カラスも泣きました。——こうして、早くも、三マイルばかり来ました。こんどはカラスが、さよならを言いました、ほんとうに、つらい悲しいお別れでした。カラスは、道ばたの木の上に飛び上がって、馬車が見えなくなるまで、黒い翼を羽ばたいていました。馬車は、明るいお日様のように、いつまでもいつまでも、きらきら輝いていました。(本文)

*

*

さて、あくる日、女主人公のゲルダは、頭の前から足のつま先まで絹とビロードの着物を着せられて、いつまでもお城にいて、楽しく暮らすようにと親切にすすめられましたが、ゲルダはそれをおことわりして、小さな馬車と、それをひく一頭の馬と、一足の小さな長靴ながぐつと、これだけいただきたいと願ひし、そうしたら、もう一度、広い世の中へ出て行って、カイを捜してみたいと言ひのでした。——これは、非常に興味深いところであり、一つは、このまま「……いつまでもお城にいて、楽しく暮らすという道」を選ぶべきなのか、それとも、もう一つは、「……もう一度、広い世の中へ出て行って、カイを捜してみたいという道」を選ぶべきなのか、この「二つの道」の、一体、どちらの道を選ぶべきなのかと問われた時に、女主人公のゲルダは、何の躊躇ちゆうちよもためらいもなく、「……もう一度、広い世の中へ出て行って、カイを捜してみたいという道」を選んだということは、それだけ「カイへの想い」は、半端なものではなく、まさに「一途なもの」であったということである。

——すると、長靴ばかりでなく、手をあたたためるマフ(円筒形の毛皮)までもいただき、きれいに旅の支度が出来上がりました。こうして、いよいよ出発の時が来ると、門の前に、何から何まで金でできている新しい馬車が止まり、それには王子と王女の紋章が星のように輝いていました。御者ごしやと、従者と、先乗りと、そうです。先乗り(行列の先頭に立つ騎

馬の人)までもですよ、みんな金の冠をかぶって控ひかえています。王子と王女は、ゲルダの手を取って馬車に乗せてくれて、そして、ゲルダの幸福を祈ってくれました。

むろん、これらはすべて王子と王女のまさに「心こ尽し」のものではあったが、しかし、結果としては、この金ぴかの「馬車」というものは、かえって、「山賊」たちに襲われることになってしまうのである。それはともかく、もう今では結婚をすませていた森のクラスが、三マイル(約四・八km)ばかり送ってくれることになり、クラスは、ゲルダとならんで馬車に乗っていました。というのは、クラスはうしろ向きに馬車に乗って行くことはできないからです。(これは進む方向と逆に向くことは、生理的に苦痛ということなのか?)、そして、もう一羽のクラス(お城のクラス)は、門のところ立って、翼をばたばたさせました。一緒に送ることが出来なかったのは、お城でちゃんとした職を持つようになり、(つまり勤務中)であり、その上、食べる物がたくさんになってからというもの、よく「頭痛」がしたからです。これは、恐らく、食べ過ぎやストレスなどから、まさに「体調不良」になっているのである。

一方、女主人公や森のクラスが乗っている馬車の内側には、甘いビスケットが詰めてあり、座席の下にも、くだものやコショウ入り菓子が入っていました。これは、食料が確保されていたということである。——そして、「……さようなら！ さようなら！」と、王子と王女は叫びました。ゲルダは泣きました、クラスも泣きました。——こうして、早くも三マイル(約四・八km)ばかり来ると、今度は、クラスが「さよなら」を言いました。ほんとうに「辛こい悲ひしいお別わかれ」でした。森のクラスは、道ばたの木の上に飛び上がって、馬車が見えなくなるまで黒い翼つばさを飛ばしていました。——ちなみに、この森のクラスは、ゲルダがカイを無事に救出して一緒に帰って来ると、すでに亡くなっているのです。それは、一体、なぜなのかと問えば、それは、結局、森のクラスは、森のクラスとして生きた方が幸せだったのかも知れない。……そして、走る馬車は、明るいお日様のように、いつまでもいつまでもきらきら輝きらいているのです。

*

*

五、第五のお話
山賊の小娘

五、第五のお話

山賊の小娘

一、山賊に襲われる馬車

さて、「……ゲルダの乗っている馬車は、暗い森の中を通りました。馬車は、たいまつのように光り輝きました」。その光が山賊どもの目を射ったので、みんなは、もう我慢ができなくなりました。「……やあ、金だ！ 金だぞ！」と、叫びながら飛び出して来ました。そして、馬を押さえ、先乗りや、御者や、従者を殺して、ゲルダを馬車から引きずり下ろしました。「……こりや、太つて、可愛い子じや、クルミの実で太らしたんじやな」と、年取った山賊のばあさんが言いました。このばあさんは、長い恐いひげを生やして、まゆ下は目の上までかぶさっていました。「……まるで、太らした子羊そっくりじや。さて、味はどんなもんじやろう！」と、こう言つて、ばあさんは短刀を引き抜きました。それは、ぴかぴか光つていて、身の毛もよだつばかりでした……。(本文)

まず、女主人公のゲルダの乗った馬車は、「……暗い森の中を通っていたが、その馬車は、たいまつのように光り輝いていた」とある。それは、まさに「……何から何まで金でできている新しい馬車であり、それには王子と王女の紋章が星のように輝いているとともに、御者と従者と先乗りまでがいて、みんな金の冠をかぶっていた」でした。これは、獲物に飢えに飢えているハイエナのような「山賊たち」から見れば、まさに願ったり叶ったりの「最上の獲物」であり、いわば「鴨がネギを背負つてやって来た」状態であつて、それゆえ、その金ピカに輝くその光が山賊どもの目を射つた時には、みんなは、もう我慢ができなくなり、「……やあ、金だ！ 金だぞ！」と、叫びながら飛び出して来て、そして、馬を押さえ、先乗りや御者や従者を殺して、ゲルダを馬車から引きずり下ろすという状態になってしまったのである。そして、怯えるゲルダを見ては、「……こりや、太つて、可愛い子じや、クルミの実で太らしたんじやな」と、年取った山賊のばあさんが言うのでした。このばあさんは、長い恐いひげを生やして、まゆ下は目の上までかぶさっていたとある。そして、「……まるで、太らした子羊そっくりじや。さて、味はどんなもんじやろう！」と、こう言つて、ばあさんは短刀を引き抜くと、それは、ぴかぴか光つていて、身の毛もよだつばかりでした、とある。——これは、一体、どういうことになるのか？ 例えば、この山賊のばあさんは、実際に人肉を食べていたということなのか？ それとも、女主人公のゲルダを敢えて怖がらせるために、わざとそんなことを言っているのか？ 何とも判別しがたいが、ただ、人を殺すということでは、先乗りや御者や従者などを何の容赦もなく殺しているの、ほとんど何の抵抗もなく人を殺すことはでき得るのである。

二、山賊の小娘の出現

その瞬間、「アッ！」と、ばあさんは声を上げました。それは、ばあさんの小さな娘が背中にしがみついて、いきなりばあさんの耳にかみついたのです。ほんとうにこの小娘は、乱暴で手のつけられない子でした。今も面白がってそんなことをしたのです。「……この

「がきめが！」と、ばあさんは言いました。けれども、そのためにゲルダを殺す切っ掛けがなくなりました。「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」と、山賊の小娘は言いました。「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寢床でいっしょに寝るんだよ」と、こう言つて、まともやかみつきましたので、ばあさんは、飛び上がつて、きりきり舞いをしました。ほかの山賊たちは、みな笑いながら言いました。「……どうだ。見ろやい。ばあさんが、がきと一緒に踊つてござるわ！」と言うのでした。(本文)

*

*

さて、女主人公のゲルダが今にも殺されそうになった時、その瞬間、「アッ！」と、短刀を持ったばあさんは、声を上げました。それは、「……ばあさんの小さな娘が背中にかみついて、いきなりばあさんの耳にかみついたので。ほんとうにこの小娘は、乱暴で手のつけられない子であり、今も面白がつてそんなことをしたのです」とある。——この山賊の小娘が、結果として、女主人公のゲルダを助けることになるが、それに対して、「……このがきめが！」と、ばあさんは言い捨てながらも、女主人公のゲルダを殺す切っ掛けを失つてしまうのである。——一方、山賊の小娘は、「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」と言い、「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寢床でいっしょに寝るんだよ」と言うのでした。

これは、非常に興味深いところであり、この山賊の小娘の「人間関係」は、恐らく、多くは「大人との関係」であり、それゆえ、自分と同じくらいの子供たちと遊ぶことも少なく、一人寂しい思いをしていたかと思うが、そのような「心理状態」の時に、たまたま自分と同じくらいの可愛いゲルダを見た時に、この山賊の小娘は、まさに「自分の遊び相手」(或いは自分のペット)にしようと思ったのであり、それが、まさに「……この子は、あたしと遊ぶんだよ！」であり、「……この子は、あたしにマフときれいな着物とをくれるの。そして、あたしの寢床でいっしょに寝るんだよ」となるのである。そして、年寄りのばあさん(実は母親)に何度かかみついているのは、女主人公のゲルダを殺そうとする意志をそいでいるのであり、一方、それを見ていたほかの山賊たちは、みな笑いながら、「……どうだ。見ろやい。ばあさんが、がきと一緒に踊つてござるわ！」となるのである。

三、二人を乗せた馬車は森の奥に

さて、「……あたし、あの馬車に乗るんだ！」と、山賊の小娘は言いました。この子は、甘やかされて育てられ、おまけに強情しやうじやうとききているものですから、一度言い出したら、もうあとへは引きません。小娘とゲルダは馬車に乗り込んで、切り株やイバラの茂みを飛び越えて、森の奥深く入つて行きました。山賊の小娘は、ゲルダと同じくらいの背丈せうぢでしたが、ずつと力強くて、肩幅はたも広く、こげ茶色の膚はだをしていました。目はまっ黒で、どこか悲しみをたたえていました。小娘は、ゲルダのからだを抱いて言いました。「……あたし、おまえが嫌いにならないうちは、誰にもおまえを殺させはしないよ。おまえ、きつと王女様なんだろ？」と聞くので、「……いいえ！」と、ゲルダは言いました。そして、今までのことをすつかり話して聞かせました。それから、自分がどんなにカイのことを思っているかということも話しました。——山賊の小娘は、真剣な顔つきをして、ゲルダをじつと

見ていましたが、ちよつとうなずいて言いました。「……あたし、おまえが嫌いになつても、誰にも殺させはしないよ。そのくらいなら、あたしが自分でするよ」。そして、ゲルダの目をふいてやり、両手をきれいなマフ（円筒形の毛皮の防寒具）の中につつまみました。マフは、とても柔らかくて、あたたかでした。（本文）

*

*

さて、山賊の小娘は、「……あたし、あの馬車に乗るんだ！」と言い出すが、これは、当然、馬の扱あつかいなどは心得こころえているのであり、しかも、「……この子は、甘やかされて育ち、おまけに強情しやうじやうときているので、一度言い出すともう後へは引かない性格」なので、小娘とゲルダは、さつさと馬車に乗り込んで、切り株やイバラの茂みを飛び越えて、森の奥深くへと入って行くが、それはもちろん、その森の奥深くにこそ、山賊たちの「隠れ家かくが」（つまり「山賊の城」）があるのである。——ところで、その山賊の小娘の「容姿・容貌」は、女主人公のゲルダと同じくらいの背丈たけでしたが、ずっと力強く、肩幅はたばも広く、こげ茶色の膚はだをしていました。目はまっ黒で、どこか悲しみをたたえていました。——この「悲しみ」をたたえているのは、やはり同じくらいの子供の「遊び相手」もなく、一人寂しい思いをしていたからであり、だからこそ、この小娘は、ゲルダのからだを抱いて言うには、「……あたし、おまえが嫌いにならないうちは、誰にもおまえを殺させはしないよ」とあるが、これは、「……おまえが嫌いにならないうちは、（お前を殺そうとする）山賊たちからお前を守つてやるよ」ということであり、また、「……おまえ、きつと王女様なんだろう？」と聞くが、これは、言うまでもなく、「……王子と王女の紋章の付いた金ピカの馬車」に乗っていたからであり、しかも、女主人公のゲルダが、「……今までのことをすっかり話して聞かせ、しかも、自分がどんなにカイのことを思っているかということも話す」と、山賊の小娘は、真剣な顔つきをして、ゲルダをじつと見ていたが、「……あたし、おまえが嫌いになつても、誰にも殺させはしないよ。そのくらいなら、あたしが自分でするよ」と言うが、これは、「……もう何があつてもお前を守つてやるよ！」という、極めて「強い意志」の表れであり、それは、結局、女主人公のゲルダの「話」を聞いて、まさに「心の底からそのゲルダに同情した」ということであり、だからこそ、山賊の小娘は、「……ゲルダの目をふいてやり、両手をきれいなマフ（円筒形の毛皮の防寒具）の中に入れてやる」のであるが、そのようにやさしくされた女主人公のゲルダの「マフ」の中は、「……とても柔らかくて、温あたたかであった」となるのである。

四、馬車はやがて山賊の城へ

やがて、馬車が止まりました。そこは、山賊の城の中庭でした。城は上から下まで裂け目が走っていて、大ガラスや小ガラスがその裂け目から飛び立っていました。人間の一人ぐらい、のみ込みそうな大きなブルドッグが、何匹も跳びはねていました。しかし、吠えはしませんでした。吠えてはいけなないと、かたく止められていたからです。

すすだらけの古い大きな広間では、石だたみの床ゆかのまん中で火がさかんに燃えていました。その煙は、天井の下をはいまわって出口をさがしていました。大きな炊事釜ずいじがまの中には、汁が煮えています。野ウサギや家ウサギなどが串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていました。「……今夜は、あたしの小さな動物たちのところで、あたしと一緒に

寝るんだよ」と、山賊の小娘は言いました。二人は食べたり、飲んだりしてから、わらと毛布が敷いてある部屋へやのすみっこへ行きました。上を見ますと、横木やとまり木におよそ百羽ほどのハトが止まっています。みんな眠っているようでしたが、小娘たちが近づきますと、ちよつとからだをこちらに向けました。(本文)

*

*

さて、二人が乗った馬車は、やがて止まることになるが、そこは「山賊の城」の中庭であり、そして、その「山賊の城」は、上から下まで裂け目が走っていて、大ガラスや小ガラスがその裂け目から飛び立っていましたとある。――まず、森の奥深くに少し開けた所があり、そこに「山賊の城と中庭」があつたが、その山賊の(木造の)城は、きつちりと造られたものではなく、いたる所に裂け目やすき間などがあり、それゆえ、そこから大ガラスや小ガラスなどが飛び立ったりもするのである。また、人間の一人ぐらいのみ込みそうな大きなブルドッグが何匹も跳びはねていたとあるが、われわれ人間が「犬」を飼うのは、一般に、番犬か猟犬或いは牧羊犬か愛玩犬ベットのどれかと思うが、むろん、食料ということもあり得る。それでは、なぜブルドックであり、また、吠えないようにしていたのだろうか？ まず、ブルドッグは、もともと「雄牛お牛(ブル)」と戦わせる犬(ドッグ) (それは「牛の鼻を噛む」牛いじめ) という見世物みせもののために開発された犬であつたが、一八三五年のイギリスの「動物虐待法」の成立によってそれが禁止されてからは、一般に、番犬や愛玩犬として飼われるようになるが、若しも番犬であれば、誰かが来たらすぐに吠える方がいいのではないかと考えがちであるが、これは、ワンワンと激しく吠えなくても、例えば、誰かが来た時に「ウーと、うなり声」を出すだけでも十分であり、また、毎日日常的にワンワンと何匹もの犬が頻繁に吠えていたら、そこに「誰か」(例えば山賊の隠れ家かくが) があることが他人にすぐに知られてしまうので、それゆえ、ふだんは吠えないようにして、必要な時だけ吠えてくれればそれでよいのである。

一方、すすだらけの古い大きな広間とあるので、かなり長くここで生活くわくわくしているのであり、また、石だたみの床ゆかのまん中で火がさかんに燃えていて、その煙は、天井の下をはいまわって出口をさがしていました。大きな炊事釜すいじがまの中には、汁が煮えていて、また、野ウサギや家ウサギなどが串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていたとある。――まず、古い大きな広間では、石だたみの床ゆかのまん中で火がさかんに燃えているが、恐らく、そこで酒を飲んだり食事をしたり、また、大きな炊事釜すいじがまの中には、汁が煮えているとともに、野ウサギや家ウサギなどは串ざしにされて、くるりくるりと火の上でまわっていたのである。そして、山賊の小娘は、「……今夜は、あたしの小さな動物たちのところで、あたしと一緒に寝るんだよ」と言い、二人は食べたり、飲んだりしてから、わらと毛布が敷いてある部屋へやのすみっこへ行きました。これは、わらと毛布が敷いてある「寝床の部屋」が別に造られていたのであり、そこに行き、上を見ると、横木やとまり木におよそ百羽ほどのハトが止まっていて、みんな眠っているようでしたが、小娘たちが近づくと、ちよつとからだをこちらに向けるのです。これは、小娘のいわばベツトとしてハトが飼われていたのである。

五、小娘が飼っているハトとトナカイ

さて、山賊の小娘は、「……これはみんなあたしのなんだよ！」と、こう言って、素早く手近の一羽をつかまえて、足を持ってゆさぶりました。ハトは羽をばたかせました。小娘は、「……キスしてやんな！」と、こう叫ぶと、そのハトでゲルダの顔をたたきました。「……あつちのは、森のやくざ者だよ」と、小娘は、しゃべりつづけながら、上の方にある何本かの横木やとまり木の後ろを指さしました。その横木やとまり木は、高い壁にあけた穴に打ち込んでありました。「……あれは二羽とも森のやくざ者だよ。しっかり閉じ込めておかないと、すぐ飛び出して逃げてしまうんだよ。それから、ここに居るのは、あたしの古い友だちのベーだよ」。こう言いながら、一匹のトナカイを角を持ってひき出してきました。トナカイは、首にぴかぴかする胴の輪をはめられて、それでつながれていたのです。「……こいつも、しっかりつないでおかないといけないんだよ。でないと、すぐあたしたちのところから、飛び出してしまうんだよ。毎晩、あたしは、尖ったナイフでこいつの首くすぐってやるんだよ。そうすると、とても怖がるんだから」。こう言うと、小娘は、壁の割れ目から、長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでました。可哀そうに、トナカイは足をばたかせました。山賊の小娘は、さもおかしうに笑いました。それからゲルダといっしょに寢床に入りました。(本文)

*

*

さて、山賊の小娘は、「……これはみんなあたしのなんだよ！」と言う。これは、ほかの山賊たちのものではなく、まさに「……自分が飼っているハトたち(ペット)」ということであり、素早く、手近の一羽をつかまえて、足を持ってゆさぶると、ハトは羽をばたかせせるが、小娘は、「……キスしてやんな！」と、こう叫ぶと、そのハトでゲルダの顔を叩きました。これは、女主人公のゲルダの「両頬」(或いは「片頬」)にハトの口先を当てたのであり、そして、「……あつちのは、森のやくざ者だよ」と、小娘はしゃべり続けるが、それは、「……あれは二羽とも森のやくざ者だよ。しっかり閉じ込めておかないと、すぐ飛び出して逃げてしまうんだよ」とある。——ところが、この「二羽の森のやくざ者」(ハト)こそは、やがて、「……僕たち、カイちゃんを見たよ」と言う「二羽の森のハト」であり、それは、(前に)ここを飛び出して逃げて、森の「巢の中」にいた時に、まさに「……カイちゃんは雪の女王の車に乗って、森の上をすれすれに飛んで行くのを見た」ということであり、今は、ここに「伝書バト」のような習性で戻って来ていて、二羽の森のハトは、逃げられないように閉じ込められている状態にあるのである。

一方、山賊の小娘が飼っているもう一匹の動物は、「トナカイ」であり、この「トナカイ」は、極めて重要な「トナカイ」となるが、それは、「……ここに居るのは、あたしの古い友だちのベーだよ」と言いながら、一匹のトナカイを角を持ってひき出して来ると、その「トナカイ」は、首にぴかぴかする胴の輪をはめられて、それでつながれていたのです。そして、「……こいつも、しっかりつないでおかないといけないんだよ。でないと、すぐあたしたちのところから、飛び出してしまうんだよ。毎晩、あたしは、尖ったナイフでこいつの首くすぐってやるんだよ。そうすると、とても怖がるんだから」。こう言うと、小娘は、壁の割れ目から長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでるので、可哀そうに、トナカイは足をばたかせますが、山賊の小娘は、それがさもおかしうに笑い、それからゲルダといっしょに寢床に入るのでした。——さて、山賊の小娘は、壁の割れ目から長いナイフを取り出して、それでトナカイの首すじをなでると、可哀そう

にトナカイは足をばたばたさせて怖がるが、山賊の小娘は、それがさもおかしそうに笑うとあるが、……これは、結局、彼女の「頭の中」(或いは「心の中」)にある実には様々な「鬱積した想い」などを、このような形によって、いわば「気晴らしやストレス解消」などを行なっているのであり、それからゲルダといっしょに寢床に入るのでした。

六、もう一度、カイの話をする

さて、ゲルダは、「……あなたは、寝ているあいだもナイフをはなさないの？」と、いくらか恐そうにそれを見ながら、たずねました。「……いつだって、ナイフを持って寝るんだよ」と、山賊の小娘は言いました。「……どんなことが起こるかもしれないもの。それよか、もう一度、さっきのカイちゃんという子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」。

そこで、ゲルダは、もう一度はじめから話をしました。頭の上のかごの中にいる森のハトがクークー泣きました。ほかのハトたちは、みな眠っていました。山賊の小娘は、ゲルダの頸に腕をまきつけ、片手にナイフを持ったまま、すうすうと寝息をたてて眠ってしまいました。ゲルダは、目をつぶるどころではありませんでした。これからさきいつたい生きていられるのか、殺されるのか、見当がつきませんでした。山賊どもは火のまわりにすわって、歌をうたったり、お酒を飲んだりしていました。山賊ばあさんまでが、とんぼがえりをしました。けれども、小さい女の子にとっては、それがどんなに恐ろしく見えたことでしょうか。(本文)

*

*

さて、女主人公のゲルダは、山賊の小娘と一緒に寝ることになるが、その時に、ゲルダは、「……あなたは寝ている間もナイフを離さないの？」と、いくらか恐そうにそれを見ながらたずねると、「……いつだって、ナイフを持って寝るんだよ」、「……どんなことが起こるかもしれないもの。それよか、もう一度、さっきのカイちゃんという子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」と、山賊の小娘は言うのでした。――まず、この山賊の娘は、なぜ、いつも「ナイフを持って寝ているのか？」と問えば、それは、何よりも「自分の身を守るため」のものであり、山賊のようなことをやっていたら、寝ている間も、いつ誰に急に襲われるかも知れない。つまり、「……いつどんなことが起こるかも知れない」、それに備えてのまさに「護身用」ではあるが、それに加えて、もう一つは、やはり女主人公のゲルダに逃げられないようにするためという理由も少しはあるのだろう。

ところで、この山賊の小娘の「興味や関心」は、一体、どこにあるのかと問えば、それは、まさに「……もう一度、さっきのカイちゃんという子の話をしておくれよ。それから、どうしておまえが、この広い世の中へ出てきたのか、そのわけも話しておくれ」とあるように、彼女の真の「興味や関心」は、まさに「ここにこそある」のである。それは、一体、どうしてかと問えば、それは、この山賊の小娘も、「……この山賊暮らしに満足しているわけではなく」、いつかは「……広い世の中へ出てみたい」という想いがあるからである。やがて、山賊の小娘は、「……ゲルダの頸に腕をまきつけ、片手にナイフを持ったまま、すうすうと寝息をたてて眠ってしまうが、女主人公のゲルダは、とても目をつぶるどこ

ろではなく、これからさきいったい生きていられるのか、殺されるのか、見当もつかず、しかも、山賊どもは火のまわりにすわって、歌をうたったり、お酒を飲んだりして、山賊ばあさんまでが、とんぼがえりなどをしていて、小さい女の子にとっては、それがどんなに恐ろしく見えたことでしょう」となるのである。

七、僕たち、カイちゃんを見たよ

さて、その時、森のハトが言いました。「……クー　クー！　僕たち、カイちゃんを見たよ、白いニワトリがカイちゃんの櫓ぶねを運んでいてね、カイちゃんは雪の女王の車に乗っていたよ。僕たちが巢すくの中にいるとね、森の上をすれすれに飛んで行ったっけ。その時、雪の女王が、僕たち子供に息を吹きかけたもんだから、ここにいる僕たち二羽のほかは、みな凍え死んじゃたよ。クー、クー！」と。「……まあ、あなたたち、そこでなんの話をしているの？」と、ゲルダは思わず大きな声を出しました。「……その雪の女王って、どこへ行ったの？　あなたたち、何か知らないこと？」、「……たぶん、ラップランドというところだろうよ。あそこは、年じゅう雪と氷で閉ざされているからね。そこにつながらているトナカイさんに、聞いてごらん」。「……そうですよ、あそこは氷と雪ばかりです。ほんとに恵まれたいいところですよ！」と、トナカイは言いました。「……きらきら光る大きな谷間を、自由にとびまわるんです！　そこに雪の女王は、夏のテントを張るんです。しかし、女王のほんとの城は、もつとずつと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にあるんです」。「……ああ、カイちゃん！　なつかしいカイちゃん！」と、ゲルダは、思わずため息をつきました。「……さあ、もう静かに寝なつてば！」と、山賊の小娘は言いました、「……でないよ、このナイフをおなかに突き刺すよ」。(本文)

*

*

さて、この「場面」は、非常に「大事な場面」であり、それは、次のような理由からである。――まず、山賊の小娘とほかのハトたちはみな眠っている状態であり、この部屋へやで目を覚ましているのは、「女主人公のゲルダ」と、「かごの中にいる二羽の森のハト」だけであり、その「かごの中にいる二羽の森のハト」があれこれおしゃべりしている状態であるが、それは、「……クー　クー！　僕たち、カイちゃんを見たよ、白いニワトリがカイちゃんの櫓ぶねを運んでいてね、カイちゃんは雪の女王の車に乗っていたよ。僕たちが巢すくの中にいるとね、森の上をすれすれに飛んで行ったっけ。その時、雪の女王が、僕たち子供に息を吹きかけたもんだから、ここにいる僕たち二羽のほかは、みな凍え死んじゃたよ。クー、クー！」と言うと、女主人公のゲルダは、「……まあ、あなたたち、そこでなんの話をしているの？」と、女主人公のゲルダは思わず大きな声を出し、「……その雪の女王って、どこへ行ったの？　あなたたち、何か知らないこと？」と聞くので、「……たぶん、ラップランドというところだろうよ。あそこは、年じゅう雪と氷で閉ざされているからね。そこにつながらているトナカイさんに、聞いてごらん」と言うと、トナカイは、「……そうですよ、あそこは氷と雪ばかりです。ほんとに恵まれたいいところですよ！」と言ひ、「……きらきら光る大きな谷間を、自由にとびまわるんです！　そこに雪の女王は、夏のテントを張るんです。しかし、雪の女王のほんとの城は、もつとずつと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にあるんです」と言うのでした。――さて、ここで何よりも「大事

な情報」は、まさに「二つ」であり、その一つは、「……カイちゃんは雪の女王の車に乗っていた」という情報（事実）であり、そして、もう一つは、雪の女王は、「……ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もつとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」という情報（事実）である。——この「二つの事実」こそは、最も「大事な情報」になるのである。すると、女主人公のゲルダは、「……ああ、カイちゃん！ なつかしいカイちゃん！」と、思わずため息をつくが、一方、山賊の小姑娘は、（目を覚まして）、「……さあ、もう静かに寝なつてば！」「……でないと、このナイフをおなかに突き刺すよ」と言うのであった。

八、トナカイの生まれ故郷ラップランド

あくる朝、ゲルダは、森のハトの言ったことを残らず小姑娘に話しました。小姑娘は、たいそう真剣な顔つきをして聞いていましたが、やがて、うなずいてこう言いました。「……まあ、いいや！ どっちだって、いいや！——で、ラップランドという国が、どこにあるか知ってるの？」と、トナカイにたずねました。「……わたしがよく知っているものは、まずないでしょう」と、トナカイは言いました。そして、目をいきいきと輝かせました。「……そこで、わたしは生まれ育ったんですよ。その雪の原を跳びまわったものです！」「……ねえ、おまえ！」と、山賊の小姑娘はゲルダに向かって言いました。「……ほら、男たちはみんな出かけちゃったよ。おっかさんだけはまだいる。おっかさんは、いつもうちに残っているんだよ。けれど、朝おそく、大きなびんから酒を飲んで、それからちよつと昼寝をするんだよ。——そうしたら、いいことを教えてやるよ」。こう言うと、寝床からはね起きて、母親の頸（くび）にかじりついて、そのひげをひっぱりながら言いました。「……あたしのやさしいヤギさん、おはよう！」、すると、母親は小姑娘の鼻を指で何度もはじきました。しまいには、鼻が赤く青くなりました。けれども、これはみな可愛くつてただけのことでした。（本文）

*

*

さて、あくる朝、女主人公のゲルダは、森のハトの言ったことを残らず小姑娘に話しました。山賊の小姑娘は、たいそう真剣な顔つきをして聞いていたが、やがて、うなずいてこう言いました。「……まあ、いいや！ どっちだって、いいや！」とある。——これは、どうしようか迷っている状態であり、このまま女主人公のゲルダをここに留（とど）めておくべきなのか？ それとも、女主人公のゲルダの希望する通りにしてやるべきか？ もし、逃がしてやった場合、山賊ばあさんやほかの山賊たちに何を言われるか分からない。どうしたのか？ まあ、いいや！ どっちだって、いいや！」となるのである。そこでトナカイに、「……ラップランドという国がどこにあるか知ってるの？」と聞くと、「……わたしがよく知っているものは、まずないでしょう」と、トナカイは言い、そして、目をいきいきと輝かせて、「……そこで、わたしは生まれ育ったんですよ。その雪の原を跳びまわったんですよ！」と言うのでした。——これは非常に大事なところであり、それは、「……わたしがよく知っているものは、まずないでしょう。なぜなら、そこはわたしの生まれ故郷だから」という話を聞いて、それならばと「次の展開」が生じるのであり、若しもよく知らない何も知らないということであれば、次の展開はないのである。

それは、「……ねえ、おまえ！」と、山賊の小娘はゲルダに向かって言い、「……ほら、男たちはみんな出かけちゃまって、おっかさんだけはまだいる。おっかさんは、いつもうちに残っているんだよ。けれど、朝おそく、大きなびんから酒を飲んで、それからちよつと昼寝をするんだよ。——そうしたら、いいことを教えてやるよ」と、こう言うと、寝床からはね起きて、母親の頸にかじりついて、そのひげをひっぱりながら言うには、「……あたしのやさしいヤギさん、おはよう！」、すると、母親は小娘の鼻を指で何度もはじき、しまいには、その鼻は赤く青くなつたが、それはみな可愛くしたことだったので。——さて、この山賊のばあさんは、実は、山賊の小娘の「母親」であり、それゆえ、今、母親に甘えているような形で、母親の「ご機嫌」を取りながら、母親の「警戒心」などを取り除いているのである。

九、母親が酔って昼寝をしている間に

やがて、母親が、びんのお酒を飲んで昼寝をしてしまうと、山賊の小娘は、トナカイのところへ行って言いました。「……わたしはね。もつとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかつこうつたらないんだもの。だけど、まあ、どっちだっていいや！ おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」。

トナカイは、あまりのうれしさに跳び上がりました。山賊の小娘は、ゲルダをトナカイの背中に乗せてやり、用心深く、からだをしつかり縛って、その上、小さなふとんまであてがってくれました。「……どっちだっていいや」と、小娘は言いました。「……さあ、おまえの毛皮の長靴だよ！ 寒くなるからね。けれど、このマフはもらっておくよ。とてもきれいなんだもの。とிட்டって寒い思いはさせないから。ほら、これはおっかさんの大きな指なし手袋だよ。おまえなら、ひじのところまで入るだろうよ。さあ、はめてごらん。——ほうら、手だけ見ると、あたしのきたないおっかさんみたいだよ。」(本文)

*

*

さて、やがて、母親がびんのお酒を飲んで昼寝をしてしまうと、山賊の小娘は、トナカイのところへ行って言うには、「……わたしはね。もつとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかつこうつたらないんだもの。だけど、まあ、どっちだっていいや！ おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」とある。

まず、この「トナカイ」と「山賊の小娘」との関係であるが、それは、「……ここにいるのは、あたしの古い友だちのべーだよ」と言っている。つまり、この「山賊の小娘」のまわりにいるのはほとんど「大人の山賊たち」であって、これという「遊び相手」もいな

い状態であり、それゆえ、百羽ぐらいのハトとこの「トナカイ」こそは、何年も前からまさに「遊び相手」（或いは「話し相手」）になっていたのである。その古い友だちの「遊び相手」（或いは「話し相手」）を手放すことにはためらいも生じるが、それが、まさに「……わたしはね。もつとなんべんも、このとんがったナイフで、おまえをくすぐってやりたいんだよ。だって、その時の、おまえのおかしなかつこうたらないんだもの」とためらいながらも、「……まあ、どっちだっていいや！」ということで、意を決して、「……おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう。あんな大きな声でしゃべっていたんだし、おまえだって耳をすませて聞いてたんだから！」とある。

それでは、なぜ「手放す方に意を決した」のかと問えば、それは、女主人公のゲルダの話を二度までも聞いていたうちに、まさに「そのゲルダの境遇に心から同情した」ということであり、それゆえ、「……できることがあれば、何とかしてやりたい」という気持ちにもなったのである。——そのような時に、一つは、「二羽の森のハト」から、「……カイちゃんは雪の女王の車に乗っていたよ」という「情報」を得、また、もう一つは、ラップランドが生まれ故郷の「トナカイ」から、雪の女王は、「……ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もつとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」という「情報」を得て、一気に、「……おまえの綱をほどいて、外へ出してやるから、ラップランドまで走って行きな。けど、一所懸命走って、この女の子を雪の女王のお城までつれて行くんだよ。そこに、この子の友だちがいるんだって。おまえも、この子の話は聞いていたろう」という、まさにそういう展開になっていくのである。

*

*

すると、トナカイは、あまりのうれしさに跳び上がりました。山賊の小娘は、ゲルダをトナカイの背中に乗せてやり、用心深く、からだをしっかりと縛しばって、その上、小さなふとんまであてがってくれました。「……どっちだっていいや！」と、小娘は言いました、とある。——さて、再び、「……どっちだっていいや！」という言葉が出てくるが、これは、一体、どのような「意味合い」になるのかと問えば、それは、次のようなことである。——つまり、われわれ人間というのは、ふだんは「利害損得」などをいつも考慮に入れながら「行動」（言動）しているものであるが、この「山賊の小娘」の場合、女主人公の「ゲルダ」と古い友だちの「トナカイ」とを同時に手放すことが、一体、「……自分にとつて得になるのか、それとも、損になるのか、もうどっちだっていいや！」という、そのような「心理状態」になっているのである。そして、「……さあ、おまえの毛皮の長靴ながぐつだよ、寒くなるからね。けれど、このマフはもらっておくよ。とてもきれいなんだもの。といてたつて寒い思いはさせないから。ほら、これはおっかさんの大きな指なし手袋だよ。おまえなら、ひじのところまで入るだろうよ。さあ、はめてごらん。——ほうら、手だけ見ると、あたしのきたないおっかさんみたいだよ」と言うと、ゲルダは、うれし涙をこぼしました、と続くのである。

十、北方のラップランドをめざして……

ゲルダは、うれし涙をこぼしました。「……そんな、めそめそするのはごめんだよ！」と、山賊の小娘は言いました。「……それよりか、うれしそうな顔をするのがほんとじゃないか。それからここにパンが二つとハムが一つあるよ。これだけあれば、おなかのすくこともないだろう」。この二つの品は、トナカイの背中のうしろに結びつけられました。山賊の小娘は戸をあけて、大きな犬をみんな中へおびき入れてから、ナイフでトナカイの綱を切つて言いました。「……さあ、走れ！ だけど、背中の女の子に気をつけるんだよ！」と言いました。——ゲルダは、大きな指なし手袋をはめた手を、山賊の小娘のほうへのばして、さようなら、と言いました。トナカイは、やぶや切り株をとび越え、大きな森をつきぬけ、沼地や草原を横切つて、一所懸命、走りに走りました。オオカミがほえ、カラスが叫んでいます。「……シュー！ シュー！」と空で音がしました。それは、ちょうど何か赤い炎を吐いているようでした。——「……あれは、わたしの昔なじみのオーロラです」と、トナカイは言いました。「……どうです、あの光ること！」、それから、トナカイは夜となく昼となく走りつづけました。パンもみんな食べてしまい、ハムもなくなり

* * *

さて、いよいよ「北方のラップランド」をめざすことになるが、その前に、女主人公のゲルダが「うれし涙」をこぼすと、山賊の小娘は、「……そんな、めそめそするのはごめんだよ！」と言い、「……それよりか、うれしそうな顔をするのがほんとじゃないか。それからここにパンが二つとハムが一つあるよ。これだけあれば、おなかのすくこともないだろう」と言つて、その二つの品は、トナカイの背中のうしろに結びつけられました。そして、山賊の小娘は、戸を開けて、大きな犬をみんな中へおびき入れてから、ナイフでトナカイの綱をたち切ると、「……さあ、走れ！ だけど、背中の女の子に気をつけるんだよ！」と言うのであった。——一方、女主人公のゲルダは、大きな指なし手袋をはめた手を、山賊の小娘のほうへ伸ばして、さようなら、と言うのでした。……

さて、トナカイは、やぶや切り株を跳び越え、大きな森を突き抜け、沼地や草原を横切つて、一所懸命、走りに走りました。オオカミが吠え、カラスが叫んでいます。「……シュー！ シュー！」と空で音がしましたが、それは、ちょうど何か赤い炎を吐いているようでした。——「……あれは、わたしの昔なじみのオーロラです」、「……どうです、あの光ること！」と、トナカイは言うのでした。それから、トナカイは、夜となく昼となく走りつづけ、パンもみんな食べてしまい、ハムもなくなりましたが、その時、ついに目的地の「ラップランド」へと着きましたとなるのである。

* * *

六、第六のお話

ラップ人の女とフィン人の女

六、第六のお話

ラップ人の女とフィン人の女

一、ラップランドの小さな家

さて、ゲルダを乗せたトナカイは、とある小さな家の前でとまりました。その家は、たいそうみずばらしい家でした。屋根は地面までとどいていて、入り口はたいへん低くて、うちの人が出たり入ったりするのに、腹ばいにならなければなりませんでした。

家の中には、年寄りのラップ人の女が一人いるきりで、ほかには誰もいませんでした。そのおばあさんは立って、魚油ランプのそばで魚を焼いていました。トナカイは、おばあさんにゲルダのことをすっかり話しました。もつとも、その前に自分のことを話しました。自分のことのほうがずっと大切に思えたからです。それに、ゲルダは、寒さのためにひどく疲れていて、口もろくにきくことができませんでした。(本文)

*

*

さて、女主人公の「ゲルダ」を乗せた「トナカイ」(そのラップランド生まれのトナカイ)は、まさにその「ラップランド」の、とある小さな家の前で止まりました。「……その家は、たいそうみずばらしい家であり、屋根は、地面までとどいていて、入り口はたいへん低くて、うちの人が出たり入ったりするのに、腹ばいにならなければなりませんでした」とある。——まず、ラップランドは、「……フィンランドの最北端にあり、スウェーデン、ノルウェー、ロシア、バルト海と接する過疎地域であり、広大な亜寒帯の荒野、スキーリゾートに加えて、真夜中の太陽やオーロラなどの自然現象でも知られている。県庁所在地のロバニエミは、ラップランドを訪れる際の拠点であり、ラップランドの北には先住民のサーミ人が住んでいるが、その居住地は近隣諸国にまで広がっている」とある。さらに、ここで大事なことは、その「サーミの神話」では、「……全てのものに魂があるとされていて、生き物でも、そうでないものでも、それぞれの物語があり、例えば、岩や木、キツネやトナカイ、空に輝くオーロラ、人々が使うナイフ、その他、全てのものが英知を持っていてるのであり、魂は、すべてのものの中にいつも存在しているとされている」とある。だとすれば、例えば、雪や氷が「魂」(英知)を持ち、また、雪の女王が「魂」(英知)を持っていたとしても、何も不思議なことにはならないのである。

さて、家の中には、年寄りのラップ人の女が一人いるきりで、ほかには誰もいませんでしたとある。——まず、「ラップ人」とは、「ラップランドの人」ということであり、そのおばあさんは立った状態で、魚油ランプ(魚油は安価だが、燃える時に煙と臭いを多量に出すという)のそばで魚を焼いていました。トナカイは、おばあさんにゲルダのことをすっかり話しました。もつとも、その前に自分のことを話しました。自分のことのほうがずっと大切に思えたからです」とある。——これは、非常に面白いところであり、なぜ、トナカイは、自分の話を先にしたのか? それは、トナカイにとって、この「ラップランド」は、まさに「生まれ故郷」であり、それゆえ、何年も、山賊の小娘に「飼われていた」が、やはり「故郷のこと」はあれこれ気になっていたのであり、それゆえ、今、故郷に久しぶりに帰って、まさに自分の「故郷のこと」(例えば家族や友だちその他)についていろいろ聞きたいことは山ほどあったということである。(ちなみに、このトナカイは、ゲ

ルダがカイを助けて一緒に帰って来ると、すでに結婚をしていて、子供もいるという展開になっていくのである。

二、ラップ人の女

さて、ラップ人の女は、「……おお、おお！ それは可哀そうに！」と言いました。「……それだと、おまえさんたちは、まだまだ走らなければならぬよ。ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなければだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいででな。長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるんだから。ちよつくら、ひと筆、干ダラに手紙を書いてあげよう。わしんところには紙がないからね。これを持って、わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」と言うのでした。

そして、ゲルダが火に暖まつて食べた飲んだりしている間に、ラップ人の女は、干ダラの上に二言三言手紙を書いて、大切に持って行くようにと言って、ゲルダに渡しました。それから、ゲルダは、再び、トナカイにすっかりゆわえ付けられて、そこを出発しました。「シュー！ シュー！」という音が空でしました。たとえようもなく美しい青いオーロラが、一晩じゆう燃えていました。——こうして、とうとうフィンマルケンにやってきました。そして、フィン人の女の家の煙突をノックしました。なぜなら、この家には戸口というものがなかったからです。(本文)

*

*

さて、ラップ人の女は、女主人公(ゲルダ)の今の「境遇」を聞いて、「……おお、おお！ それは可哀そうに！」と言い、「……それだと、おまえさんたちは、まだまだ走らなければならぬよ。ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなければだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいででな。長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるんだから。ちよつくら、ひと筆、干ダラに手紙を書いてあげよう。わしんところには紙がないからね。これを持って、わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」と言うのでした。——さて、このラップ人の女は、「……今、雪の女王は、ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところにおいでだ」と言うのであった。その「フィンマルケン」(ノルウェーの最北部)で、「……長い長い夜ごと、青い火を燃やしていなさるん」ということは、雪の女王は、いわゆる「雪や氷の世界」を支配(統制)しているだけではなく、いわば「オーロラの世界」もそれなりに支配(統制)していることになるのかも知れない。それはともかく、この干ダラに書いた手紙を持って、「……わしの知り合いのフィン人の女のところへ行きなよ。その女の人のほうが、わしよりは詳しいことを教えてくれるだろうよ」となるのである。

そして、女主人公のゲルダが火に暖まつて食べた飲んだりしている間に、ラップ人の女は、干ダラの上に二言三言(重要な言葉だけ)を手紙に書いて、大切に持って行くようにと言って、ゲルダに渡しました。それから、女主人公のゲルダは、再び、トナカイにすっかりゆわえ付けられて、そこを出発しました。「シュー！ シュー！」という音が夜空でして、たとえようもなく美しい「青いオーロラ」が一晩中燃えていました。——こうし

て、とうとうフィン、マル、ケンにやって来て、そして、フィン人の女の家の煙突をノックしました。それは、この家には戸口というものがなかったからです、と続くのである。

三、フィン人の女

さて、家の中は、たいそう暑くて、フィン人の女は、まるで裸も同然でした。この女は、背が低く、陰気な顔をしていました。けれども、ゲルダを見ると、さっそく着物をぬがせ、手袋や長靴も取ってくれました。そうでもしなければ、熱くてたまりませんから。そして、トナカイには、頭の上に氷のかたまりをのせてやりました。こうしてから、三度繰り返し手紙を読んで、そらで覚えてしましますと、その干ダラ（鱈の皮）を鉄なべの中へほうり込みました。こうすれば、まだまだ結構おいしく食べられるからです。この女は、決して物を粗末にしませんでした。

トナカイは、まず自分のことを、それからゲルダのことを話しました。フィン人の女は、分別ありげに目をばちばちさせて聞いていましたが、何とも言いませんでした。トナカイは、「……あなたは、じつに賢いかたです」と、言いました。「……あなたは、世界中の風を一本の縫い糸につなぐこともできるでしょう。わたしは、ちゃんと知っていますよ。船頭がその一つのむすび目をとくと、強い風が吹き、二番目のむすび目をとくと、強い風が吹き、三番目、四番目とといてゆくと、森の木も倒れるほどのあらしが吹くのだそうです。ところで、どうかこの小さい娘さんに、十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬を一つ、つくってやってくださいませんか」。

すると、フィン人の女は、「……十二人力だって？」と、言いました。「……さぞ、役に立つことだろうよ！」と、こう言いながら、棚のところへ行つて、大きな毛皮の巻き物を持ってきて、それをひろげました。そこには、不思議な文字が書いてありました。フィン人の女は、額から汗をばたばたらしながら、それを読みはじめました。（本文）

*

*

さて、今度は、フィン人の女の「家の中」であるが、「……家の中は、たいそう暑くて、フィン人の女は、まるで裸も同然でした」とある。——これは、最初のところで、フィン人の家の煙突をノックしたとあるので、その「煙突」は、当然、「暖炉」用の煙突であり、その燃料は「薪」となり、その「薪」が赤々と燃えていたので、「家の中」は、たいそう暑かったのだらう。それはともかく、その女の人は、背が低く、陰気な顔をしていたが、女主人公のゲルダを見ると、さっそく着物を脱がせ、手袋や長靴も取ってくれました。そうしないと、暑すぎたからであり、トナカイには、頭の上に氷のかたまりをのせてやりました。こうしてから、三度繰り返し手紙を読んで、そらで覚えてしまうと、その干ダラ（鱈の皮）を鉄なべの中へほうり込み、こうすれば、まだまだ結構おいしく食べられるというので、この女の人は、決して物を粗末にしない人だったのでした。

さて、トナカイは、まず自分のことを、それからゲルダのことを話すと、フィン人の女は、分別ありげに目をばちばちさせて聞いていたが、何とも言いませんでした。トナカイは、「……あなたは、たいそう賢いかたです」と言い、「……あなたは、世界中の風を一本の縫い糸でつなぐこともできるでしょう。わたしは、ちゃんと知っていますよ。船頭がその一つのむすび目をとくと、ほどよい風が吹き、二番目のむすび目をとくと、強い風

が吹き、三番目、四番目とといてゆくと、森の木も倒れるほどのあらしが吹くのだそうです。すね」とある。

これは、一体、どういう意味合いになるのだろうか？ まず、「……あなたは、たいそう賢いかたです」と言っている。だとすれば、これは、単に「魔法を使う」というようなことではなく、恐らく、今日で言えば、いわば「気象予報士」のように「気象の予報」（特に風の予報）が得意であり、例えば、船頭（船乗り）から、「……明日の海の様子はどうだろうかと聞かれた時に、明日の午前中はおだやかだが、午後からは風が強くなり、そして、夜には大時化になるよ」と予報すると、それがぴたりとあたっていたので、世界の風を思うがままに操ることが出来るという噂が広まったのではないだろうか？

次に、トナカイは、「……どうかこの小さい娘さんに、十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬を一つ、つくってやってくれませんか」と言うと、フィン人の女は、「……十二人力だって？」「……さぞ、役に立つことだろうよ！」と言っている。——これは、そんな「……十二人力がついて、雪の女王を負かすことができるような飲み薬など、世界中どこを捜し回ったってありはしないよ」と言っているのである。つまり、いわゆる「魔法使い」ではないのであり、だからこそ、「……棚のところへ行つて、大きな毛皮の巻き物を持ってきて、それをひろげると、そこには不思議な文字が書いてあったが、フィン人の女は、額から汗をばたばたたらしながら、それを読みはじめました」となるのである。——それでは、その「大きな毛皮の巻き物」には、一体、何が書いてあるのかと問えば、それは、恐らく、様々な分野の過去からの実に数多くの「知識」が（いわば「一冊の百科事典」のように）書き記されていたのだろう……。

四、トナカイのお願いとフィン人の女の返答 其の一

さて、トナカイは、もう一度、ゲルダのために熱心に頼みました。ゲルダも、目に涙をいっぱいためて、心からお願ひするように、フィン人の女をじっと見つめました。すると、女はまたもや目をばちばちやりはじめました。そして、トナカイをすみっこに連れて行って、頭の上に新しい氷を乗せてやりながら、こうささやきました。

「……そのカイって子はね、たしかに雪の女王のところにいるよ。だけどね、今は何もかも自分の思い通りになっているものだから、すっかり気に入ってしまった、世界中にこんないいところはないと思っているのだよ。それというのも、みなガラスのかけらがその子の心臓に突き刺さっていて、小さいガラスの粒が目の中に入っているためなんだよ。まず、それを取り出さなければいけない。でないと、その子は、二度とほんとうの人間にはなれないし、いつまでも雪の女王の言うなりになっていなければならぬんだよ」。

すると、トナカイは、「……では、そういうものにみな打ち勝つだけのものをゲルダさんにあげてくれませんか？」と言うと、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力よりも、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわからないのかい？ どんな人間でも動物でも、あの子のためには、どうしても助けになつてやりたくないじゃないか。だからこそ、はだしてこんな世界の果てまで来られたんじゃないか。それがおまえにわからないの？ あの子の力は、わたしたちなんかから教わるには及ばないんだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだもの。つまり、あの子のや

さしい、罪のない心が、とりもなおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のところへ行って、カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないようだったら、わたしたちでは、どうにもならないことさ……」。(本文)

*

*

さて、この場面でのフィン人の女の「返答」(せりふ)こそは、作家(アンデルセン)の『雪の女王』という作品の、まさにその「核、心、部分」(つまり中心思想)が語られている部分でもあり、まず、トナカイは、「……もう一度、ゲルダのために熱心に頼みました。女主人公のゲルダも目に涙を一杯ためて、心からお願ひするように、フィン人の女をじつと見つめました。すると、女はまたもや目をぱちぱちやりはじめ、そして、トナカイをすみっこに連れて行き、頭の上に新しい氷を乗せてやりながら、こうささやくのであった。

つまり、「……そのカイつて子はね、たしかに雪の女王のところにいるよ。だけれどね、今は何もかも自分の思い通りになっているものだから、すっかり気に入ってしまったて、世界中にこんないいところはないと思っているのだよ。それというのも、みなガラスのかけらがその子の心臓に突き刺さっていて、小さいガラスの粒が目の中に入っているためなんだよ。まず、それを取り出さなければいけない。でないと、その子は、二度とほんとうの人間にはなれないし、いつまでも雪の女王の言うなりにならなければならないんだよ」とある。——まず、主人公(カイ)を大きく変えてしまったものは、一体、何かと問えば、それは、一つは、まさに目の中に入った一粒の「小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」であり、そして、もう一つは、主人公(カイ)の心臓に突き刺さっている「小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」であって、この「二つの小さい悪魔の鏡のガラスのかけら」を取り除かない限り、主人公(カイ)は、二度とほんとうの人間にはなれないし、また、いつまでも雪の女王の言うなりにならなければならないんだよ」と言うのであった。

これは、実に興味深い言葉であり、というのも、例えば、ごくふうのまじめな青年がいたとして、その青年は、ある日、何らかの切っ掛けから、その人の「目の中」と「心の中」に「小さい悪魔の鏡のかけら」が入ってしまった、すると、その青年の、「……世の中を見る目は一変してしまい、世の中の人たちは、なんだかんだと最もらしいきれいな物を言っている、結局は、この世は金なのであり、金さえあれば、何でも好きな物が手に入るし、また、何でもやりたいことも出来るのだ」と、そう考えるようになり、やがて、お金(大金)を手に入れるためなら、もういかなる手段(方法)も辞さないということから、例えば、オレオレ詐欺などをはじめ、実に様々な(犯罪的な)「……強盗、窃盗、詐欺、恐喝、密輸、闇取引、運び人、万引き、ひったくり、置き引き、その他」、何でもあれ、何でもやるようになってしまふのである。それもこれも「お金がすべて」という「考え方」に取り憑かれているからであり、その「考え方」を取り除かない限り、その人は、二度とほんとうの人間にはなれないし、また、いつまでも「悪魔の囁き」の言うなりにならなければならないということである。それは、何も「お金」だけの問題ではなくて、まさに「権力や社会的地位或いは名誉や名声その他」なども、それらを得るためには、もういかなる手段(方法)も辞さないということになれば、すべて同じようなことになるのである。

五、トナカイのお願いとフィン人の女の返答 其の二

さて、トナカイは、「……では、そういうものにみな打ち勝つだけのものをゲルダさん
にあげてくれませんか？」と言うと、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力より
も、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわか
らないのかい？ どんな人間でも動物でも、あの子のためには、どうしても助けになつて
やりたくないか。だからこそ、はだしてこんな世界の果てまで来られたんじゃないか。
それがおまえにわからないのかい？ あの子の力は、わたしたちなんかから教わる
には及ばないんだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだよ。つまり、あの子の
やさしい、罪のない心が、とりもおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のとこ
ろへ行って、カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないうだつ
たら、わたしたちでは、どうにもならないことさ。ここから二マイルばかり行くとね、雪
の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪
の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そ
うしたら、よけいなおしやべりはしないで、急いでもどつてくるんだよ！」、こう言って、
フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりました。(本文)

*

*

さて、ここで「最も大事な言葉」は、「……わたしはね。ゲルダがいま持っている力よ
りも、大きな力をやることはできないよ。ゲルダの力がどんなに大きいか、おまえにはわ
からないのかい？ (中略)、あの子の力は、わたしたちなんかから教わるには及ばない
んだよ。その力は、あの子自身の心の中にあるんだよ。つまり、あの子のやさしい、罪
のない心が、とりもおさず、力なのだよ。もし、あの子が雪の女王のところへ行って、
カイのからだの中から、ガラスのかけらを取り出すことができないうだつたら、わたし
たちでは、どうにもならないことさ」と言うのであった。——つまり、主人公(カイ)の
「目の中」と「心臓の中」に入り込んだ「小さい悪魔の鏡のかけら」を取り除ける、その
ような「力」は、まさに女主人公のゲルダのような「心の中」にこそあるのであり、それ
は、つまり、「……あの子のやさしい、罪のない心が、とりもおさず、その力なので
あり、それは、まさに「……一途な思い、(一途な愛情・一途な愛)、そして、世俗な利害
損得を離れた、罪のない心(無垢の心)こそは、まさにその力となる」のである。

*

*

例えば、われわれ人間の「心」そのものというのは、本来は、「大空のような無色透明
な心」であるにもかかわらず、俗世間のなかで日々あわただしく生活をしているために、
われわれ人間の「心」というのは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわ
されてしまい、本来は、「大空のような無色透明な心」であるにもかかわらず、実に様々
に「変形(変色)してしまっているのである。しかも、その実に様々な「変形(変色)
してしまった「心」を以って、つまり、実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされて
いる「心」を以って、あれこれ無分別に「行動(言動)するからこそ、自分に対して、
また、他人に対しても、あるいは、社会や国家などに対しても、実に様々な「禍(わざ)
(不幸)をもたらしている最大の要因になっているのである。

それでは、その本来の「大空のような無色透明な心」を取り戻すためには、いったいど
うしたらよいかと言えば、その「一つの方法」が、まさに宗教における「修行」になると

いうことである。例えば、なぜ、「俗世間」から離れるのかと言えば、「俗世間」のなかにいたのでは、どうしても実に様々な「欲望や感情」などに振りまわされてしまい、いつまで経っても、本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」を取り戻すことは、なかなか出来にくいからである。そこで、その「俗世間」からしばらく離れて、いわゆる「山の中」に籠もって、俗世間のなかで日々あわただしく生活していたために、実に様々に「変形」（変色）してしまった「心」から、本来の「大空おおぞらのような無色透明な心」（無垢の心）を取り戻そうとするための「努力」こそは、まさに宗教における「修行」になるのである。

六、フィンマルケンの「雪の女王」の庭のはずれへ

さて、フィン人の女は、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどつてくるんだよ！」と、こう言って、フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりました。トナカイは力のかぎり走りました。——「……あつ、わたし、長靴ながぐつをおいてきたわ！ 手袋も忘れてきたわ！」と、ゲルダは、身を切るような寒さに気がついて叫びました。けれども、トナカイは、もう止まってはくれません。どんどん走りに走って、とうとう赤い実のなっている大きな茂みのとこまで来ました。そこでゲルダをおろして、その口にキスをしました。きらきら光る大粒の涙が、トナカイのほほを流れました。いま来た道を大いそぎで走って行ってしましました。可哀そうにゲルダは、靴くつもはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒い寒いフィンマルケンの真まっ只中ただなかに、一人、とり残されてしまったのです。（本文）

*

*

さて、この場面は、再び、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい。そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどつてくるんだよ！」と、こう言って、フィン人の女は、ゲルダをトナカイに乗せてやりましたとある。——まず、前に、トナカイの話だと、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もつとずつと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言い、また、ラップ人の女は、「……ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなければだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」となり、そして、フィン人の女は、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ。そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろしなさい」となるのである。

そして、トナカイは、力の限り走りました。——「……あつ、わたし、長靴ながぐつをおいてきたわ！ 手袋も忘れてきたわ！」と、ゲルダは、身を切るような寒さに気がついて叫びました。けれども、トナカイは、もう止まってはくれません。どんどん走りに走って、とうとう赤い実のなっている大きな茂みのとこまで来ました。そこでゲルダをおろして、その口にキスをしました。きらきら光る大粒の涙が、トナカイのほほを流れました。それから、

トナカイは、いま来た道を大いそぎで走って行ってしまいました。可哀そうにゲルダは、靴もはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒いフィンマルケンの真つ只中ただなかに、一人、とり残されてしまったのです。――まず、ここから「二マイル」(約三・二km)ばかり行くと、雪の女王の庭のはずれに出るので、そこまであの子を運んで行き、そうすると、雪の中に赤い実のなっている大きな茂みがあるから、そのそばにゲルダをおろし、そうしたら、よけいなおしゃべりはしないで、急いでもどつてくるんだよ!とある。――これは、もうわれわれに出来ることは何もなく、唯一出来ることは、女主人公のゲルダを目的地まで連れて行くことだけであり、あとは、女主人公のゲルダにすべて任せるしかないということであり、トナカイは、フィン人の女に言われた通りに連れて行き、そこで別れのキスをしてから、いま来た道を大急ぎで走って帰るのでした。可哀そうにゲルダは、靴もはかず、手袋もはめずに、氷に閉ざされた寒いフィンマルケンの真つ只中ただなかに、一人、とり残されてしまったのです。――それでは、なぜ、忘れた長靴ながぐつや手袋などを取りに戻らないのかと問えば、そのような「防寒具」(小道具)などが役に立つような「寒さ」(猛吹雪)ではないからである。

七、雪の軍勢と天使の軍隊

さて、ゲルダは、できるだけ元気を出して、駆け出しました。すると、そこへ雪の軍勢がどつと押し寄せて来ました。ところが、その雪は、空から降ってくるのではなく、地面の上をまっしぐらに走って来るのでした。そして、近づいて来れば来るほど、ますます大きくなりました。ゲルダは、いつかレンズでひとひらの雪を見た時、それがどんなに大きく、美しい形をしていたかを今でもはっきり覚えていました。けれども、この雪は、それとは比べものにならないほど大きく、そして、恐ろしいものでした。この雪は生きているのでした。それは、雪の女王の前哨部隊ぜんしよぶたいでした。しかも、みな気味のわるい形をしていました。みにくい大きな山アラシのようなものいれば、ヘビがとぐろを巻いてかま首を持ち上げているようなものもあり、毛を逆立てた太った小さいクマのようなものもありました。どれもこれもまっ白に光っていました。そして、どれもこれも生きている雪のひらだったのです。

その時、ゲルダは、「主の祈り」を唱えました。すると、寒さがそれはきびしいものですから、自分の吐く息がよく見えました。息は、煙のように口から出ました。そして、だんだんと濃くなつていって、しまいに小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなりました。見れば、みな頭にかぶとをかぶり、手に鎗やりと盾たてを持っていました。天使の数は、ますます増えてゆきました。そして、ゲルダが祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎗やりをふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺しました。雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまいました。そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。天使たちが、ゲルダの手や足をさすってくれましたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行きました。

さて、お話かわって、カイは、その後、どうしているでしょうか? まず、そのことをお話しておきましょう。たしかに今では、カイは、ゲルダのことなど、少しも考えては

いませんでした。ましてや、いまゲルダが、お城の外まで来ていようとは、夢にも思っていないませんでした。(本文)

*

*

まず、この場面は、まさに「ファンタジーの世界」であり、それでは、そのそもそもの「考え方」は、一体、どこから来ているのかと問えば、それは、やはりラップランドの「サーミの神話」であり、それは、「……全てのものに魂があるとされていて、生き物でも、そうでないものでも、それぞれの物語があり、例えば、岩や木、キツネやトナカイ、空に輝くオーロラ、人々が使うナイフ、その他、全てのものが英知(ものを考える力)を持っているのであり、魂は、すべてのものの中にも存在しているとされているのです」とある。だとすれば、例えば、雪や氷が「魂」(英知)を持ち、また、雪の女王が「魂」(英知)を持っていたとしても、何も不思議なことにはならないとともに、女主人公のゲルダの吐く「息」(熱い息)が、やがて冷たい「雪の軍勢」に立ち向かう「天使の軍隊」になつたとしても、それほど驚くことにはならないのである。

さて、本文では、「……ゲルダは、できるだけ元気を出して、駆け出しましたが、そこへ雪の軍勢がどつと押し寄せて来ました。ところが、その雪は、空から降ってくるのではなく、空はすっかり晴れて、オーロラがきらきら光っていました。雪は、地面の上をまっしぐらに走って来るのであり、そして、近づいて来れば来るほど、ますます大きくなりました。ゲルダは、いつかレンズでひとひらの雪を見た時、それがどんなに大きく、美しい形をしていたかを今でもはっきり覚えていましたが、この雪は、それとは比べものにならないほど大きく、そして、恐ろしいものでした。この雪は生きていたのでした。それは、雪の女王の前哨部隊(ぜんしやうぶたい)でした。しかも、みな気味のわるい形をしていて、みにくい大きな山アラシのようなものいれば、ヘビがとぐろを巻いてかま首を持ち上げているようなものもあり、毛を逆立てた太った小さいクマのようなものもありました。どれもこれも真っ白に光っていました。そして、どれもこれも生きている雪のひらだったのです。

その時、ゲルダは、『主の祈り』を唱えました。すると、寒さがそれはきびしいものですから、自分の吐く息がよく見えました。息は、煙のように口から出ました。そして、だんだんと濃くなっていった、しまいに小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなりました。見れば、みな頭にかぶとをかぶり、手に鎧(よろい)と盾(たて)を持っていました。天使の数は、ますます増えてゆきました。そして、ゲルダがお祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎧(よろい)をふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺しました。雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまいました。そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。天使たちが、ゲルダの手や足をさすってくれましたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行きました」とある。

*

*

まず、雪や氷の世界を支配(コントロール)(統制)しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、この世を支配(コントロール)(統制)しているのは、いわゆる「主なる神」であるが、ここで女主人公のゲルダが『主の祈り』を衷心から唱えたということは、それは、すなわち、まさに「神の力」(神の御加護)を衷心からお願い(祈願)した状態であり、それに応えて、「主なる神」は、その「衷心からお願い」(祈願)を快く受け入れたということである。それ

により、本文では、女主人公のゲルダの吐く「息」（熱い息）は、寒さがそれはきびしいものでしたので、白い煙のように口から出ましたが、やがて、「……その白い息は、だんだんと濃くなっていき、しまいには小さな輝く男子の姿になりました。天使たちは、地面にふれると、そのたびに大きくなり、見れば、みな頭に兜をかぶり、手に鎧と盾を持っていて、天使の数は、ますます増えていき、そして、ゲルダがお祈りを唱え終わった時には、天使の軍隊がゲルダのまわりをとりまいていました。そして、鎧をふるって、恐ろしい雪の軍勢を突き刺すと、雪の軍勢は、みなちりぢりに飛び散ってしまい、そこで、ゲルダは安全に元気に歩き出しました。また、天使たちがゲルダの手や足をさすってくれたので、前ほど寒さを感じなくなりました。こうしてゲルダは、いそいそと雪の女王のお城をめざして行くことになった」ということである。

*

*

さて、最後は、「……お話変わって、カイは、その後、どうしているでしょうか？ まず、そのことをお話ししておきましょう。確かに、今では、カイは、ゲルダのことなど、少しも考えてはいませんでした。ましてや、いまゲルダが、お城の外まで来ていようとは、夢にも思っていないませんでした」とある。——まず、ここで大事なことは、一つは、「……カイは、今ではゲルダのことなど、少しも考えてはいませんでした」ということと、そして、もう一つは、「……今、ゲルダがお城の外まで来ていようとは、夢にも思っていないませんでした」ということであり、このような状況の下で、やがて、女主人公のゲルダは、大好きな「カイ」と、ついに「再会」することになるのである。

*

*

七、第七のお話

雪の女王のお城であったことと、
その後のお話

七、第七のお話

雪の女王のお城であったことと、その後のお話

一、雪の女王の大きなお城の様子

さて、いよいよ最終の「第七話」の冒頭の文章であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……お城の壁は、降りしきる雪でできていました。また、窓や戸は、身を切るような風でできていました。お城には百以上も大広間がありました。それもみな吹き寄せられた雪でできていました。一番大きな広間は、何マイルもひろがっていました。どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがありません。あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よくおどる、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであったためしがありません。平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありませんし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒートの会もありませんでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした。オーロラは、規則正しく燃え上がりましたから、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかりました。この限りなく広々とした雪の大広間の真ん中に、凍った湖が一つありました。その湖の氷は割れて、幾千万という小さいかけらになっていました。ところが、そのかけらは、お互いに全く同じ形をしていて、全体は、一つの立派な美術品を見るようでした。そして、雪の女王は、お城にいる時は、いつもこの湖の真ん中にすわっているのです。そして、わたしは『理知の鏡』にすわっているのです。この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」と言っていました。(本文)

* * *

まず、ここで「確認」しておきたいことは、前にトナカイは、「……雪の女王は、ラップランドに夏のテントを張るが、雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」と言っていた。しかし、その「スピッツベルゲンという島」は、海を遙か遠く渡らなければ辿り着けないところであり、それゆえ、当然のことながら、女主人公のゲルダが「陸続き」で辿り着けるようなところではない。そこで、作者(アンデルセン)は、ラップ人の女に、「……ここから百マイル以上も北のフィンマルケンというところまで行かなければだめだよ。なぜなら、雪の女王は、今、そこにおいでだよ」とし、そして、フィン人の女に、「……ここから二マイルばかり行くとね、雪の女王の庭のはずれに出るから、そこまであの子を運んで行くといいよ」としたのである。つまり、「……雪の女王のほんとの城は、もっとずっと北の北極に近い、スピッツベルゲンという島にある」のであるが、女主人公のゲルダがその島まで辿り着くのはほとんど不可能なことであり、そこで、雪の女王も、季節によって、あちこちに移動しているというので、例えば、夏は、ラップランドに夏のテントを張り、そして、冬は、ノルウェーの最北部にある「フィンマルケンのお城」にいたりという「設定」になっているのであり、そして、女主人公のゲルダは、今、その「フィンマルケンのお城」のところまで来ているということである。

さて、本文であるが、「……お城の壁は、降りしきる雪でできていて、また、窓や戸は、

身を切るような風でできていました。お城には百以上も大広間があるが、それもみな吹き寄せられた雪でできていました。一番大きな広間は、何マイルも広がっていて、どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがなく、あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よく踊るといふ、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであった試しがありません。また、平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありますし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒーの会もありますでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした。オーロラは、規則正しく燃え上がりましたから、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかりました」とある。——さて、ここまでは、雪の女王の「お城の様子」の描写であるが、それを要約すれば、お城の壁は「降りしきる雪」、窓や戸は「身を切るような風」、そして、百以上もある大広間は「すべて吹き寄せられた雪」でできていました。そして、「……ここには、喜びというものがなく、ほんとうに雪の女王の広間は、どの広間も強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていて、がらんとし、大きく、そして、寒いばかりでした」が、一方、オーロラは、規則正しく燃え上がるので、それがいつ高くなるか、いつ低くなるのか、よくわかったが、それは、雪の女王が支配（コントロール）していることにもなるのだろう。

* * *

そして、大事なのは、ここからであり、それは、「……この限りなく広々とした雪の大広間の真ん中に、凍った湖が一つあるが、その湖の氷は割れて、幾千万という小さいかけらになっただけで、凍った湖が一つあるが、その湖の「氷」は割れて、幾千万という小さいかけらになっただけで、凍った湖が一つあり、その湖の「氷」は割れて、幾千万という小さいかけらになっただけで、凍った湖が一つあり、お互いに全く同じ形をしていて、全体は一つの立派な美術品になっている。——これは、まさに幾千万ピースの「ジグソーパズル」と全く同じであり、それが完成すると、全体は「一つの立派な美術品」になるのである。もちろん、この超難解な「ジグソーパズル」を完成させることができ得るのは、雪と氷を支配（コントロール）している、まさに「雪の女王」だけであり、だからこそ、「……雪の女王は、お城にいる時は、いつもこの湖の真ん中にすわっていて、わたしは『理知の鏡』のなかにすわっているのです、この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」と言っているのである。——さて、ここでの「最大の難題」は、何と言つても、この『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）とは、一体、何かという問題であるが、それは、次のようになるかと思う。

まず、最初は、本文の「一字一句」をできるだけ丁寧かつ厳密に読み解くことが何よりも大事なことになるが、「……雪の女王は、いつもこの湖の真ん中にすわっている」とある。これは、当然、氷の上に直接（直に）すわっているのではなく、恐らく、氷でできた「椅子いすのようなもの」にすわっているのだろう。——つまり、ここで言う『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）というものは、まるで幾千万ピースの「ジグソーパズル」と全く同じように、その幾千万という数に割れた湖の「氷」のみな同じ形の小さいかけらを完成させると、全体は「一つの立派な美術品」（氷の鏡）になるが、それが、まさに『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）であり、それは、真に超越した優れた「理知」（「知性＋理性」）だけ

が完成させることができ得るものであり、それゆえ、それは、結局、雪と氷を支配（コントロール）している、まさに「雪の女王」だけにしかでき得ないことになるのである。だからこそ、「……この鏡こそ、この世に一つしかない、何よりもすぐれた鏡です」となるのである。ところが、その「雪の女王」を以ってしても唯一、どうしても、「完成」（組み合わせる）ことができないものは、まさに「永遠」という言葉になるのである。

*

*

つまり、この「……凍った湖が一つあるこの大広間」こそは、まさに『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）が存在する「大広間」（真に超越した『理知の部屋』）であるが、この真に超越した『理知の部屋』（大広間）には何も無い。例えば、「……どの広間も、強いオーロラの光に照らされて、見渡す限り、果てしなく、むなしく、一面の氷がさむざむと光っていました。ここには、喜びというものがなく、あらしが笛を吹いて、それに合わせて、北極グマが後足で品よく踊るといふ、ささやかなクマの舞踏会のようなものさえ、今まであった試しがありません。また、平手で口を打ったり、足を打ったりする小さな競技会もありますし、白キツネのお嬢さんたちの内輪のコーヒーの会もありませんでした。ほんとうに雪の女王の広間は、がらんとして、大きく、そして、寒いばかりでした」となるのである。これは、一体、何を意味するのかと問えば、それは、まさに《徹底した「知性＋理性」だけの世界》では、この世のありとあらゆる unnecessary なものはすべて排除されて、あるのはただただ凍った湖の『理知の鏡』（或いは『理性の鏡』）だけになってしまうのである。——それは、例えば、いわゆる「座禅や瞑想」などをする空間には、 unnecessary ものはすべて排除されて、そこにはこれというものは何もないのと全く同じことであり、それが、まさに《徹底した「知性＋理性」だけの世界》になるのである。

例えば、われわれ人間の「脳」は、言うまでもなく、「右脳と左脳」の二つに分かれているが、その「左脳」（その中の「前頭前野」部分）などは、一般に、あれこれものを考える（思考・思索する）部分とされて、それは、まさにわれわれ人間の「理知的部分」（つまり「知性＋理性」部分）にあたるかと思うが、それは、例えば、言語力や論理的にものを考える力、計算力、物事的分析力、推理力、高度な幾何学力、また、正確性、計画性、規則的、科学的な考えをする傾向があり、さらに、厳しさや厳格さ或いは冷徹さなどの一面もあるのかも知れない。——一方、「右脳」というのは、一般に、音楽や歌や踊りや絵やその他、五感から受ける感じから直感的に物事を認識し、判断し、行動（言動）する傾向があるかと思うが、それゆえ、例えば、歌ったり踊ったり飲んだり食べたりどんちゃん騒ぎなどをしたがるのは、多くの場合、「右脳」の働きであることが多いのだろう。

例えば、かつての「マスメディア」時代には全盛を誇った（紙の）新聞や雑誌或いは書物その他などは、（いわば「左脳」の時代であったが）、その時代は、すでに衰退を始めていて、一方、それに取って代わって、今や「写真や動画」などをはじめ、実に多彩な「漫画やアニメ或いはゲームその他」などの、まさに「全盛期」になっているかと思うが、（それは、いわば「右脳の時代」であるが）、しかし、「左脳」（理知的部分）だけに極端に片寄るのも、また、「右脳」（感性や感情的部分）だけに極端に片寄るのも、人間としてはバランスを欠くことになるので、それゆえ、「左脳」と「右脳」とがより高いところで深く調和している状態こそは、いわば「人間としては最もバランスの取れた状態」になるということである。

二、カイはそこで何をしていたのか？

さて、小さなカイは、寒さのために、まっ青、というよりは、ほとんどどす黒くなっていました。でも、自分ではそれに気がつきませんでした。なぜなら、雪の女王がキスをして、カイから寒さの感じを奪ってしまったからです。おまけに、カイの心臓は、まるで氷のかたまりのようだったのです。カイは、あちこちからさきのがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきて、それをいろいろに組み合わせ、何かをつくりだそうとしていました。ちょうど、わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの「中国遊び」というのに似ていました。カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形をならべていました。それは「理知の氷遊び」というものでした。カイの目には、これらの形こそ、もつともすぐれた、そして、このうえなく意味深いものに思われたのです。それもこれも、カイの目の中にはいつている、ガラスの小さなかけらのせいなのです。カイが、全体をちゃんとした形にならべますと、一つの言葉になりました。けれども、カイがつくりたいと思っている言葉にかぎって、どうしてもうまく並べることができませんでした。それは、「永遠」という言葉でした。雪の女王は、前からこう言っていたのです。「……もし、おまえがその形を見つけ出すことができたなら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴とおまえにあげるよ」。そう言われても、カイにはそれがどうしてもできなかったのです。(本文)

*

*

さて、主人公のカイは、「……寒さのために、まっ青というよりは、ほとんどどす黒くなっていました。でも、自分ではそれに気がつきませんでした。なぜなら、雪の女王がキスをして、カイから寒さの感じを奪ってしまったからです。おまけに、カイの心臓は、まるで氷のかたまりのようだったのです」とある。——まず、ここまでは、主人公(カイ)のからだの様子であるが、大事なのは、ここからであり、「……カイは、あちこちからさきのがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきて、それをいろいろに組み合わせ、何かをつくりだそうとしていました。ちょうど、わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの「中国遊び」というのに似ていました。カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形をならべていました。それは「理知の氷遊び」というものでした。カイの目には、これらの形こそ、もつともすぐれた、そして、このうえなく意味深いものに思われたのです」とある。

まず、主人公のカイが、「……あちこちからさきのがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきた」のは、当然、いわゆる「凍った湖の氷のかけら」ではなく、「……それ以外のあちこちにあつたさきのがった平たい氷のかけらをいくつか引きずってきた」ということであり、しかも、その「さきのがった平たい氷のかけらをいろいろに組み合わせ、何かをつくりだそうとしていた」のである。それでは、なぜ、「……さきのがった平たい氷のかけら」なのだろうか？ それは、ちょうど、「……わたしたちが小さな木の板切れをならべて、いろいろの形をつくって遊ぶ、あの『中国遊び』というのに似ていました」とある。——つまり、「……小さな木の板切れをならべて、いろいろの形を

くって遊ぶ」ためには、まず、同じような「板の厚さ」（それが「平たい氷のかけら」であるほうがよく、また、面と面とを「びたつと合わせる」ためには、先の丸まったものよりはとがったもののほうがよいのであり、それゆえ、まさに「さきのとがった平たい氷のかけら」となるのである。そして、「……カイは、あちこち歩きまわって、いろいろな形を、それも一番手のこんだ形を並べていました。それは『理知の氷遊び』というものであり、カイの目には、これらの形こそ、最もすぐれた、この上なく意味深いものに思われたのです」とある。——つまり、複雑であれば複雑であるほど、また、難しければ難しいほど、そして、緻密であれば緻密であるほど、より優れていると考える、それが、まさに『理知の氷遊び』（つまり「理知の最大の特徴」）であり、それは、例えば、ゲームなどでも、すぐに出来てしまうようなものではなく、やはり、「……複雑であれば複雑であるほど、また、難しければ難しいほど、そして、緻密であれば緻密であるほど、より優れていると考える」のと全く同じように、「……カイの目には、これらの（一番手のこんだ）形こそ、最もすぐれた、この上なく意味深いものに思われた」となるのである。

それでは、なぜ、そのようなことをしているのかと問えば、本文では、「……それもこれも、カイの目の中にはいつている、ガラスの小さなかけらのせいなのです。カイが、全体をちゃんとした形にならばまずと、一つの言葉になりました。けれども、カイがつくりたいと思っている言葉にかぎって、どうしてもうまく並べることができませんでした。それは、『永遠』という言葉でした」とある。——まず、ここで熟慮すべきことは、「……カイが、全体をちゃんとした形にならばまずと、一つの言葉になりました」とある。この場合、主人公のカイは、ただひたすら「……氷のかけらで言葉（文字）だけをつくっていた」のか、それとも、「……言葉（文字）以外のいろいろな物の形もつくっていた」とすべきなのか？　ここでの「一つの問題」になるが、恐らく、「……いろいろな物の形もつくっていたが、特に、言葉（文字）に執拗にこだわるのは、次のような極めてはつきりとした理由があるからであり」、それは、雪の女王は、前からこう言っていたのです。「……もし、おまえがその形を見つけ出すことができたなら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴とおまえにあげるよ。そう言われても、カイにはそれがどうしてもできなかったのです」とある。

例えば、今日では、「ハート」型と「LOVE」という「言葉」（文字）こそは、まさに「全世界共通語」（普遍的な言葉）になっているが、それは、一体、なぜかと問えば、それは、まさにわれわれ人間にとって最も「大事なもの」になるからであり、それと全く同じように、「永遠」という言葉は、英語では「FOREVER」（永遠に）が有名かと思うが、それは、いわば「（永遠に）変わらないもの」という「意味合い」を持つことになるが、それでは、まさに「永遠に変わらないもの」とは、一体、何かと問えば、それは、一つは、最究極の「真実・真理」（プラトンはそれを「勇氣そのもの」「正義そのもの」「美そのもの」「善そのもの」「イデア」と呼んだもの）であり、そして、もう一つは、われわれ人間にとって「永遠に変わらないもの」とは、まさに「善」という意識」（われわれ人間は「善の遺伝子」を内に宿して生まれて来る）が、その「善」という意識から、実に様々な「善的なもの」（例えば「善的な愛情や愛」）などが生じて来るが、その「善的な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）を持ち合わせているのが、まさに女主人公の「ゲルダ」という女の子であり、その女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「善的な愛情や愛」

(つまり「無垢の心」) によってこそ、カイの目の中に入っていたガラスの小さなかけらも涙とともに流れ出るとともに、また、女主人公(ゲルダ)の「熱い涙」によって、主人公のカイの胸につき刺さっていたガラスの小さなかけらも食い尽くしてしまうのである。

——そして、主人公(カイ)一人ではどうしてもできなかった「永遠という文字」も、女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「善的な愛情や愛」(つまり「無垢の心」)が加わることによって、初めて「永遠という文字」も自然と完成するのである。——つまり、二人(カイとゲルダ)にとつての「永遠という文字」は、すなわち、お互いを心から思いやる「永遠(の愛)」(愛わらぬ心)という言葉(文字)にほかならなかつたのである。

ちなみに、雪の女王は、「……おまえがその形を見つけ出すことができたなら、その時こそ、おまえを自由にしてあげるよ。そのうえ、わたしは、この世界と新しいスケート靴とお前をおまえにあげるよ」とある。——さて、「……おまえがその形を見つけたならば、お前を自由にしてあげるだけではなく、わたしは、この世界と新しいスケート靴とお前あげるよ」と言っている。……それでは、「この世界」とは、雪と氷の世界なのか？ それとも、この世のすべてのことなのか？ まず、雪と氷の世界を支配(統制)しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、この世を支配(統制)しているのは、いわゆる「主なる神」であるとすれば、恐らく、「この世界」とは、すなわち、雪と氷の世界になるが、ここでは特に、「雪の女王のお城」のことも知れない。それを主人公のカイがもらった場合、新しい「スケート靴」というのは、雪の女王の百以上もある氷の広々とした大広間を「自由自在」に動きまわるには、まさに「スケート靴」こそ最適になるからである。

三、雪の女王は暖かい国々へと旅立つ

さて、雪の女王は、「……わたしはこれから暖かい国々をひとまわりしてくるよ」と、言いました。「……そこへ行ったら、黒い鉄なべをのぞいてこよう」。——黒い鉄なべと言ったのは、イタリアの国にあるエトナとか、ヴェスヴィオとかいわれている、火を吐く山のことでした。——「……わたしは、それを適当に少し白く塗ってやるんだよ。そうすると、レモンやブドウの木にとつてたいへんためになるのね！」と、こう言って、雪の女王は、飛んで行きました。あとにはカイがたった一人ぼっちで何マイルもある、大きながらんとした氷の広間の真ん中にすわっていました。そして、氷のかけらを見つめて、いつまでもじっと考え込んでいました。しまいには、からだの中がみしみしいうほど固く凍りついてじつとすわっていました。もし人が見たら、カイは凍え死んでいるのだろうと思うことでしょう。(本文)

*

*

まず、雪の女王は、「……わたしはこれから暖かい国々をひとまわりしてくるよ」と言っている。——これは、非常に興味深い内容であり、雪の女王というのは、雪と氷の世界を支配(統制)していて、世界中のいたるところに雪と氷をもたらししているが、その場合、寒い国々だけではなく、暖かい国々にも、例えば、高い山の山頂などには雪や氷をもたらししているのであり、例えば、「……そこへ行ったら、黒い鉄なべをのぞいてこよう」、——黒い鉄なべと言ったのは、イタリアの国にあるエトナ山とか、ヴェスヴィオ山とかい

う、いわゆる「火を吐く山」（つまり活火山）のことであり、有名な「エトナ山」（標高三三二九呎）は、日本の「富士山」の標高（三七七六呎）に近く、冬には、山頂に実際雪が降るのであり、また、イタリア・ナポリにあるヴェスヴィオ山は、西暦七九年に、その火山の大噴火によって古代都市が丸ごと埋まってしまった「ポンペイ遺跡」で有名であるが、その山頂にも、冬には雪が降るのであり、つまり、「……わたしは、それを適当に少し白く塗ってやるんだよ。そうすると、レモンやブドウの木にとってたいへんためになるのでね！」と言っているが、実際、この地はレモンやブドウなどの産地でもあり、また、例えば、熱帯のアフリカ・タンザニア北東部にある有名な「キリマンジエロ」の山頂（標高五八九五呎）などにも雪は降るのである。

一方、「……あとにはカイがたった一人ぼっちで何マイルもある、大きながらんとした氷の広間の真ん中にすわっていて、氷のかげらを見つめて、いつまでもじっと考え込んでいました。しまいには、からだの中がみしみしいうほど固く凍りついてじっとすわっていました。もし人が見たら、カイは凍え死んでいるのだろうと思うことでしょう」とある。——これは、主人公のカイのからだは、もう「ほとんど限界にまで来ている」ということであり、そのような時に、まさに女主人公の「ゲルダ」が城の中へと入って来るのである。

四、カイとの再会と魔法を解く言葉

さて、ゲルダが大きな門を通過して、お城の中に入って来たのは、ちょうどその時でした。門の中は、身を切るような風が吹きまくっていました。けれども、ゲルダが「夕べの祈り」を唱えますと、さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになりました。そこで、大きながらんとして寒い寒い広間の中に入りました。——そして、そこにカイの姿を見つけてきました。それがカイであることはすぐわかりました。ゲルダは、カイの頸（むく）に飛びついて、しっかりと抱きしめて叫びました。「……カイちゃん！ なつかしいカイちゃん！ ああ、とうとうあなたを見つけたわ！」と。——けれども、カイはずっと身動きもしないでからだをこわばらせて、冷たくなってすわっていました。——ゲルダは、熱い涙を流して泣き出しました。その涙は、カイの胸の上に落ちて心臓の中にしみこんでゆきました。そして、氷のかたまりを溶かした上、その中に入った小さな鏡のかげらを食い尽くしてしまいました。カイはゲルダを見つめました。ゲルダはあの賛美歌をうたいました。

バラの花 かおる谷間に

おわします おさなごイエス様！ （本文）

*

*

さて、女主人公のゲルダが、「……大きな門を通過して、お城の中に入って来たのは、ちょうどその時でした。門の中は、身を切るような風が吹きまくっていたが、ゲルダが『夕べの祈り』を唱えると、さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになりました」とある。——これは、何か「困難や苦難」などに直面すると、女主人公のゲルダは、『主の祈り』とか『夕べの祈り』などをよく唱えるが、それは、いわば「神の力」（神の御加護）を衷心から「お願い」（祈願）することであり、そうすると、「……さしもの風も、まるで眠ろうとするかのように静かになり、そこで、大きながらんとして寒い寒い広間の

中に入りました」となるのである。——つまり、女主人公のゲルダ（その「無垢な心」は、たった一人ではなく、実は、「主なる神」と常に一緒にいる、ということであり、だからこそ、次のようなことも起こり得るのである。

つまり、大きながらんとして寒い寒い広間の中に入ると、そこにカイの姿を見つけるが、それがカイであることはすぐにわかり、女主人公のゲルダは、カイの頸に飛びついて、しっかりと抱きしめて叫びました。「……カイちゃん！ なつかしいカイちゃん！ ああ、とうとうあなたを見つけたわ！」と。——けれども、カイはずっと身動きもしないでからだをこわばらせて、冷たくなつてすわつていました」とある。——むろん、このままでは、どうにもならない状況であるが、ここに「神の力」（神の御加護）も加わつて、——女主人公のゲルダが「熱い涙」を流して泣き出すと、その「涙」（熱い涙）は、カイの胸の上に着いて心臓の中に染み込んでいき、そして、氷のかたまりを溶かした上、その中に入った小さな「鏡のかけら」を食い尽くしてしまうと、主人公のカイは、ゲルダを見つめ、一方、女主人公のゲルダは、あの「賛美歌」をうたいました。それは、「……バラの花、かおる谷間に おわします おさなごイエス様！」というものであり、これこそ、二人の「心」が共有して持つていた「歌と想い出」であり、これによって、主人公のカイにかけられていた「魔法が解かれる」ことになるのである。

五、カイの目から鏡のかけらが流れ出る

この歌を聞くと、カイは、わっと泣き出しました。そして、泣いた拍子に鏡の小さなかけらが目の中からころがり出しました。カイは、ゲルダに気がついて、喜びの声を上げました。「……ああ、ゲルダちゃん！ 大好きなゲルダちゃん！ ——こんなに長いあいだ、君はどこに行つてたの？ で、僕はどこにいるんだろう？」と、こう言いながら、あたりを見まわしました。「……ここはなんて寒いんだろう！ なんて、がらんとした、広いところなんだろう！」と、こう言つて、ゲルダにしがみつきました。ゲルダは、もううれしくてうれしくて笑つたり泣いたりしました。その様子があまりにも幸福そうなので、氷のかけらまでがうれしくなつて、ぐるぐるおどりまわりました。やがて、おどりつかれたあげく、横になりました。すると、どうでしょう！ あの言葉のつづりどおりに、並んでいるではありませんか。雪の女王が、それさえ考え出せたら自由にあげよう、そして、この世界と新しいスケート靴とをあげる、といった、あの言葉があらわれているのです。ゲルダは、カイのほほにキスをしました。すると、ほほは、花が咲いたように赤みがさしてきました。今度は、目にキスをしました。すると、目は、ゲルダの目のようにいきいきとしてきました。今度は、手と足とにキスをしました。すると、カイはすっかり健康になつて、元気が出てきました。もう、こうなれば雪の女王が、いつ、もどつてきてもだいじょうぶです。カイを自由にする免許状が、きらきら光るこおりのかけらで、そこにはつきりと書きあらわされているのです。（本文）

*

*

さて、主人公のカイは、「……この歌を聞くと、カイは、わっと泣き出しました」とある。これは、二人の「心」が共有して持つていた「歌と過去の記憶」などを、まさに「想い出した」ということであり、そして、「……泣いた拍子に鏡の小さなかけらが目の中か

らころがり出ました」。カイは、ゲルダに気がついて、喜びの声を上げました。「……ああ、ゲルダちゃん！ 大好きなゲルダちゃん！ ——こんなに長いあいだ、君はどこに行つてたの？ で、僕はどこにいるんだろう？」と、こう言いながら、あたりを見まわすと、「……ここはなんて寒いんだろう！ なんてがらんとした広いところなんだろう！」と、こう言つて、ゲルダにしがみつきました。ゲルダは、もううれしくてうれしくて笑つたり泣いたりしました」とある。——これは、まさに「三つのもの」、一つは、「……目の中に入った小さな鏡のかけら」、一つは、「……心臓に突き刺さった小さな鏡のかけら」、そして、もう一つは、「……雪の女王のキスによってかけられた魔法」、この「三つのもの」が「完全に取り除かれた」ということである。

それでは、それらを取り除いたものは、一体、何であつたかと問えば、それは、まさに女主人公のゲルダの、その「二途な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）によってこそ、カイの目の中に入っていたガラスの小さなかけらも涙とともに流れ出るとともに、また、女主人公（ゲルダ）の「熱い涙」によって、主人公のカイの心臓につき刺さつていたガラスの小さなかけらも食い尽くされ、そして、雪の女王のキスによってかけられた魔法も解かれるのである。——そして、主人公のカイ一人ではどうしてもできなかつた「永遠という文字」も、女主人公の「ゲルダ」という女の子の、その「二途な愛情や愛」（つまり「無垢の心」）が加わる、ことよつて、初めて、「永遠という文字」も自然と完成するのである。——それは、二人（カイとゲルダ）にとつての「永遠という文字」は、すなわち、お互いを心から思いやる「永遠（の愛）」という言葉（文字）にほかならなかつたのである。

それは、本文では、「……（二人の）その様子があまりにも幸福そうなので、氷のかけらまでがうれしくなつて、ぐるぐるおどりまわりました。（これは『氷』も魂《英知》を持つていているということであり）、やがて、おどりつかれたあげく、横になりました。すると、どうでしょう！ あの言葉（永遠）のつづりどおりに、並んでいるではありませんか。雪の女王が、それさえ考え出せたら自由にあげよう、そして、この世界と新しいスケート靴とをあげる、といった、あの言葉があらわれているのでは」となるのである。

*

*

それでは、雪の女王が言う「この世界」とは、一体、どのような「世界」になるのだろうか？ 例え、雪と氷の世界なのか？ それとも、この世のすべてのことなのか？ まず、雪と氷の世界を支配（統制）しているのは、まさに「雪の女王」であり、一方、この世を支配（統制）しているのは、いわゆる「主なる神」であるとすれば、恐らく、「この世界」とは、すなわち、雪と氷の世界になるが、ここでは特に、「雪の女王のお城」のことなのかも知れない。それを主人公のカイがもらつた場合、新しい「スケート靴」というのは、雪の女王の百以上もある氷の広々とした大広間を「自由自在」に動きまわるには、まさに「スケート靴」こそ最適になるからである。

そして、女主人公のゲルダが、「……カイのほほにキスをする、ほほは花が咲いたように赤みがさし、また、今度は目にキスをする、目はゲルダの目のようにいきいきとし、そして、今度は手と足とにキスをする、カイはすっかり健康になつて、元気が出てきました。もう、こうなれば雪の女王が、いつもどつてきてもだいじょうぶであり、カイを自由にする免許状が、きらきら光るこおりのかけらで、そこにはつきりと書きあらわされているのでした」と展開するのである。

六、雪の女王の大きな城を出る

さて、二人は手を取り合つて、この大きな城を出ました。そして、おばあさんのことや屋根の上のバラの花の事などを語り合いました。こうして二人が歩いて行きますと、風はすっかり静まり、お日様は明るく輝き出しました。やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ますと、もうそこにはトナカイが来て、待っていました。見ると、もう一匹、若いトナカイもいつしよでした。このトナカイは、いっぱいにくくらんだ乳房ちぶさかをしていて、二人の子供に暖かいお乳ちちを飲ませて、その口にキスをしてやりました。二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行きました。ここで、二人は熱い部屋へやの中でからだをあたためて、帰り道を教えてもらいました。それから、ラップ人の女のところへ来ました。この女は、一人に新しい着物を縫つておいてくれました。そして、自分の櫛そりを用意してくれました。

二匹のトナカイは、こんどは櫛そりと並んで走りながら、国境まで送つてくれました。ここまで来ますと、はじめての緑の草が土の中からのぞいていました。ここで二人は、トナカイと、ラップ人の女とに別れを告げました。「……さようなら！」と、みんなは、口々に言いました。やがて、最初の小鳥がさえずりはじめました。森には緑の芽がもえ出ていました。その時、森の中から、ゲルダの見覚えのあるりっぱな馬にまたがって、（それはあの金の馬車をひいた馬でした）、一人の若い娘が出てきました。その娘は、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさしていました。それは、あの山賊の娘でした。娘は、家うちにいるのがいやになって、まず、北の方へ行つてみようと思つてきたのでした。そして、もし、そこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへ、行つてみるつもりだったのでした。娘はすぐゲルダに気がつきました。ゲルダのほうでも娘に気がつきました。二人はどんなに喜んだかしれません。（本文）

*

*

さて、本文では、「……二人は手を取り合つて、この大きな城を出ました。そして、おばあさんのことや屋根の上のバラの花の事などを語り合いました」とある。——これは、非常に大事な意味合いを持つものであり、例えば、夫婦や親子或いは恋人や友だち、その他、もう誰との関係であつてもよいが、いわゆる「二人のきずな」というのは、一体、どのようなものになるのかと問えば、それは、「自分の心」と「相手の心」とが深く重なり合う部分、その「深く重なり合う部分」こそは、二人が「同じような思い、考え、夢、過去の様々な思い出、その他」などを共有している部分であり、この「二人が共有して持っている部分」こそは、まさに「二人のきずな」の部分であり、そして、「自分の心」と「相手の心」とが深く重なり合う部分、その「深く重なり合う部分」こそは、お互いに深く、「共感、共鳴、同感、感動、感動でき得る部分」でもあるのである。

そして、「……こうして二人が歩いて行きますと、風はすっかり静まり、お日様は明るく輝き出しました。やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ますと、もうそこにはトナカイが来て、待っていました。見ると、もう一匹、若いトナカイも一緒でした。このトナカイは、いっぱいにくくらんだ乳房ちぶさかをしていて、二人の子供に暖かいお乳ちちを飲ませて、その口にキスをしてやりました」とある。——これは、ラップ人の女のところ、トナカイ

は、自分の話を先にしたという場面があったが、それは、トナカイにとって、この「ラップランド」は、まさに「生まれ故郷」であり、それゆえ、今、故郷に久しぶりに帰ってきて、まさに自分の「故郷のこと」（例えば家族や友だち或いは恋人その他）についていろいろ聞きたいことは山ほどあったということであり、そして、「……二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行き、ここで、二人は熱い部屋の中でからだをあたためてから、帰り道を教えてもらい、それから、ラップ人の女のところへ来ると、その女の人は、二人に新しい着物を縫っておいてくれ、しかも、自分の櫛まで用意してくれました」と続くのである。

そして、「……二匹のトナカイは、こんどは櫛と並んで走りながら、国境まで送ってくれたが、ここまで来ると、はじめて緑の草が土の中からのぞいていました。ここで二人は、トナカイとラップ人の女とに別れを告げた」とある。——だとすれば、ラップ人の女が櫛を走らせていたことになるかと思う。そして、「……さようなら！」と、みんなは、口々に言いました。やがて、最初の小鳥がさえずりはじめ、森には緑の芽がもえ出ていました。その時、森の中から、ゲルダの見覚えのあるりっぱな馬にまたがって、（それはあの金の馬車をひいた馬でしたが）、一人の若い娘が出てきました。その娘は、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさした、それは、あの山賊の娘でした。山賊の娘は、家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきたのです。そして、もし、そこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだったので。娘はすぐゲルダに気がつき、そして、ゲルダのほうでも娘に気がつきました。二人はどんなに喜んだかしれませんとある。

*

*

さて、途中で「山賊の娘」に出遭うことになるが、その「山賊の娘」は、「……家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと出てきて、そして、もしそこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだった」とある。——これは、非常に面白いところであり、というのも、この山賊の娘は、なぜ、どうして「ゲルダの話」をあれほど二度まで聞き直すほど強い、「興味や関心」を持ったかと問えば、それは、まさに「……家にいるのがだんだんいやになってきていて、いつかは自分も広い世の中に出てみたいと思っていたところ」に、たまたま女主人公のゲルダと出遭って、その「ゲルダの話」を聞くことで、「……自分も広い世の中に出てみよう」と決心して、今、ここにこうして居るのである。そして、その「いで立ち」は、「……りっぱな馬にまたがり、きらきら光る赤い帽子をかぶり、二丁のピストルを前にさしていた」とあるが、その山賊の娘は、すぐにゲルダに気がつき、一方、女主人公のゲルダのほうも山賊の娘に気がつき、そして、この二人は、お互いに「再会を喜び合った」ということである。

七、山賊の娘とゲルダとの会話

さて、山賊の娘は、「……あなたも変わり者だね。ずいぶんあっちこちぶらついたつていうじゃないか」と、カイに向かって言いました。「……いったいあなたのために世界の果てまで行くほど値打ちがあるかどうか、あたしはそれが知りたいね」と言うと、ゲルダは、娘のほほをかるく打ちながら、王子と王女のことをたずねました。「……二人とも

外国へ旅に出たよ」と、山賊の娘は言いました。「……では、あのカラスは？」と、ゲルダはたずねました。「……ああ、あのカラスは死んだよ」と、娘は答えました。「……やさしいおかみさんのカラスは、やもめになつて、黒い毛糸の切ればしを足につけているよ。身も世もなく悲しんでいるわ。何もかもつまらないことばかりさ！」「……それよりか、あんたのほうはあれからどうしたの？ どうやってこの人をつかまえたの？ それを話してよ！」と聞くのであった。——そこで、ゲルダとカイは、こもごも今までのことを話しました。「……なるほど、それで、ぺちやくちや、ぺちやくちやというわけなんだね！」と、山賊の娘は言いました。そして、二人の手を握にぎつて、もしいつか二人のいる町を通ることがあつたら、きつと訪ねるからと約束しました。そして、広い世の中へ馬を飛ばして行つてしまいました。(本文)

*

*

さて、この「場面」は、山賊の娘と女主人公のゲルダとの会話になるが、まず、山賊の娘は、「……あなたも変わり者だね。ずいぶんあつちこつちぶらついたつていうじやないか」「……いったいあんたのために世界の果てまで行くほど値打ちがあるかどうか、あたしはそれが知りたいね」と、カイに向かつて言うと、女主人公のゲルダは、山賊の娘のほほをかるく打った」とある。——これは、女主人公のゲルダにしてみれば、「……かけがいのないカイに向かつて、何ということ言うの！」ということであり、それが山賊の娘のほほをかるく打つたという行為になるのである。そして、お世話になつた王子と王女のことをたずねると、「……二人とも外国へ旅に出たよ」と、山賊の娘は言い、また、「……では、あのカラスは？」と、女主人公のゲルダがたずねると、「……ああ、あのカラスは死んだよ」と、山賊の娘は答えるのでした。

それでは、なぜ、雄おすのカラスは死んでしまつたのか？ それは、お城でちゃんとした職を持ち、また、その上、食べる物がたくさんになつてからというもの、雌めすのカラスは、よく「頭痛」がしたとあつたが、それは、雄おすのカラスの場合でも全く同じことであり、結局、食べ過ぎやストレスなどから、まさに「体調不良」になつていたのであり、それゆえ、森のカラスは、本来、森のカラスとして自由に生きた方が幸せだつたのかも知れない。それはともかく、「……やさしいおかみさんのカラスは、やもめになつて、黒い毛糸の切ればしを足につけていて、身も世もなく悲しんでいるわ。何もかもつまらないことばかりさ！」とあるが、これは、愛する「夫」(雄おすのカラス)を失つたショックから、これからどうやって生きていけばよいのか途方に暮れているということである。

一方、山賊の娘は、「……それよりか、あんたのほうはあれからどうしたの？ どうやってこの人をつかまえたの？ それを話してよ！」と聞くので、ゲルダとカイは、いろいろこもごも今までのことを話すと、「……なるほど、それで、ぺちやくちや、ぺちやくちやというわけなんだね！」と、山賊の娘は言いました。そして、二人の手を握にぎつて、もしいつか二人のいる町を通ることがあつたら、きつと訪ねるからと約束しました。そして、広い世の中へ馬を飛ばして行つてしまつたとある。——さて、この「……ぺちやくちや、ぺちやくちや」という表現は、どうやって主人公のカイを助け出したのかは、すでに詳しく書き記してきたので、ここではごく簡単にすませたことであり、そして、山賊の娘は、「……二人の手を握にぎつて、もしいつか二人のいる町を通ることがあつたら、きつと訪ねるからと約束をして、広い世の中へ馬を飛ばして行つてしまつた」とあるが、それは、

この「広い世の中」へと出て行き、自分の「心」がほんとうに求めているものにめぐり遭いたいという旅に出たということである。

八、二人は手を取り合つてわが家へと……

カイとゲルダは、再び、手を取り合つて歩いて行きました。行くに連れて、あたりは花と緑に包まれた美しい春になりました。やがて、教会の鐘が響いてきました。そして、見えのある高い塔が見え大きな町が見えてきました。それこそ、二人の住んでいた町だったのです。二人は町の中へはいつて、おばあさんの家の戸口まで行きました。そして、階段を上つて、部屋の中に入りました。部屋の中は、何から何まで元のままでした。時計は「カチ！ カチ！」いつています。時計の針もまわっています。けれども、ドアを通る時、二人は、いつの間にか、自分たちが大人になっていることに気がつきました。屋根の雨どい、バラの花が、開け放した窓の外に美しく咲いていました。そして、そこに小さな子供の腰掛けが置いてありました。カイとゲルダは、めいめいの腰掛けにすわつて、お互いに手を握りました。二人は、雪の女王の城の、あの冷たいうつろな美しさを重苦しい夢のように忘れてしまいました。おばあさんは、神様のうらかなお日様の光の中で高らかに聖書を読んでいました。「……なんじら、もし、おさなごの如くならずば、神の国にはいることを得じ」と。カイとゲルダは、互いに目を見合わせました。そして、その時、急にあの古い賛美歌の意味がはつきりました。

バラの花 かおる谷間に

おわします おさなごイエス様！

こうして、この二人は、子供のままの心を持った二人の大人は、そこに腰掛けていました。折しも、時は夏、暖かい恵みゆたかな夏でした。(完)

*

*

さて、最後の「本文」になるが、それは、「……カイとゲルダは、再び、手を取り合つて歩いて行くが、歩いて行くに連れて、あたりは花と緑に包まれた美しい春になりました。やがて、教会の鐘が鳴り響いてきて、見えのある高い塔が見え大きな町が見えてきました。それこそ、二人の住んでいた町だったのです。二人は町の中へはいつて、おばあさんの家の戸口まで行きました」とある。——まず、雪の女王のお城を出てから、やがて、赤い実をつけた茂みのところへ来ると、二匹のトナカイが待っている。そして、その二匹のトナカイは、カイとゲルダを乗せて、フィン人の女のところへ行く。そこで、二人は熱い部屋の中でからだをあたたため、帰り道を教えてもらう。それから、ラップ人の女のところへ行くと、そのラップ人の女は、二人に新しい着物と自分の櫓を用意してくれていて、そのラップ人の女の櫓に二人は乗り、二匹のトナカイは櫓と並んで走り、ラップランドの国境まで送ってくれた。ここで、カイとゲルダは、ラップランド生まれの二匹のトナカイとラップ人の女とに別れを告げる。やがて、森を歩いて行くと、山賊の娘と偶然に出遭い、二人は「再会」を喜び合う。そして、王子と王女のことを聞くと、「……二人とも外国へ旅に出たよ」と言い、また、例のカラスのことを聞くと、「……雄のカラスは死んで、未亡人

のカラスは、その悲しみに沈んでいた」と答える、そして、自分（山賊の娘）は、「……家にいるのがいやになって、まず、北の方へ行ってみようと思ってきました、そして、もしそこが気に入らなければ、今度は別の国の果てへと行ってみるつもりだ」と言う、そして、この広い世の中へ出ていき、自分の「心」がほんとうに求めているものにめぐり遭いたいという旅に出ていくのであった。そして、カイとゲルダは、再び、手を取り合って歩いて行くと、あたりは花と緑に包まれた美しい春になり、やがて、教会の鐘が鳴り響いて、見覚えのある高い塔や大きな町が見えてきた。それこそ、二人の住んでいた町であり、二人は町の中へはいって、おばあさんの家の戸口まで来るのでした。

そして、「……階段を上って、部屋の中に入ると、部屋の中は、何から何まで元のままであり、時計は、「カチ！ カチ！」と行って、時計の針もまわっていたが、ドアを通る時、二人は、いつの間にか、自分たちが大人になっていることに気がつきました」とある。

——これは、いかにも「超現実的な現象」のように思われがちであるが、恐らく、そうではなく、例えば、主人公のカイが雪の女王に連れ去られてから、女主人公のゲルダがそのカイを助け出して、この家に戻ってくるまでの間には、やはりそれなりの「歳月」は流れているのであり、その何年かの間に、知らず識らずのうちに、子供のからだから大人のからだへと変化していたのである。これは、何も特別なことではなく、誰だって、自分の「からだ」がいつから「大人のからだ」へと変わったかは、あまりよく覚えていないものであり、いつの間にか、そうなっていたというのが実感であり、しかも、主人公のカイは、ずっと「自分を見失っていた状態」であったということ、そして、女主人公のゲルダは、大好きなそのカイを捜し求めてずっと旅を続けていたのであり、それゆえ、自分の姿（全身像）を鏡に映してじっくりと自分の姿を見るようなこともあまりなかったのではないかと思う。それゆえ、気がつけば、自分の「からだ」がいつの間にか「大人のからだ」になっていたのに気づいても、それは、それほど不思議なことにはならないのである。

そして、「……屋根の雨どいのバラの花は、開け放した窓の外に美しく咲いていて、そこに小さな子供の腰掛けが置いてあったが、カイとゲルダは、めいめいの腰掛けにすわって、お互いに手を握り合い、二人は、雪の女王のお城の、あの冷たいうつろな美しさを重苦しい夢のように忘れてしまいました。おばあさんは、神様のうらかなお日様の光の中で高らかに聖書を読んでいて、そこには、「……なんじら、もし、おさなごの如くならば、神の国にはいることを得じ」とありました。カイとゲルダは、互いに目を見合わせ、そして、その時、急にあの古い賛美歌の意味がはつきりとしたのでした。それは、「……バラの花 かおる谷間に おわします おさなごイエス様！」というものでした。

さて、最後の「問題」として、「……なんじら、もし、おさなごの如くならば、神の国にはいることを得じ」とある。ここで「大事な言葉」（キーワード）は、まさに「おさなご」という言葉であり、この「おさなご」とは、一体、どのような「意味合い」になるのか、「最大の問題」になるかと思う。——例えば、有名なニーチェには、「超人」になるための、精神の「三段階」というものがあり、それは、次のようなものである。

*

*

まず、ニーチェの言う「超人」になるためには、次の「三つの段階」を経なければならぬ。まず最初は、「駱駝」の段階があり、それは、まさに「勤勉と忍耐」の段階である。

次は、「獅子」の段階へと進むことになるが、それは、まさに「今までの価値観や道徳観

或いは様々な既成概念」などを、すべてばらばらに破壊していく、「獅子」の段階である。そして、最後は、邪気のない「幼な子」へと変化しなければならないというものである。さて、「駱駝」というのは、ひたすら自分の「内的成長」を心の底から願って、まさに一心不乱に「努力を積み重ねる時期」であるが、それは、例えば、書物であれ、芸術であれ、学問であれ、その他、何であれ、古今東西の真に優れた「魂」と深く交わることによって、ひたすら自分の「内的成長」を心の底からこいねがって、まさに一心不乱に「無限の努力を積み重ねる時期」にあたるわけである。

次は、「獅子」の段階であるが、この段階は、前述のような本格的な「思考（思索）活動」を何年も積み重ねることによってこそ、今まではそうだと思っていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと何度も何度も考え方を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまおう、また、自分というあれこれの性格や考え方も空中分解してしまっ、もう何がなんだか自分でもよく分からない状態に深く陥ってしまう世界であり、そこは、まさに「虚無の世界」であり、そして、その「虚無の世界」のどん底から、そこは、まさに「すべての意味や価値などが消えてしまうような世界」であるが、その「虚無の世界」のどん底から、やがて、真に「内的成長」することによってこそ、いわゆる「心の自由」を得るということである。それは、例えば、この世のいかなる「価値観や道徳観或いは様々な既成概念」などからも、まさに「……開放されて、心の自由を得る」ということである。それは、例えば、「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得するということである。

最後に、「幼な子」という段階があるが、その「幼な子」というのは、一般に、「……無垢であり、邪気がない」と言われるが、それは、「悪意がない」ということであり、また、幼な子は、まさに「今を生きている」ということでもある。大人のように、「過去」にこだわり、「過去」に振りまわされることもなく、また、「明日」（将来）のことを思いわずらうこともなく、まさに「今がすべてと生きている存在である」ということである。さらに、身分や家柄をはじめ、学歴、職歴、職種、社会的地位、仕事や趣味或いは遊び、その他の諸能力の優劣、資産（経済力）、身体的能力、容姿・容貌、恋愛歴、様々な所有物、その他、そういう様々なことで思いわずらうこともなく、幼な子は、そのようなものからも「完全に開放されていて、まったくの自由である」ということである。

つまり、この世のありとあらゆるものから開放されているとともに、自分だけでも足りているという存在こそは、まさにニーチェの「幼な子」であり、しかも、その「幼な子」が、そのまま「超人」となるためには、身体は、大人の「逞しい肉体」を持ち、一方、精神は、いわゆる「大空のような無色透明な心」（つまり「無垢の心」）を獲得しているとともに、自ら考え、自ら判断し、自ら行動でき得るような、そういう精神の自立した一人の人間として「新たに誕生する」存在でなければならぬ。それが、すなわち、「人間」という段階から、まさに「超人」という段階へと「成長・進化」した存在ということである。——しかも、この「超人」は、「人生」を肯定し、この世を「肯定」し、そして、「人生」をたくましく生きていく存在であり、あの世での「幸せ」をひたすらこいねがうような存在ではなく、この世に生き、この世で満足し得る存在でもあるのである。

*

*

さて、本文の「……おさなごの如くならずば」とあるが、それは、まさに「幼な子のよ

うな無垢の心」を持った人間でなければ、「……神の国に入ることにはできない」ということとであり、また、「……バラの花 かおる谷間に おわします おさなごイエス様！」とあるが、例えば、「バラの花」をどのよう解釈するかは各人それぞれ違って来るだろうが、仮に「バラの花」を「真実の愛」（或いは「神の愛」と解釈すれば、その本文の意味は、まさに「……バラの花（真実の愛）（神の愛）の咲き薫る谷間（天国）におわします、幼な子のような無垢の心を持ったイエス様！」という意味合いになるのである。

こうして、この二人は、子供のままの心（無垢の心）を持った二人の大人は、そこに腰掛けていました。折しも、時は夏、暖かい恵みゆたかな夏でした。（完結）

*

*

み
に
く
い
ア
ヒ
ル
の
子

みにくいアヒルの子

例えば、アンデルセンの数多くの「作品」の中には、有名な『みにくいアヒルの子』という作品もあるかと思うが、その「作品」の冒頭は、次のようなものである。

一、冒頭の文章

さて、田舎はどこもすばらしい景色でした。だって、夏でしたもの！ 小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がう高く積み上げられています。（中略）、そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました。そうです。まったく、田舎はすばらしい光景でした。

さて、そこのお日様の明るくさしている中に、深い堀割に囲まれた一軒の古いお屋敷がありました。土堀から水ぎわまで、大きなスカンポの葉が茂っていました。それは高く伸びていて、一番大きな葉の下では、小さな子供なら、まっすぐに立つこともできませんでした。その中は、ちょうど密林のように、足の踏みこむところもありませんでした。そして、そこに、一羽のアヒルのお母さんが、巢の中にすわっていました。いま、ちょうど小さいアヒルの子をかえそうとしているところでした。けれども、それが大へん手まどるのと、おまけに、誰も見舞いに来てくれないのとで、もうすっかり飽き飽きしていました。ほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかったです。（本文）

さて、冒頭の本文は、「……田舎はどこもすばらしい景色でした。だって、夏でしたもの！ 小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がう高く積み上げられていました。その中をコウノトリが長い赤い脚で歩きながら、エジプト語でぺちやくちやおしゃべりをしていました。このエジプト語は、お母さんから教わったのです。そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました。そうです。まったく、田舎はすばらしい光景でした」とある。

まず、全体の「田舎の風景」の描写からはじまり、「……季節は夏であり、小麦は黄色く、カラス麦は青々と育ち、向こうの緑の草地には、干し草がう高く積み上げられていました。これらは植物たちであり、一方、動物たちは、例えば、コウノトリが長い赤い脚で歩きながら、エジプト語でぺちやくちやおしゃべりをしていましたとある。これは、欧州のコウノトリには「留鳥・渡り鳥」どちらもいるが、恐らく、渡り鳥になるのだろう。そして、畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖が幾つかありました」とある。——さて、この「……畑と草地のまわりには大きな森が広がっていて、その森の真ん中に深い湖（や沼など）が幾つかありました」とあるが、これは非常に大事な描写であり、なぜなら、みにくいアヒルの子は、アヒルの母親や兄弟（姉妹）たちと離れて、ひとりぼっちになり、やがて、「こゝで渡り鳥の「鴨や雁或いは白鳥など」と出遭うことになるからである。

ところで、水鳥の「鴨や雁或いは白鳥その他」などは、お互いどうい関係になっ

るのかと問えば、それは、次のようなものであり、まず、これらはすべて「ガンカモ類」に属して、しかも、「鴨」より大きくて、「白鳥」より小さいのを「雁」と呼び、また、「家鴨」というのは、野生の真鴨を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「肉や卵や羽毛」などを利用し、また、「鶯鳥」も全く同じであり、野生の雁を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「肉や卵や羽毛」などを利用して利用しているものである。

ちなみに、「ガンカモ類」は、正式には「鳥綱カモ目カモ科」に属し、「鴨」は、「カモ科マガモ属」、また、「雁」は、「カモ科ガン亜科」、そして、「白鳥」は、「カモ科ハクチョウ属」、また、「家鴨」は、「カモ科マガモ属」、そして、「鶯鳥」は、「カモ科ガン亜科」ということである。——つまり、カモもガンも白鳥もアヒルもガチョウもみな同類の水鳥であり、そして、カモより大きく、白鳥より小さいのをガンと呼び、また、マガモの家禽化がアヒルであり、そして、ガンの家禽化がガチョウになるのである。

*

*

さて、「……そこのお日様の明るくさしている中に、深い堀割に囲まれた一軒の古いお屋敷がありました。その土塀から水ぎわまで、大きなスカンポの葉が茂っていました。それは高くのびていて、一番大きな葉の下では、小さな子供なら、まっすぐに立つこともできました。その中は、ちょうど密林の中のように、足の踏みこむところもありませんでした」とある。——これは、当然、人間や天敵などに見つからない、ような「草むらの茂み」に卵を産むのであり、そして、そこに、まさに「……一羽のアヒルのお母さんが、巢の中にすわっていて、いま、ちようど小さいアヒルの子をかえそうとしているところでした。けれども、それが大へん手まどるのと、おまけに、誰も見舞いに来てくれないので、もうすっかり飽き飽きしていました。ほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかつたのです」とある。——まず、アヒルの卵は、何日ぐらいで孵化（ヒナになる）のかと問えば、それは、約一ヶ月弱であり、しかも、アヒルは、気まぐれで最後まで温める場合もあれば、温めない場合もきわめて多く、それが本文では、まさに「……大へん手まどる」ということであり、それゆえ、もうすっかり飽き飽きしていました。それにほかのアヒルたちは、堀割の中で泳ぎまわっているほうが、ここまであがってきて、スカンポの葉の下でおしゃべりするより、ずっとよかつたのです」となるのである。——ちなみに、鳥の体温は、四十〜四十二度ぐらいありますが、それは、一般に、体温を高く維持することが、運動量の多い「空を飛ぶこと」のウォーミングアップ（つまり体のアップ）になっているということである。

二、アヒルのお母さん

それでも、とうとう卵が一つまた一つと割れて、「ピヨ！ピヨ！」と鳴き出しました。そして、あつちでもこつちでも卵のきみがむくむくと動き出して、可愛い頭を出しました。「ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんアヒルは言いました。すると、みんなは大いそぎで出てきて、緑の葉の下あたりを見まわしました。お母さんは、みんなに見たいだけいくらでも見せてやりました。なぜって、緑色は目のためにいいからです。「……世の

中つてずいぶん大きいんだなあ！」と、ひなたたちは口々に言いました。確かに、今までの卵の中にいた時とは、全く別の世界に出てきたのですものね。「……おまえたち、これが世の中の全部だとも思っているのかい？」と、お母さんは言いました。「……どうして、どうして！ 世の中というのはね。このお庭のずつとむこうがわの、牧師さんの畑の中まで広がっているんだよ。お母さんでさえ、まだ行ったことがないんだよ！ ——それはそうと、これでみんなかい？、——こう言いながら、からだを起こしました。「……おや、まだ、みんなじゃないね？ 一番大きい卵がまだ残っているよ。なんて長くかかるんだろ。ほんとに、あきあきしたわ」。こう言つて、お母さんは、またすわり込みました。(本文)

* * *

さて、いよいよ卵が孵化するが、その時の様子は、「……とうとう卵が一つまた一つと割れて、『ピョー！ピョー！』と鳴き出し、そして、あつちでもこつちでも卵のきみがむくむくと動き出して、可愛い頭を出しました。『ガー、ガー、早く、早く！』と、お母さんアヒルが言うと、みんなは大いそぎで出てきて、緑の葉の下であたりを見まわすが、お母さんは、みんなに見たいだけでも見せてやりました。なぜって、緑色は目のためにいいからです」とある。——まず、アヒルは、一回に何個ぐらいの卵を産むのか！ 一般に、年間では、一五〇〜二〇〇個ぐらいとされている。だとすれば、毎日、一個の時もあれば、二、三日で一個という場合もあるのだろう。一方、ニワトリの場合は、年間で三〇〇個ぐらいとされているので、ほぼ毎日一個ずつ産む(一日に二個は無理)ということになるのだろう。そして、アヒルの卵は、ニワトリの卵より大きく、ふつう安全なまから生で食はず、必ず熱を加えた状態(様々に調理)して食べることになるかと思う。

さて、生まれたひなたちは、「……世の中つてずいぶん大きいんだなあ！」と、口々に言うので、確かに、今までの卵の中にいた時とは、全く別の世界に出てきたのですものね。お母さんは、「……おまえたち、これが世の中の全部だとも思っているのかい？、……どうして、どうして！ 世の中というのはね。このお庭のずつとむこうがわの、牧師さんの畑の中まで広がっているんだよ。お母さんでさえ、まだ行ったことがないんだよ！」とあるが、——これは、アヒルの「行動範囲」が、いかに「狭い」かということであり、それは、ニワトリの場合も全く同じことであり、それは、結局、長い距離飛べないからであり、それに比べて、渡り鳥の「鴨や雁ガモ或いは白鳥など」は、アヒルやニワトリには考えられないほどの「長い距離」を飛行でき得るということである。

さて、お母さんは、「……それはそうと、これでみんなかい？」と、こう言いながら、からだを起こすと、「……おや、まだ、みんなじゃないね？ 一番大きい卵がまだ残っているよ。なんて長くかかるんだろ。ほんとにあきあきしたわ」と、こう言つて、お母さんは、また、すわり込みました、とある。——まず、白鳥の卵の「孵化」は、アヒルの「三十日弱」に比べて、少し長い「三十日から四十日」ほどであり、それゆえ、「……なんて長くかかるんだろ」となるが、その「一番大きい卵」から生まれて来るのが、まさに主人公の「みにくいアヒルの子」であるとともに、ここからまさに『みにくいアヒルの子』の「物語」(ストーリー)は、いよいよ展開していくのである。

三、年寄りのアヒルのお見舞い

さて、そこに年寄りのアヒルがお見舞いに来て、「……おまえさん、どんな工合だね？」と、こう聞きました。すると、「……この卵が一つだけ、ずいぶん長くかかりますの」と、すわっているアヒルが言いました。「……まだ、穴のあく様子がありませんの。けれど、まあ、ほかのを見てやってください。こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありますわ。みんなお父さんそっくりですの。そう言えば、あのひどい人つたら、見舞いにも来てくれないんですよ」と言う。「……どれ、その割れない卵というのを、わたしに見せてごらん」と、年寄りは言いました。「……これはおまえさん、七面鳥の卵だよ！ あたしも、いつかだまされてね、生まれた子には、ほんとうに苦労させられたよ。なにしろ、おまえさん、水をこわがるんだからね。どうしても、水の中へ入れてやることのできなかつたの。いくらあたしがガーガー言つて、つつついても、どうしてもだめだったのよ。——その卵をお見せ！ ああ、やつぱりそうだ、七面鳥の卵だよ！ こんなものはこのままにして、ほかの子供たちに、早く泳ぎを教えることだよ」と言う。(本文)

*

*

さて、年寄りのアヒルがお見舞いに来て、「……おまえさん、どんな工合だね？」と聞くので、すわっているアヒルは、「……この卵が一つだけ、ずいぶん長くかかりますの」と言い、「……まだ、穴のあく様子がありませんの。けれど、まあ、ほかのを見てやってください。こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありますわ。みんなお父さんそっくりですの。そう言えば、あのひどい人つたら、見舞いにも来てくれないんですよ」と言うのでした。——まず、アヒルというのは、本来、野生のマガモを飼いらして「家禽化」(人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの)であり、それゆえ、一般に、繁殖能力は、極めて脆弱であり、お母さんのアヒルが最後まで卵を温めることも少なく、ほとんどの場合、人間の手で人工的に孵化させることになり、また、オスのアヒルが卵を温めるようなこともないのである。ただ、野生化したアヒルであれば、最後まで卵を温めて、ひながかえることは十分あり得ることである。そして、そのアヒルのひなたちは、確かに、「……こんな可愛らしいアヒルの子たち、わたし、まだ見たことがありますわ」と言いたくなるような、そういう小さくて可愛らしい黄色い姿であり、鳴き声も、ビヨ、ピヨであり、それは、ニワトリのひよこにも似ているが、アヒルの子は、くちばしは、平たく、足には水かきが付いているのです。一方、白鳥のひなは、灰色かかった色のひなであり、それ自体、みにくいというのではないが、まわりのアヒルの子たちとは色や形が変わっていたり、また、からだが大き過ぎるということではじめられたりするわけである。——とはいえ、カモもガンも白鳥もアヒルもガチョウもみな同類(ガンカモ類)の水鳥であり、そして、カモより大きく、白鳥より小さいのをガンと呼び、また、マガモの家禽化がアヒルであり、そして、ガンの家禽化がガチョウになるのである。

それはともかく、「……どれ、その割れない卵というのを、わたしに見せてごらん」と、年寄りは言い、「……これはおまえさん、七面鳥の卵だよ！ あたしも、いつかだまされてね、生まれた子には、ほんとうに苦労させられたよ。なにしろ、おまえさん、水をこわがるんだからね。どうしても、水の中へ入れてやることのできなかつたの。いくらあたしがガーガー言つて、つつついても、どうしてもだめだったのよ。——その卵をお見せ！ ああ、やつぱりそうだ、七面鳥の卵だよ！ こんなものはこのままにして、ほかの子供た

ちに、早く泳ぎを教えることだよ」とある。

ところで、「ほかの鳥の卵を温める」ということでは、有名な「托卵」というものがある。それは、例えば、ホトトギスは、ウグイスの親鳥のいない時を狙って、そのウグイスの「複数の卵のある巣」に「自分の卵」を一個だけ産むとともに、ウグイスの卵を一個だけ「巢の外」へと出すという驚くべき行動に出るのである。そして、やがて、卵からひなに孵化することになるが、その場合、ホトトギスの卵は、ウグイスの卵よりも「二、三日前」にふかし、しかも、その生まれたばかりのホトトギスのひなは、ウグイスの親鳥のいない時に、まだ孵化していない「ウグイスの卵」を何と「自分の背中」に乗せて、一個一個すべて、「巢の外」へと出すという驚くべき行動に出るのである。その結果として、巢の中には「ホトトギスのひな」だけとなり、仮の親鳥であるウグイスの「愛情」（つまり「育雛本能」）をすべてひとり独占して、スクスクと大きくなっていくが、その場合、仮の親鳥（ウグイス）の「小さなからだ」に比べて、ホトトギスのひな鳥の余りの「大きさ」は、実に驚くばかりであるが、それでは、なぜ、仮の親鳥（ウグイス）は、それに気づかないのかと敢えて問えば、それは、結局、ウグイスの「育雛本能」（いわば「DNAの働き」）によるとしか言いようがないものであり、——それは、例えば、ひな鳥が最初に見た「身近で動くものを親だと思ひ込んでしまう」という、余りにも有名なローレンツの「刷り込み」と全く同じ習性になるのである。

四、一つの大きな卵が割れる

さて、アヒルのお母さんは、「……でも、もうすこしすわっていてやりましょう」と、言いました。「……これまで、こうしてずいぶんしんぼうしたんですもの、もうしばらく様子を見ましょう」と。すると、「……どうぞ、お好きなように！」と、年寄りのアヒルは言って帰って行きました。やがて、とうとうしまいに、その大きな卵が割れました。そして、「ピヨ、ピヨ！」と鳴きながら、ひよこがころがり出てきました。見ると、たいそうからだの大きな、みにくい子でした。お母さんアヒルは、その子をつくづく見て言いました。「……まあ、とんでもなく大きなひよこだわ！　ほかの子にこんなのは一羽だつてありやしない。ひよつとしたら、七面鳥のひなかもしれないよ。すぐわかることだから。水の中へ入れてやりましょう！　仕方がなかったら、つきとばしてでも」と言うのであった。（本文）

*

*

さて、いよいよ「大きな卵」が割れて、「ピヨ、ピヨ！」と鳴きながら、ひよこがころがり出てくるが、それは、「……たいそうからだの大きな、みにくい子でした」。お母さんアヒルは、その子をつくづく見て「……まあ、とんでもなく大きなひよこだわ！　ほかの子にこんなのは一羽だつてありやしない。ひよつとしたら、七面鳥のひなかもしれないよ」と言うのでした。——まず、卵の大きさで見ると、ニワトリの卵（Lサイズ）は、約六枚、アヒルの卵は、約十枚、そして、白鳥（オオハクチョウ）の卵は、約十一・三枚で、一回に四、五個産む、七面鳥の卵は、約十二枚ぐらいで、一回に八〜十五個であり、そして、ダチョウの卵は、鳥類最大の約二十一枚（ニワトリの卵の約三十倍）で殻の厚さも、約二〜あり厚くて丈夫である。ちなみに、マガモの卵は、ニワトリの卵よりは少し小

さく、春頃、一回に数個産み、また、マガモとアヒルを掛け合わせたものが、まさに「アイガモ」になるが、アイガモの卵は、マガモよりも少し大きく、ニワトリの卵とほぼ同じくらいであり、そして、ガチョウの卵は、かなり大きく、ニワトリの卵の三倍ぐらいになるかと思う。一方、体の大きさでは、マガモとアイガモとニワトリとアヒルとガチョウと七面鳥とオオハクチョウとダチョウになるかと思う。……そして、作品の中では、「……たいそうからだの大きな、みにくい子となっている」のである。

五、あくる日の月夜、一家を連れて堀割へ……

あくる日は、すばらしくよい天気でした。お月様は、緑色のスカンポの上を、いちめん明るく照らしていました。アヒルの子たちのお母さんは、一家をつれて堀割へおりてきました。ポチャン！ と、まず、お母さんが水の中へ飛び込みました。「……ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんは言いました。すると、アヒルの子たちは一羽ずつあとからあとから飛び込みました。水が頭の上までかぶさりましたが、すぐまた頭を出して、みごとに浮かび上がりました。そして、脚がひとりでに動きました。こうして、みんなは堀割の中に出ました。見ると、あのにくい灰色のひよこも、一緒に泳いでいるではありませんか。「……そうだよ、七面鳥なんかじゃないわ！」と、お母さんアヒルは言いました。「……どうでしょう、あの脚の動かし方の上手なこと！ からだも、あのとおり、しゃんと起こしてさ！ やっぱり、わたしの子だわ。なあに、よくよく見れば、やっぱり、可愛いとところもあるじゃないの！ ガー、ガー！ さあ、みんな、一緒にしておいで！ 世の中へつれてあげようね！ そして、鳥飼いのみなさんに引き合わせてあげよう。それだけ、踏まれたりしないように、いつもお母さんのそばにしているんですよ。それから、ネコに気をおつけ！」と、言うのでした。(本文)

*

*

さて、「……あくる日は、よい天気であり、その夜のお月様は、緑色のスカンポの上を、いちめん明るく照らしていて、アヒルのお母さんは、一家を連れて堀割へおりてきました」とある——まず、太陽の明るく光り輝く昼間ではなく、その夜の月明かりにしたのは、やはり、まだ「生まれたばかりのひな鳥たちを外敵から守る」ためであり、そして、ポチャン！ と、まず、お母さんが水の中へ飛び込み、「……ガー、ガー、早く、早く！」と、お母さんが言うと、アヒルの子たちは一羽ずつあとからあとから飛び込み、水が頭の上までかぶりましたが、すぐまた頭を出して、みごとに浮かび上がりました。そして、脚がひとりでに動いて、こうして、みんなは堀割の中に出ましたとあるが、これは、親が先に見本を示して、その泳ぎ方やえさの採り方などを教えるためであり、見ると、「……あのにくい灰色のひよこも、一緒に泳いでいるではありませんか」とある。——つまり、アヒルのお母さんは、あのにくい灰色のひよこは、もしかしたら「七面鳥の子」かも知れないと疑っていたが、しかし、一緒に泳いでいる姿を見て、「……そうだよ、七面鳥なんかじゃないわ！」と言い、「……どうでしょう、あの脚の動かし方の上手なこと！ からだも、あのとおり、しゃんと起こしてさ！ やっぱり、わたしの子だわ。なあに、よくよく見れば、やっぱり、可愛いとところもあるじゃないの！ ガー、ガー！ さあ、みんな、一緒にしておいで！ 世の中へ連れてってあげようね！ そして、鳥飼いのみなさんに

引き合わせてあげるよ。だけど、踏ふまれたりしないように、いつもお母さんのそばに
ているんですよ。それから、ネコに気をおつけ！」となっていくのである。

六、鳥飼い場へ……

こうして、みんなは鳥飼い場にやって来ました。来てみると、大へんな騒さわぎがもちあが
っていました。というのは、二軒の家族のものが、ウナギの頭の奪うばい合いをしていたので
す。ところがとうとう、ネコに横取りされてしまいました。——「……ごらん！ あれが
世の中というものよ！」と、アヒルの子のお母さんは言いました。そして、自分でも、く
ちばしをぴちやぴちやさせました。ほんとうは、お母さんも、ウナギの頭がほしかったの
です。「……さあ、こんどは、脚あしを使うんですよ」と、お母さんは言いました。「……さ
あ、いそいで歩いてごらん！ そして、あそこにいるお年寄りのアヒルさんの前へ行って、
おじきをするんですよ。あの方は、ここにいるみんなの中で、一番身分の高いひとなんだ
よ。なにしろスペイン生まれだからね。だから、あんなに太ふっていらっしやるんだよ、
それから、ほらごらん！ 脚あしに赤い布きれをむすんでいるでしょう。とても、きれいじゃない
の！ わたしたちアヒルのもらうことのできる一番大きな名譽なごうなんですよ。そして、あれ
をつけているわけは、あの方がいなくならないためと、動物や人間からすぐ見わけがつく
ためなんですよ。——さあ、みんな、いそいで！ 足をぐつと外側にむけるんですよ。お
父さんやお母さんのようにね。ごらん！ こんなふうには！ こんどは、首をさげて、ガー
と言ってごらん！」と言いました。(本文)

*

*

まず、「……みんなは鳥飼い場にやって来ました」とある。この「鳥飼い場」というの
は、恐らく、人間がえさなどを与えるような場所であり、そこへ来てみると、大へんな騒さわ
ぎがもちあがっていて、二軒の家族のものが、ウナギの頭の奪うばい合いをしていたが、それ
をネコに横取りされてしまい、「……ごらん！ あれが世の中というものよ！」と、アヒ
ルの子のお母さんは言うのでした。——これは、まさに「生存競争」(つまり「えさの奪うば
い合い」)であって、(何らかの意味で)強いものがえさを奪うばい、一方、(何らかの意味で)
弱いものは、そのえさにありつけず、指をくわえて見ているしかなく、それは、「……自
分でも、くちばしをぴちやぴちやさせては、ほんとうは、お母さんも、ウナギの頭が(好
物で)ほしかったのです」となるのである。そして、「……さあ、こんどは、脚あしを使うん
ですよ」と、アヒルのお母さんは言うが、これは、水の中から「地上」へと上がって、「…
…さあ、いそいで歩いてごらん！ そして、あそこにいるお年寄りのアヒルさんの前へ行
って、おじきをするんですよ。あの方は、ここにいるみんなの中で、一番身分の高いひと
(いわばその群れの中の中心的存在)なんだよ。なにしろスペイン生まれだからね。
だから、あんなに太ふっていらっしやるんだよ。(あんなに太ふっているのは、そのアヒルの
体質と優先的にえさを十分に食べているからであり)、それから、「……ほらごらん！
脚あしに赤い布きれをむすんでいるでしょう。とても、きれいじゃないの！ わたしたちアヒルの
もらうことのできる一番大きな名譽なごうなんですよ。そして、あれをつけているわけは、あ
の方がいなくならないためと、動物や人間からすぐ見わけがつくためなんですよ」とある。
——さて、「……脚あしに赤い布きれをむすんでいる」のは、人間から見た時の一つの「目印めじるし」で

あり、その理由は、「……あの方がいなくなると、動物や人間からすぐ見わけがつくためなんですよ」とあるが、これは、アヒルの「姿・形」(顔など)は、人間から見ればみな同じように見えるので、誰でも一目で分かるように、まさに「脚に赤い布をむすび付けている」のであり、それは、結局、この「鳥飼い場」(そこにいる鳥たち)の全体を「まどめている重要な存在」ということになるのだろう。そして、本文では、「……さあ、みんな、いそいで！ 足をぐつと外側にむけるんですよ。お父さんやお母さんのようにね。ごらん、こんなふうには、こんどは、首をさげて、ガーと言ってごらん！」となつていくが、これは、まさにアヒルのお母さんは、まだ世間のこともほかのことも何も知らないアヒルのひなたちに、いろいろなことを教えているということである。

七、鳥飼い場で……

子供たちは、言われたとおりしました。ところが、ほかのアヒルたちがまわりを取りまいてじろじろ見ていたが、大きな声で言いました。「……ごらんよ！ また仲間がやってきましたぞ。おれたちだけじゃ、まだ足りないっていうみたいだ！ チェツ、あのアヒルの子は、ありや、なんだい！ あんなのはごめんだよ！」——するとすぐ、一羽のアヒルが飛んできて、その子の首すじにかみつきました。「……ほっておいてちょうだい！」とお母さんはいいました。「……この子は、何もしないじゃありませんか」、「……うん、だけど、あんなに大きくて、へんてこだからさ！」、「……だから、つつきまわしてやるんだ！」と、かみついたアヒルは言うのでした。

すると、「……お母さんの連れておいでの、子供しゅうは、きり、ようよしじゃな！」と、脚あしに布きれをつけた年寄りのアヒルが言いました。「……みんなそろってきり、ようよしじゃ、その子だけはべつただけぞ。その子は失敗だよ！ おまえさん、つくりかえることができるといいのにね」。「……奥様、そうはまいりません！」と、お母さんアヒルは言いました。「……この子はきり、ようよしではございませんが、気だてのよい子でして、それに泳ぎもほかの子に負けずに、いえ、ことによると、いくらかじようずなくらいですの！ 大きくなつたら、見よくもなりましようし、さもなければ、時がたてば、いくらか小さくなるかもしれません。なにしろ、卵の中にあまり長くすぎたものですから、形もほとんどでないのをございます」。こう言つて、その子の首のあたりをつまんだり、羽をつくるつてやつたりしました。「……それに、この子は男の子でございますもの。きり、ようなんてことは、たいたしたさわりにはなりませんわ。この子はきつと強くなつて、りつぱにやりぬいてゆくと、わたしは信じておりますの！」、「……とにかく、ほかのアヒルの子たちは、可愛いよ！」と、年寄りは言いました。「……さあ、みんな、遠慮しないで、らくにおし！ そして、おまえさんたち、ウナギの頭を見つけたら、わたしのところに持ってきておくれよ！」——そう言われて、みんなはくつろいだ気持ちになりました。(本文)

*

*

さて、ここから、みにくいアヒルの子は、いろいろひどい目に遭うことになるが、それは、ほかのアヒルたちがまわりを取りまいてじろじろ見ていたが、大きな声で言うには、「……ごらんよ！ また仲間がやってきましたぞ。おれたちだけじゃ、まだ足りないっていうみたいだ！ チェツ、あのアヒルの子は、ありや、なんだい！ あんなのはごめんだよ！」

と。——するとすぐ、一羽のアヒルが飛んできて、その子の首すじにかみつくので、「……ほっておいてちょうだい!」、「……この子は、何もしいじやありませんか」と、アヒルのお母さんが言う、「……うん、だけど、あんなに大きくて、へんてこだからさ!」、「……だから、つつつきまわしてやるんだ!」と。かみついたアヒルは言うのでした。

*

*

さて、この「問題」は、実に古くて新しい問題であり、例えば、われわれ人間にとっても、最も厄介な問題の一つとして、いわゆる「人間関係」というものがあるのだろう。それは、家族との「人間関係」を初めとして、近隣社会、学校、会社、友だち、その他、そこに人間が二人以上集まれば、何らかの「揉め事や争い」などが生じる可能性は、常にあるわけで、われわれ人間の「ストレス」の最大の原因の一つが、様々な「人間関係」にあることは、まったく疑いようもないものである。そして、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで、イライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりすることにもなるのだろう。そして、そのイライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりした思いが、何らかの形で健全に処理されなければ、問題はないのだろうが、何か悪い形で処理されていくような場合には、実に様々な「禍わざわい」をもたらすことにもなるわけである。——例えば、若い人たちが、面白くないということ、実に様々な問題を起こす場合があるが、その原因を辿れば、家庭や学校、あるいは友だち関係、その他、何らかの「人間関係」から生じている場合が多いのだろう。また、会社で何か面白くないことがあったということで、ついつい妻に八つ当たりをしてしまい、その妻が、今度は、面白くないということ、同じように子供に八つ当たりをしてしまうというように、イライラした思いというのは、直接、相手に向かう場合と、もう一つは、次から次へと、より弱いところへと向かっていくという特徴を持っているわけである。その一つに、いわゆる「いじめ」という問題もあるのだろう。

それでは、なぜ、「いじめ」をするのだろうか? もちろん、それにもいろいろ理由があるかと思うが、一つには、相手が、気に入らないという場合もあれば、面白いらからという場合もあるのだろう。また、イライラした思いの「気晴らし」という場合もあれば、一種の優越的なものもあるのかも知れない。その他、それが、たとえばどのような理由からであれ、そこには、加害者と被害者との関係が生じ、そして、加害者は、相手より優位な立場から、権力や暴力などをふるって、ただ単にいじめるだけではなく、お金や物などを要求したり、様々なことを無理やりやらせるといったことも多く、また、いじめる側の言い分としては、自分は、何も故意にいじめているというような気持ちは、全然なくて、ただ軽い気持ちで、ちよつとからかってやろうとか、面白半分でそうしていただけたのだ、ということになるのだろう。しかし、いじめる側は、二重の「罪」を犯しているのである。というのも、故意に「いじめる」ということ自体が、一つの「罪」であるとともに、その「いじめ」を継続して行なうことによって、相手を「自殺やひきこもりその他」などのところまで追い込んでしまうということが、もう一つの「罪」になるのである。

ちなみに、自分自身、何か「不正な行為」(例えば「いじめ」)などを行なっていないかどうかを認識するためには、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分はないか? 自分自身に問うてみればよいわけである。そして、確かに「言い過ぎ、やり過ぎ」の部分があったとすれば、その部分だけは、まさに「不正な行為」(例えば「いじめ」)という

行為を行なっていたということになるのだろう。——すなわち、何らかの「揉め事や事件」などが生じるその「根底」(原因)には、必ずと言ってよいほど、何らかの「欲望や感情」などに振りまわされている「心的状態」があるとともに、いわゆる「言い過ぎ、やり過ぎ」という行為が、つねにともなっているものなのである。

一方、いじめられる側の人にとっては、もちろん、個人差はあるだろうが、相手からいじめられるということを、極めて深刻に受けとめてしまい、もうこのままでは生きてはいけないというところまで追い込まれてしまう場合も多いのだろう。これは、非常に難しい問題であり、人間が二人以上集まれば、そこには何らかの「揉め事や争い」は、必ずついてまわるものであり、われわれ人間は、他人との様々な「あつれき」のなかで生きていくというのが、まさに現実に置かれている状況なのかも知れない。そして、その他人との様々な「あつれき」のなかで、イライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりすることにもなるのだろう。そして、そのイライラしたり、腹を立てたり、あるいは相手を憎んだりした思いが、何らかの形で健全に処理されていけば、問題はないのだろうが、何か悪い形で処理されていくような場合には、実に様々な「禍」^{わざわい}をもたらすことにもなるわけである。一方、もちろん、人間関係がうまくいっていけば、それは、いわば「幸せな状態」であり、敢えて何か問題を起こす必要もないわけで、人間関係がうまくいっていないところから、実に様々な「問題や揉め事」などは、生じやすくなるということである。

*

*

さて、脚あしに布ぬいをつけた年寄りのアヒルは、「……お母さんの連れておいでの、子供しゅうは、きりようよしじゃな!」、「……みんなそろってきりようよしじゃ、その子だけべつだけど。その子は失敗だよ! おまえさん、つくりかえることができるといいのにね」と言うので、お母さんアヒルは、「……この子はきりようよしではございませんが、気だてのよい子でして、それに泳ぎもほかの子に負けずに、いえ、ことによると、いくらかじようずなくらいですの! 大きくなったら、見よくもなりましようし、さもなければ、時がたてば、いくらか小さくなるかもしれません。なにしろ、卵の中にあまり長くすぎたものですから、形もほとんどでないのをごいします。」「……それに、この子は男の子でございしますもの。きりようなんてことは、たいしたさわりにはなりませんわ。この子はきつと強くなつて、りっぱにやりぬいてゆくと、わたしは信じておりますの!」とある。

これは、非常に「大事な言葉」であり、子供の頃、どうであったかはそれほど重要な問題ではなく、人間は、その「成長過程」でどんどん「変化」(変貌)していくものであり、それゆえ、将来、その子がどのような人間になっていくかは誰にも予測でき得ないものがあり、すべての人間に「可能性は常に残されている」のであり、従って、中学や高校生ぐらいで「自殺」(それは「自分の人生をここで終わらせる」)のようなことは、あつてはならないことであり、それは、自分を余りにも「過小評価し過ぎ」であり、自分に適した場所を見つけ、そこで努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓ひらけていくものであり、大それたのは、他人の評価などではなく、自分自身を信じて、自分のやりたいこと、自分に出ることは何かを見つけて、必要な努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓ひらけていくとともに、何らかの結果が出せるようになれば、自然と他人からの評価も得られるようになるものであり、実際、『みにくいアヒルの子』のような子供(青年)時代を過ごしたとされる作者(アンデルセン)自身、自分に適した「場所と目標」を見つけ、そこで努

力を積み重ねた結果、世界的にも有名な「童話作家」として高く評価されるようになったのであり、それゆえ、夢や希望を捨てず、そのための努力を積み重ねていけば、すべての人間にその「可能性は常に残されている」ということである。

八、みにくいあひるの子は……

さて、一番おしまいに卵から出てきて、見栄えのよくないアヒルの子だけは、可哀そうに、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つつつかれたり、ばかにされたりしました。「……こやつは、だいたい大きすぎるよ！」と、誰もが言いました。なかでも七面鳥ときたら、足に拍車をつけて生まれてきたものですから、自分は、皇帝だと思いきんで、帆に風をいっぱいはらんだ船のように、からだをふくらませて、つかつかと寄ってきました。そして、ころころとを鳴らしながら顔をまっかになりました。可哀そうに、アヒルの子は、いても立つてもいられない気持ちでした。自分の姿がみにくいばかりに、鳥飼いのみんなに笑いにされるのが、しみじみ情けなく思いました。

最初の日は、こんなふうに過ぎましたが、それから、だんだん悪くなるばかりでした。可哀そうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。にいさんやねえさんたちさえ、いじわるして、いつも「……おまえみたいにみっともないやつは、ネコにでもつかまってしまえばいいんだ！」と、言うのでした。そして、お母さんも、「……いつそどこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言うようになりました。こうして、ほかのアヒルたちにはかみつかれるし、ニワトリたちにはこづかれるし、餌をやりにくる娘にはけとばされました。(本文)

*

*

さて、一番おしまいに卵から出てきて、見栄えのよくないアヒルの子だけは、可哀そうに、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つつつかれたり、ばかにされたりしました。「……こやつは、だいたい大きすぎるよ！」と、誰もが言いましたとある。――まず、みんなは「鳥飼いの場」にやって来ているのであるが、その「鳥飼いの場」というのは、恐らく、人間がえさを与えるような場所であり、それゆえ、アヒルやニワトリ或いは七面鳥やその他、人間が飼っているような鳥たちが数多くいるということであり、それゆえ、ここでの鳥たちの「価値観」は、特に人間の子供たちや大人たちから「可愛い」と思われることが何よりも大事なことであり、それによって、まさに「……可愛がられたり、大事にされたり、えさを余計にもらえたり」という、いわば「優遇される」ことにもなるが、一方、見栄えのよくないアヒルの子であると、逆に、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つつつかれたり、ばかにされたり、また、七面鳥ときたら、からだをふくらませて、つかつかと寄ってきて、ころころとを鳴らしながら顔をまっかにしたという、そのような「冷遇を受ける」ことになり、アヒルの子は、いても立つてもいられない気持ちになり、自分の姿がみにくいばかりに、鳥飼いのみんなに笑いにされるのが、しみじみ情けなく思いましたとあるが、これは、『みにくいアヒルの子』のような子供(青年)時代を過ごしたとされる作者(アンデルセン)自身の、まさに「実感」そのものになるのかも知れない。しかし、やがて、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで努力を積み重ねた結果、世界的にも有名な

「童話作家」として高く評価されるような、そのような「姿」（いわば「白鳥の姿」）へと変身したということにもなるのだろう。

さて、最初の日は、こんなふうには過ぎたが、それから、だんだん悪くなるばかりであり、可哀そうに、アヒルの子は、みんなに追いかけられました。——これは、いわば「他人」からの「いじめやいやがらせ」であり、もちろん、それも「耐えがたいもの」ではあるが、それ以上に「辛い」（或いは「骨身に堪える」）のは、にいさんやねえさんたちさえ、いじわるをして、いつも「……おまえみたいにみつともないやつは、ネコにでもつかまつてしまえばいいんだ！」と言われ、さらに、そのアヒルのお母さんまでも、「……いつそどこか遠いところへ行ってくれたらねえ！」と、言うようになってしまったのです。——これは、まさに「決定的な言葉」であり、このみにくいアヒルの子にとっての「自分の居場所」というものが「完全になくなってしまう」ということであり、こうして、ほかのアヒルたちにはかみつかれるし、ニワトリたちにはこづかれるし、餌をやりにくる娘にはけとばされるような、そのような、まさに「孤立無援」（「四面楚歌」）の状況になつてしまい、みにくいアヒルの子は、とうとう「その場」（つまり「鳥飼場」）を逃げ出すことになるのである。

九、野ガモがいる大きな沼に……

さて、とうとう、アヒルの子は逃げ出して、生垣を飛び越えました。やぶの中にいた小鳥たちがびっくりしてぱっと舞いあがりました。「……これも、僕が、みにくいからなんだ」と、アヒルの子は考えて、目をつぶりました。それでも、ずんずん先へ走って行きましました。やがて、野ガモのすんでいる大きな沼にやってきましたので、ここで一晩ねることにしました。なにしろ、すっかり疲れていましたし、それに悲しくてたまりません。

朝になると、まいあがった野ガモたちは、この新しい仲間を見つけました。「……君はいったい、何者だい？」とみんなはたずねました。アヒルの子はあっちへもこっちへも、できるだけいいねいに挨拶をしました。「……君って、なんてみつともないんだ！」と、野ガモたちは言いました。「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族のだからと結婚さえしなければね」。——可哀そうに、アヒルの子は、結婚なんて夢にも思っていないに。ただ、芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけでよかったです。

アヒルの子は、そこに、まる二日おりました。すると、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んできました。卵から出て、まだいくらかもたっていないものですから、せっかちでした。「……おい、君！」と、二羽のガンは言いました。「……君はなんてみにくいんだ。しかし、そこが気に入った！ どうだい、いっしょに旅をして、渡り鳥にならないか？ この近くのもう一つの沼に、可愛らしいきれいなガンが、二三羽いるんだよ。みんなお嬢さんでね、ガー、ガー！ っておしゃべりがしようなんだ。君は、かつこうはまずいが、でも、そこへいったら幸運をつかむことができるかもしれないぞ！」（本文）

*

*

さて、みにくいアヒルの子は、とうとう「その場」（つまり「鳥飼場」）を逃げ出して、生垣を飛び越えました。すると、やぶの中にいた小鳥たちがびっくりしてぱっと舞い

上がりましたが、「……これも、僕が、みにくいからなんだ」と、アヒルの子は考えて、目をつぶりましたとある。——まず、このみにくいアヒルの子の「心理」状態は、まさに強い「劣等感」（コンプレックス）にとらわれている状態かと思うが、例えば、心理学者のアドラーという人は、人間は誰でも何らかの「劣等感」を持っているものであるが、その「劣等感」をうまく利用すれば、例えば、自分は、病弱である、或いは、太り過ぎている、そこで、自分の身体をもっと「健康体」にしたいと心からそう思い、そのための努力を積み重ねて行けば、やがては、何もしない人たちよりは、より健康で「たくましい」（或いは「美しい」）肉体へと変身させることは十分可能なことであり、それは、すべてのことに言えることであり、大事なものは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねて行けば、道はいくらでも拓けていくことである。

それはともかく、みにくいアヒルの子は、それでも、ずんずん先へ走って行くと、やがて、野ガモのすんでいる大きな沼にやってきて、ここで一晩ねることにしました。なにしろ、すっかり疲れていましたし、それに悲しくてたまりませんでしたとある。——まず、大きな沼とあるが、池と沼と湖の違いは、一体、何かと問えば、池は、人間が作った人工的な水たまりであり、一方、沼と湖は、自然の水たまりであるが、水草が生えて水深が五メートル以内であるのが沼であり、そして、それ以上の水深があるのが、一般に、湖ということになるが、みにくいアヒルの子は、その大きな沼のところまで、人間で言えば、まさに「家出」をしてきて、今は「不安と寂しさと悲しい」気持ちで一杯になっているのである。

そして、朝になると、舞い上がった野ガモたちは、この新しい仲間を見つけて、「……君は、一体、何者だい？」とみんなはたずねました。アヒルの子は、あっちへもこっちへも、できるだけ丁寧にあいさつをしましたが、「……君って、なんてみともないんだ！」と、野ガモたちは言い、「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族の誰かと結婚さえしなければね」とある。——これは、非常に面白い場面であり、つまり、例の「鳥飼い場」というのは、アヒルやニワトリ或いは七面鳥やその他、人間が飼っているような鳥たちが数多くいるような場所であり、それゆえ、そこでの鳥たちの「価値観」は、特に人間の子供たちや大人たちから「可愛い」と思われることが何よりも大事なことであり、それによって、まさに「……可愛がられたり、大事にされたり、えさを余計にもらえたり」という、いわば「優遇される」ことにもなるが、一方、見栄えのよくないアヒルの子であると、逆に、アヒルの仲間ばかりでなく、ニワトリたちからも、かみつかれたり、つつつかれたり、ばかにされたりと、そのような「冷遇を受ける」ことになってしまう。しかし、この野ガモたちの棲んでいる「大きな沼」では、確かに、「……君って、なんてみともないんだ！」と、みんなから言われることにはなるが、しかし、それだけでひたすら「ひどい目に遭う」ということはなく、「……けれど、そんなことはどうでもいいや、僕たちの家族の誰かと結婚さえしなければね」と、その「価値観」は少し違って来るのである。

つまり、「鳥飼い場」では、「可愛い」ことが、いわば「絶対的な価値」にもなり得るが、一方、野ガモたちの棲んでいる大きな沼では、そのような「可愛さ」も大事ではあるとしても、それ以上に大事になるのは、厳しい自然の中でたくましく生き抜いていく「力強さ」であり、そのような「力強さ」がなければ、やがては「自然淘汰」されてしまうのである。それはともかく、可哀そうに、アヒルの子は、結婚なんて夢にも思っていないもののに。ただ、芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけ

でよかったですとある。——これは、みにくいアヒルの子にとっては、今はもう生きる、ことだけで精一杯であり、それは、「……芦の中に横にさせてもらって、沼の水を少し飲ませてもらえば、それだけでよかったですであり、結婚なんて夢にも思っていないませんでした」となるのである。そして、そのアヒルの子は、そこに、まる二日過ごすのでした。

すると、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んできました。卵から出て、まだいくらもたっていないものですから、せっかちであり、「……おい、君！」と、二羽のガンは言い、「……君はなんてみにくいんだ。しかし、そこが気に入った！ どうだい、一緒に旅をして、渡り鳥にならないか？ この近くのもう一つの沼に、可愛らしいきれいなガンが二三羽いるんだよ。みんなお嬢さんでね、ガー、ガー！ っておしゃべりが上手なんだ。君は、かつこうはまずいが、でも、そこへいったら幸運をつかむことができるかもしれないぞ！」とある。——これは、「鳥飼場」での鳥たちの「価値観」と大きな沼に棲んでいる野ガモたちの「価値観」と二羽の雄のガンの「価値観」とは、それぞれみな違ってくるということであり、これは、非常に「大事な認識」であり、一つの「価値観」が絶対というのではないのであり、その時、その場所、その時の状況、その他に応じて、むしろ、人それぞれによっても、その人の「……もの見方、とらえ方、考え方、また、価値観、道徳観、人生観、生き方、その他」などは、みな違って来るものであり、大事なものは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねていけば、道はいくらでも拓けていくということである。

十、その時、鉄砲の音が……

その時、「バーン！ バーン！」と、空で音がしました。そのとたんに、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまいました。水が血で赤くなりました。「バーン！ バーン！」とまた音がしました。すると、ガンの群れが、ぱっと芦の中から飛びたちました。つづいて、またもや鉄砲の音がしました。大じかけな猟がはじまったのです。猟師たちは、沼を取りまいていました。なかには芦の上のびている木の枝にのぼっている人も、二三人ありました。青い煙が雲のように、うす暗い木々のあいだをぬって、遠く水の上までたなびいていました。沼の中に猟犬がピシャ！ ピシャ！ と、はいつて来ました。芦やスゲが四方へなびきました。可哀そうに、アヒルの子にとってこんな恐ろしいことはありませんでした。びっくりして、頭を羽の下にかくそうと、うしろへふりむいたとたんに、目の前におそろしく大きな犬が立っていました。舌はだらりと口のそとにたれ、目は気味のわるいほど光っていました。鼻づらをぐつとアヒルの子のほうへ寄せて、鋭い歯をむきました。が、ピシャ！ ピシャ！ と、再び、むこうへ行ってしまうました。アヒルの子は、そのままにして。——「……ああ、よかった！」、アヒルの子は、ほっとため息をつきました。「……僕があんまり、みっともないんで、犬までがかみつかないんだ」と。そのまま、アヒルの子はじっとしていました。そのあいだも、散弾が芦の中をざわめかし、ひっきりなしに鉄砲の音がしていました。

昼もだいぶ過ぎたころ、やっと、静かになりました。それでもまだ、この哀れなひよこは起きあがる勇気が出ませんでした。それからまた、かなり時間がたって、ようやくあたりを見まわしました。そして、できるだけいそいで、沼の外へ逃げだしました。それから、

畑や草原を越えて、どんどん走って行きました。そのうちに、ひどい風が吹いてきたものですから、思うように走ることができませんでした。(本文)

*

*

さて、その時、「バーン！ バーン！」と、空で音がしました。これは、一気に「場面」が激変して、その途端に、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまい、水が血で赤くなりました。また、「バーン！ バーン！」と、音がすると、ガンの群れは、ぱっと芦の中から飛び立ち、つづいて、またもや鉄砲の音がして、大じかけな猟が始まったということである。――まず、この「場面」は、多くの場合、様々な「絵本やアニメ」その他などでは、省略されることも多いかと思うが、それは、やはり小さな子供たちに見せたり読み聞かせたりするのは余りに「残酷過ぎる」からではないかと思うが、しかし、現実には今も行なわれているものであり、銃を持った猟師たちは、その沼を取りまいていて、なかには芦の上に伸びている木の枝に登っている人も二三人ありました。そして、青い煙が雲のように、うす暗い木々のあいだをぬって、遠く水の上までたなびいていました。

これは、もちろん、狩猟が解禁されて、大じかけな「ガンカモ」猟が始まったということであり、空から落ちて来るガンをめざして、沼の中に猟犬がピシャ！ ピシャ！ と、入って来て、芦やスゲが四方へなびきました。可哀そうに、アヒルの子にとつてこんな恐ろしいことはなく、びっくりして、頭を羽の下にかくそうと、うしろへふりむいたとたんに、目の前におそろしく大きな犬が立っていて、舌はだらりと口のそとにたれ、目は気味のわるいほど光っていました。鼻づらをぐつとアヒルの子のほうへ寄せて、鋭い歯をむきました。が、ピシャ！ ピシャ！ と、再び、むこうへ行ってしまいました。アヒルの子は、そのままにして。――「……ああ、よかった！」と、アヒルの子は、ほっとため息をつき、「……僕があんまりみつともないんで、犬までがかみつかないんだ」と。(もちろん、ひよ鳥には用がないからであり)、そのまま、アヒルの子はじつとしていました。その間も、散弾が芦の中をざわめかし、ひっきりなしに鉄砲の音がしていました。

そして、昼もだいぶ過ぎたころ、やっと静かになりました。それでもまだ、この哀れなひよこは起きあがる勇気が出ませんでした。それからまた、かなり時間がたって、ようやくあたりを見まわして、できるだけいそいで、沼の外へ逃げ出しました。それから、畑や草原を越えて、どんどん走って行くうちに、ひどい風が吹いてきたものですから、思うように走ることができませんでした。――さて、みにくいアヒルの子は、例の「鳥飼場」から居ても立っても居られずに逃げ出して、ずんずん先へ走って行くと、やがて、野ガモの棲んでいる大きな沼にやって来て、そこで二日間過ごすことになるが、その翌朝、そこへ灰色ガンが、正しくは雄のガンが二羽飛んで来て、その二羽のガンとは友だちになれそうな雰囲気にもなったが、その時、「バーン！ バーン！」と、空で音がして、二羽のガンは芦の中へ落っこちて死んでしまう。そのような大じかけな「ガンカモ」猟は、昼もだいぶ過ぎたころ、やっと静かになるが、それからかなり時間が経ってから、ようやくふるえていたアヒルの子も、できるだけ急いで、沼の外へ逃げ出し、それから畑や草原を越えて、どんどん走って行くうちに、ひどい風が吹いてきて、思うように走ることができなくなるが、夕方になって、やっと一軒のみずぼらしい小さな百姓家に辿り着くのでした。

夕方になって、とある一軒のみずぼらしい小さな百姓家にたどりつきました。その家は見るも哀れなありさまで、自分でもどっちへ倒れようか、わからない。そこで、とにかくこうして立っているというふうでした。ひどい風がアヒルの子のまわりをピューピューと吹きまくるので、倒れないためには、風にむかってしっぽをつっかい棒にしなければなりませんでした。ところが、風はますますひどくなるばかりでした。その時、ふと、入り口の戸が蝶番が一つはずれて、ななめになっているのに気がつきました。どうやら、そのすきまから、部屋の中へはいって行けそうでした。そこで、さっそくそうしました。

この家には、一人のおばあさんが、ネコとニワトリといっしょに住んでいました。おばあさんはこのネコを「息子ちゃん」と呼んでいました。息子ちゃんは背中を丸くしたり、のどをごろごろ鳴らしたりすることができました。また、火花を散らすこともできました。もっとも、それには、ネコの毛を、さかさにこすってやらなければなりませんけれどね。ニワトリはとても小さな短い脚をしていましたので、「短か脚のクックちゃん」と呼ばれていました。このニワトリは、よい卵をうむものですから、おばあさんは自分の子のように可愛がっていました。

朝になりますと、見えないアヒルの子は、すぐ見つかってしまいました。ネコはのどをごろごろ鳴らし、ニワトリはクックと言いはじめました。「……どうしたっていうんだね?」、おばあさんはこう言つて、あたりを見まわしました。ところが、おばあさんは目がよく見えないものですから、アヒルの子を、どこからか迷ってきた、太ったアヒルだと思いました。「……こりや、とんだ拾い物じゃ!」と、おばあさんは言いました。「……これからは、アヒルの卵も食べられるというもんじゃ。どうぞ、雄のアヒルでなきやよいがな。まあ、しばらく飼ってみるとしよう」。(本文)

さて、夕方になって、とある一軒のみずぼらしい小さな百姓家に辿り着くが、その家を見るも哀れな有り様で、自分でもどっちへ倒れようかわからないので、とにかくこうして立っているというふうでした。ひどい風がアヒルの子のまわりをピューピューと吹きまくるので、倒れないためには、風に向かってしっぽをつっかい棒にしなければなりません。風はますますひどくなるばかりでした。その時、ふと入り口の戸が蝶番が一つはずれて、ななめになっているのに気がつき、どうやらそのすき間から部屋の中へはいって行けそうでしたので、さっそくそうしましたとある。――まず、一軒の小さな百姓家に何とか辿り着けたこと、しかも、その入り口の戸の蝶番が一つ外れてななめになっていたので、そのすき間から部屋の中へも入ることが出来たことは、ひどい風に難儀していたアヒルの子にとつては何よりも幸いなことであり、それによって、まさに吹き荒ぶ「ひどい風」から自分の身体を守ることができたのである。――それは、例えば、荒れ狂った山などで遭難した時に、何とか「山小屋」へと辿り着ければ、それだけでも最低限、荒れ狂う「雨風を凌ぐこと」はでき得るのであり、あとは、その「山小屋」に何が備わっているのか、また、自分(たち)の「リックサック」の中に何が入っているのかによつても、大きく変わるが、しかし、「山小屋」まで辿り着ければ、多くの場合、何とかなるのではないかと思

*

*

さて、この家には、一人のおばあさんが、ネコとニワトリと一緒に住んでいて、おばあさんは、ネコを「息子ちゃん」と呼んでいたとある。——だとすれば、そのネコは、雄のネコであり、しかも「息子ちゃん」と呼ぶくらいであれば、まさに「息子」のように可愛がっていたのであり、その息子ちゃんは、背中を丸くしたり、のどをごろごろ鳴らしたり、また、火花を散らすこともでき、それには、ネコの毛を逆さにこすってやらなければなりませんとある。——例えば、ネコが本気で怒った時、その全身の毛を「総立ち」させることがあるが、それは、自分の身体を少しでも大きく見せて、相手を威嚇するためのものであり、一方、ニワトリは、とても小さな短い脚をしていたので、「短か脚のクックちゃん」と呼ばれていて、そのニワトリは、よい卵を産むものですから、おばあさんは自分の子のように可愛がっていましたとある。——つまり、一人暮らしのおばあさんにとっては、このネコとニワトリの存在は、まさに「かけがいのない家族」（つまり「息子と娘」）であり、よき「話し相手」でもあったということである。

さて、朝になると、見なれないアヒルの子は、すぐ見つかってしまい、ネコはのどをごろごろ鳴らし、ニワトリは、クックと言い始めたので、「……どうしたっていうんだね？」と、おばあさんはこう言って、あたりを見まわしましたが、おばあさんは目がよく見えないうちから、アヒルの子をどこからか迷ってきた太ったアヒルだと思ひ込み、「……こりゃ、とんだ拾い物じゃ！」と、おばあさんは言い、「……これからは、アヒルの卵も食べられるというもんじゃ。どうぞ、雄のアヒルでなきゃよいがな。まあ、しばらく飼ってみるとしよう」ということになり、その結果、アヒルの子は、このおばあさんの家で「ネコとニワトリ」と一緒に住むことになるのである。

十二、ネコとニワトリとアヒルの子

こうして、アヒルの子は、三週間、ために飼われることになりました。けれども、もちろん、卵は産みませんでした。——さて、この家では、ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さんでした。そして、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言っています。それというのも、自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分だと思っていたからです。アヒルの子は、それとはべつの考え方もあるように思いましたが、ニワトリには、それが我慢できませんでした。「……おまえさん、卵を産むことができて？」と、ニワトリがたずねました。すると、「いいえ！」と答えるので、「……そう。じゃ、黙っていたらどう！」と。今度は、ネコが言いました。「……君は背中を丸くしたり、のどをごろごろ言わせたり、それから、火花を散らしたりできるかね？」と聞くと、「いいえ！」と答える。「……そう。じゃ、りこうな人たちが話をしている時は、意見をさしひかえることだなあ！」と。そこで、アヒルの子はすみっこに小さくなって、くよくよしていました。そうしていると、思いだされるのは、すがすがしい空気と、お日様の光のことでした。そして、むやみと水の上を泳ぎまわりたい、不思議な気持ちになるのです。とうとう、がまんがでなくなると、そのことをニワトリのおくさんにうちあげました。（本文）

*

*

これは、非常に面白い場面であり、それは、次のようなことである。——つまり、おばあさんは、人間であり、ネコは、哺乳類であり、ニワトリとアヒルの子は、もちろん、鳥

類であるが、ニワトリは、野生の「赤色野鶏」（ニワトリの先祖）を飼いならして「家禽化」（人間の生活に役立つよう品種改良して飼育したもの）であり、その「卵や肉その他」などを利用してゐるものであるが、それは、アヒルの場合も全く同じことではあるが、ところが、この主人公の「アヒルの子」というのは、実は「白鳥の子」であつて、それゆえ、「家禽化」したニワトリとは違って、いわば「野生の血」が流れてゐるのであり、だからこそ、人工的な「鳥飼場」を逃げ出して、ここまで来てゐるのであり、それは、この「アヒルの子」の中に流れてゐる「野生の血」がそうさせてゐるのである。（もちろん、みんなからいじめられるということも直接的な大きな要因ではあるが……）

まず、おばあさんは、アヒルの子を三週間ために飼うことになるが、それは、「アヒルの卵」が食べられるかも知れないというおばあさんの「価値観」からであり、また、ネコは、「……君は背中を丸くしたり、のどをごろごろ言わせたり、それから、火花を散らしたりできるかね？」と聞いてゐるが、これは、このネコの「自慢」であり「価値観」でもあり、また、ニワトリは、「……おまえさん、卵を産むことができて？」と聞くが、これは、ニワトリの何よりの「自慢」であり「価値観」にもなつてゐるものである。ところが、アヒルの子は、それらとはまた違って、「……思い出されるのは、すがすがしい空気と、お日様の光のことでした。そして、むやみと水の上を泳ぎまわりたい、不思議な気持ちになるのでした」とあるが、これこそは、まさにこの「アヒルの子」の中に流れてゐる「野生の血」が内からそうつき動かしてゐるのであり、もしふつうの「家禽化」した「アヒルの子」であつたら、そこまでの「強い衝動」はなかつたに違ひないのである。

ところで、この家では、ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さんでした。そして、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言つてゐました。それというのも、自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分だと思つてゐたからです、とある。——まず、ネコは、オスであり、ニワトリは、メスである。それゆえ、「……ネコが旦那さんで、ニワトリは奥さん」であるのは、ごく自然で最なことであり、しかも、非常に仲の良い「ネコとニワトリ」であつたので、「……自分たちはめいめい半分だ、それも、一番よい半分」（つまり「ベストハーフ」であると思つてゐたとしても、何も不思議なことではない。ただ、問題があるとすれば、それは、この「ネコとニワトリ」の「見てゐる世界」は余りにも「狭いもの」であるが、しかし、この「ネコとニワトリ」たちにとつては自分たちが「見てゐる世界」がすべてであり、また、そこでの「価値観」こそ絶対であると思ひ込んでゐるために、いつも口癖のように、「……われわれと世界！」と言つてゐるのであり、ところが、アヒルの子（野生の白鳥の子）にしてみれば、「……それは別の考え方もあるように思いましたが、ニワトリには、それが我慢できませんでした」となるのである。

十三、ニワトリとアヒルの子の考え方の違い

「……まあ、おまえさん、何を言い出すの？」と、ニワトリは言いました。「……なんにもすることがないもんだから、そんなばかげた考えをおこすんだわ。卵をうむとか、のどでも鳴らしてごらん！ そんなばかげた気まぐれは、どこかへ消えてしまうから。」「……でも、水の上を泳ぐのは、とてもすてきなんです！」と、アヒルの子は言いました。「……頭から水をかぶったり、水の底へもぐったりするのは、そりゃ気持ちがいいんです！」

と。すると、「……へえ、さぞかし気持ちがいいことでしょうよ！」と、ニワトリは言い
ました。「……おまえさんは気が狂ったんだわ！ ネコの旦那だんなさんにきいてごらん！ あ
の人は、わたしの知っている一番りこうな人だからね。あなたは、水の上を泳いだり、水
の底へもぐるのが好きですか？ わたしは、自分のことは、言いたかないわ。――
わたしたちのご主人の、あのおばあさんにもきいてごらん。世界じゅうで、あのおばあさ
んより賢い人はいないんだよ！ おまえさん、いったい、あのおばあさんが泳いだり、水
を頭からかぶったりしたくなるでも思うの？」。(本文)

*

*

さて、ニワトリは、「……まあ、おまえさん、何を言い出すの？」と言い、「……なん
にもすることがないもんだから、そんなばかげた考えをおこすんだわ。卵を産むとか、の
どでも鳴らしてごらん！ そんなばかげた気まぐれは、どこかへ消えてしまおうから」と言
うと、アヒルの子は、「……でも、水の上を泳ぐのは、とてもすてきなんです！」「……
頭から水をかぶったり、水の底へもぐったりするのは、そりゃ気持ちがいいんです！」と
言うのであった。――これは、殆どいつも「地上生活」をしているニワトリと、主に「水
上生活」をしている「アヒルの子」(実は野生の白鳥の子)との「決定的な違い」であり、
この「意識の違い」は、まさに「生態」(生活環境の違い)から生じて来るものであり、
どうにも埋めようのないものであるが、それゆえ、ニワトリとしては、「……へえ、さぞ
かし気持ちがいいことでしょうよ！」と言い、「……おまえさんは気が狂ったんだわ！
ネコの旦那だんなさんに聞いてごらん！ あの方は、わたしの知っている一番りこうな人だから
ね。あなたは、水の上を泳いだり、水の底へもぐるのが好きですか？ わたしは、
自分のことは、言いたかないわ。――わたしたちのご主人の、あのおばあさんにも聞いて
ごらん。世界中で、あのおばあさんより賢い人はいないんだよ！ おまえさん、いったい、
あのおばあさんが泳いだり、水を頭からかぶったりしたくなるでも思うの？」と言うの
であるが、これは、この「ニワトリ」の見ている世界が、まさに「おばあさんとネコと自
分」その他というような、極めて「狭い範囲」になっているからである。

十四、みにくいアヒルの子の言い分

「……あなたがたには、僕の言うことが、おわかりにならないんです」と、アヒルの子
は言いました。「……ふん、わたしたちに、おまえさんの言うことがわからないって？
じゃ、いったい、だれにわかるっていうの？ おまえさん、よもや、ネコの旦那だんなさんや、
あのおばあさんより、自分のほうがりこうだ、なんていうんじゃないだろうね。わたしは
ともかくとして、子供のくせに、しゃれたことをお言いでないよ！ それよりか、ひと
のしてくれた親切を神様にお礼を言うがいいよ。こうしておまえさんは、暖かい部屋にい
れてもらって、わたしたちとつきあって、いろんなことをおぼえられたじゃないの。そ
れなのに、おまえさんは、まぬけだよ！ おまえさんなんかのおつきあいは、まっぴら
だわ！ ほんとだよ。わたしは、おまえさんのために思えばこそ、こんな面白くもないこ
とを言うのさ。これが、ほんとうのお友だちというものだよ。ね。だから、卵をうむとか、
のどをごろごろ鳴らして、火花を散らす工夫をすることだよ！」「……でも、僕は、や
っぱり外の広い世の中に出てみたい気がするんです」と、アヒルの子はいいました。「…

…そう、じゃ、かってにするといいわ！」と、ニワトリは言いました。(本文)

さて、アヒルの子は、「……あなたがたには、僕の言うことが、おわかりにならないです」と言うと、ニワトリは、「……ふん、わたしたちに、おまえさんの言うことがわからないって？　じゃ、いったい、だれにわかるっていうの？　おまえさん、よもや、ネコの旦那さんや、あのおばあさんより、自分のほうがりこうだ、なんていうんじゃないだろうね。わたしはともかくとしてさ。子供のくせに、しゃれたことをお言いでないよ！　それよりか、ひとのしてくれた親切を神様にお礼を言うがいいよ。こうしておまえさんは、暖かい部屋にいられてもらってさ、わたしたちとつきあって、いろんなことをおぼえられたじゃないの。それなのに、おまえさんは、まぬけだよ！　おまえさんなんかとおつきあいは、まっぴらだわ！　ほんとだよ。わたしは、おまえさんのためにを思えばこそ、こんな面白くもないことを言うのさ。これが、ほんとうのお友だちというものだよ。ね。だから、卵を産むとか、のどをごろごろ鳴らして、火花を散らす工夫をすることだわ！」と言う。これは、おばあさんの家(おばあさんとネコとニワトリ)と一緒に仲良く暮らして行くには、まさにニワトリの「言う通り」であるが、しかし、アヒルの子は、実は「野生の白鳥の子」であるがために、彼らの世界の中で生きて行くには、そこは「余りにも狭過ぎる」のであり、それゆえ、アヒルの子は、「……でも、僕は、やっぱり外の広い世の中に出て、みたい気がするんです」となるが、これは、まさにアヒルの子(実は野生の白鳥の子)の「野生の血」がそう言わせているのであり、一方、ニワトリは、「……そう、じゃ、かってにするといいわ！」と、言うのでした。——この「二羽の言い分」は、結局、どこまで行っても平行線であるし、かなく、それゆえ、結果として、アヒルの子は、おばあさんの家を出ていくことになるのである。

十五、違う場所に……

こうして、アヒルの子は出て行きました。そして、水の上を泳いだり、水の底へもぐったりしました。けれども、姿がみにくいばかりに、どの動物からも、相手にされませんでした。——そのうちに秋になりました。森の木の色は、黄色くなり、茶色になりました。そして、強い風に乗せられて、くるくると舞いあがりまわりました。空はいかにもさむざむとしいました。雲は、あられや雪をふくんで、どんよりとたれさがっていました。生垣の上にはカラスがとまって、いかにも寒そうに「カーカー！」と鳴いていました。ほんとに、思ってみるだけでも、寒くてぶるぶる震えそうです。可哀そうに、アヒルの子も、いい目にはあいませんでした。(本文)

さて、おばあさんの家を出て、アヒルの子は、ひとり、水の上を泳いだり、水の底へもぐったりしましたが、姿がみにくいばかりに、どの動物からも相手にされませんでしたとある。(これは、いろいろ努力してみたが、結局、誰からも評価されなかったということかも知れない)。そして、季節は、秋となり、晩秋となり、そして、冬へとなっていくが、これは、本文では「時間の経過」をまさに「自然の風景の変化」で表現しているのであり、それは、——そのうちに秋になり、森の木の葉は、黄色くなり、茶色になり、そして、強

い風に乗せられて、くるくると舞い上がりました。空はいかにもさむぎむととしていて、雲は、あられや雪をふくんで、どんよりとたれ下がっていました。生垣いけがきの上にはカラスが止まって、いかにも寒そうに「カーカー！」と鳴いていました。ほんとに、思ってみるだけでも、寒くてぶるぶる震えそうです。可哀そうに、アヒルの子は、この間かん、いい目に会うことは一度もなかったのです。ちなみに、作者（アンデルセン）が世に出るのは、三十歳の頃の、有名な『即興詩人』からであり、それまでは、いわば「みにくいアヒルの子」のような時期を過ごしていたのかも知れない。

十六、白鳥との出逢い……

ある夕方、お日様がそれははなやかに沈みますと、アヒルの子が今までに見たこともないような美しい大きな鳥の群れが、茂みの中から飛びたちました。それらの鳥は、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をしていました。それは白鳥の群れだったのです。白鳥たちは不思議な叫び声をあげ、美しい大きな翼をひろげて、寒い土地から暖かい国へと、大海原をさして飛んで行くところでした。白鳥たちは高く高く空に舞いあがりました。みにくいアヒルの子は、言うに言われぬ不思議な気持ちになりました。そして、水の中で、車の輪のようにぐるぐるまわりながら、はるかな空を飛んで行く白鳥のほうへ首をさしおいて、自分でもびびりくりするような、高い、いつもとちがった、叫び声をあげました。ああ、あの美しい鳥、あの幸福な鳥を、どうして、忘れることができません！ 白鳥の姿が見えなくなると、すぐ、水の底へもぐりました。そして、再び水の上に浮かび上がってきた時は、まるで気が狂いそうでした。アヒルの子は、あの鳥がなんとという鳥なのか、また、どこへ飛んでいったのかも知りませんでした。けれども、いままでの何よりも、あの鳥が慕わしくなりました。うらやましいなどという気持ちはちつともありませんでした。あんな優美な姿になろうなんて、どうしてのぞむことができましょう。せめて、アヒルたちの仲間に入れてくれさえしたら、どんなにうれしかしれないのに！——ほんとうに、可哀そうなみにくいアヒルの子でした。（本文）

* さて、ある夕方、お日様がそれははなやかに沈みますと、アヒルの子が今までに見たこともないような美しい大きな鳥の群れが、茂みの中から飛び立ちました。それらの鳥は、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をしていました。それは白鳥の群れだったので、白鳥たちは不思議な叫び声を上げ、美しい大きな翼をひろげて、寒い土地から暖かい国へと、大海原をさして飛んで行くところでした。白鳥たちは高く高く空に舞い上がりました。みにくいアヒルの子は、言うに言われぬ不思議な気持ちになりましたとある。

* これは、非常に「大事な場面」であり、例えば、若い時には、誰でも、多かれ少なかれ、何をどうしてよいかよくわからない時期を過ごすものであり、それゆえ、この主人公のアヒルの子のように、あちらこちらとあてなくさまようことになるが、しかし、その人の「心の中」では、必ず、何かを求めているものであり、それでは、その「何か」とは、一体、何かと敢えて問えば、それは、その「人の心」を、うそ偽りなく、真ほんとうに「深く満たしてくれるもの」であり、たとえそれが「何か」はよくわからなくても、ある日、ある時、こ

の主人公のアヒルの子のように、思いもかけないような感じで、輝くばかりにまっ白で、長いしなやかな首をした白鳥の群れに出遭うことよって、言うに言われぬ不思議な気持ちに襲われるが、それは、まさにその「人の心」が、知らず識らずうちに、探し求めていたものについてにばったりとめぐり遭った時の「強烈な衝撃」であり、「……ああ、自分はずっと探し求めていたものは、まさにこれだったのだ！」というような感じで、それこそ、文字通り、「運命的な出遭い」となっていくものであり、例えば、作者（アンデルセン）にしても、物語（文章）を書くという「作家」（童話作家）になることよって、彼の「道」（人生）は、まさに大きく拓けて行ったということである。

*

*

さて、アヒルの子は、水の中で「車の輪」のようにぐるぐるまわりながら、遙かな空を飛んで行く白鳥のほうへ首をさしのべて、自分でもびっくりするような、高い、いつもと違った、叫び声を上げました。ああ、あの美しい鳥、あの幸福な鳥を、どうして忘れることができません！ 白鳥の姿が見えなくなると、すぐ水の底へもぐりました。そして、再び、水の上に浮かび上がってきた時は、まるで気が狂いそうでした。アヒルの子は、あの鳥がなんとという鳥なのか、また、どこへ飛んでいったのかも知りませんでした。けれども、今までの何よりも、あの鳥が慕わしくなりましたとある。——これは、まさに「……探し求めていたものについてにばったりとめぐり遭った時」の「強烈な衝撃」であるが、しかし、このアヒルの子には、まだそれがよくわからないために、「……うらやましいなどという気持ちはちつともありませんでした。あんな優美な姿になろうなんて、どうしてのぞむことができましょう。せめて、アヒルたちの仲間に入れてくれさえしたら、どんなにうれしいかしれないのに！」と思うばかりであり、それを思い出しては、作者（アンデルセン）は、——ほんとうに、可哀そうなみにくいアヒルの子でした、と回想しているのである。

十七、湖の表面には氷が張って……

さて、いよいよ、冬もほんとうに寒く寒くなってきました。アヒルの子は、水のおもてがすっかり凍ってしまわないように、たえず泳ぎまわっていななければなりません。けれども、一晩ごとに、泳ぎまわる場所が狭く小さくなって行きました。張りつめた氷の表面が、ミシミシ音を立てるほどになりました。アヒルの子は、水にとじこめられてしまわないように、絶えず足を動かしていなければなりません。けれども、とうとうしまいに、疲れきって、動けなくなり、じつと氷の中に凍りついてしまいました。

次の朝早く、一人のお百姓が通りかかりました。アヒルの子を見ますと、すぐそこへ行って、木靴で氷を砕いて、家のおかみさんのところへ持って帰りました。そこで、アヒルの子は生きかえりました。

お百姓の子供たちは、いっしょに遊ぶうとしましたが、アヒルの子は、またいじめられるものと思つて、びっくりして、ついミルク壺の中へとびこんでしまいました。ミルクが部屋じゅうにとびちりました。おかみさんはとんきような声をあげて、両手を高くあげて打ちました。アヒルの子は、こんどはそれにびっくりして、バターの入っているたるの中へとびこみました。それから麦粉の桶の中へとびこんで、また、とびあがりました。いや

はや、たいへんなことになりました！ おかみさんは金切り声をあげて、火ばさみで、打ってかかり、子供たちは、アヒルの子をつかまえようとして、はちあわせをして、笑うやらわめくやら、いやもう、その騒ぎといったらありません。——ところが、運よく、戸があいていましたので、アヒルの子は、そこから逃げだして、たったいま降ったばかりの雪の中を茂みの中へとびこみました。——そして、そこで、冬眠でもしているように、じっとしていました。(本文)

*

*

さて、いよいよ冬もほんとうに寒く寒くなってきました。アヒルの子は、水のおもてがすっかり凍ってしまわないように、たえず泳ぎまわっていなければなりませんでした。けれども、一晩ごとに泳ぎまわる場所が狭く小さくなって行きました。張りつめた氷の表面が、ミシミシ音を立てるほどになりました。アヒルの子は、水に閉じ込められてしまわないように、絶えず足を動かしていなければなりませんでした。けれども、とうとうしまいに、疲れきって動けなくなり、じっと氷の中に凍りついてしまいましたとある。

*

*

例えば、シベリアにいるオオハクチョウやコハクチョウたちは、なぜ、日本へとやって来て、越冬するのかと問えば、それは、まさに「エサ」のためであり、冬のシベリアは、それこそ、「雪と氷の世界」に深く覆おほわれてしまう。そこで、はるばる海を渡る約四千米(約二週間)の長旅をして、日本へと飛来し、その辿り着いた「湖や沼」その他などで、基本は「水草や藻」(好物は「マコモの茎や根」など)を食べていますが、エサが不足すれば、田んぼなどで「落ち穂や稲の切り株の茎や根」などを食べています。もちろん、人間がエサをやる場合もあるが、それは、主に「……パンくず、トウモロコシ、麦類、その他」の穀物がまかれていた場合が多いかと思う。

さて、越冬したハクチョウたちは、三月にはシベリアへ向け日本を飛び立ち、四月には約二週間の旅をしてシベリアへと到着し、五月には巢作りを始めて、約三〜六個の卵を産み、その卵は、約三十〜四十日を経て、六月には孵化(ひな)になるが、そのひなたちは、親たちと一緒に過ごして成長し、そして、三か月後の九月には、その幼鳥たちも、飛ぶことが出来るようになり、シベリアの湖水みづうみが凍る九月から十月には、今度は、その子たちを連れて、日本へと再びやって来るのである。——ちなみに、オオハクチョウの寿命は、約十五年、一方、コハクチョウの寿命は、約二十年となっている。

*

*

さて、本文では、アヒルの子は、水に閉じ込められないように、絶えず足を動かしていなければならなかったが、とうとうしまいに疲れきって動けなくなり、じっと氷の中に凍りついてしまいました。——しかし、次の朝早く、一人のお百姓がそこを通りかかり、アヒルの子を見ると、すぐそこへ行って、木靴きくつで氷を砕いて、家のおかみさんのところへ持って帰ったので、アヒルの子は生きかえりましたとある。

これは、凍りついて「身動きできない状態」から、木靴きくつで氷を砕いて、家のおかみさんのところへ持って帰ったということ、これは、まさに一人のお百姓さんに「命を救ってもらった」ということであり、そして、そのお百姓さんの子供たちは、そのアヒルの子と一緒に遊ぼうとしたが、アヒルの子は、またいじめられるものと思つて、びっくりして、ついミルク壺つぼの中へ飛び込んでしまい、ミルクが部屋へやじゅうに飛び散り、おかみさんはと

んきような声を上げて、両手を高く上げて打ちましたが、アヒルの子は、今度はそれにびつくりして、バターの入っているたるの中へ飛び込んでしまい、それから麦粉この桶おけの中へ飛び込んで、また、飛び上がりました。いやはや、大変なことになり、おかみさんは金切り声を上げて、火ばさみで打ってかかり、子供たちは、アヒルの子を捕つかまえようとしてはち合わせをして、笑うやらわめくやら、いやもうその騒ぎといたらありませんでした。

これは、「アニメ」などでもよく描かれる、まさに「ドタバタ劇」の一面であるが、それは、まず、アヒルの子は、子供たちにいじめられると思って、びつくりして、「……ついミルク壺つぼの中へ飛び込んでしまうと、ミルクが部屋へや中に飛び散り、それを見た、おかみさんはとんきような声を上げて、両手を上げて打ちますが、アヒルの子は、今度はそれに驚いて、バターの入っているたるの中へ飛び込み、それから麦粉この桶おけの中へも飛び込むという、次から次へとドタバタが続くことになるが、しかし、運よく戸が開いていたので、アヒルの子は、そこから逃げ出して、たったいま降ったばかりの雪の中を茂みの中へ飛び込み、そして、そこで、冬眠ふゆねでもしているように、じっとしてましたとある。——つまり、アヒルの子は、どこへ行っても「うまくいかない」ので、結局、冬眠ふゆねでもしているようにじっとしているしか仕方がなかったのである。ところで、こういう時期は、誰にも「長い人生」の中ではいくらでもあることであり、それゆえ、大事なことは、その時に何もしないのではなく、それでは何年何十年経つても何も変わらないのであり、何よりも大事なことは、自分に合った「場所と目標」を見つけて、いま自分にできる努力を何年も積み重ねて行くことによって、その人の「道」（人生）も、おのずと拓ひらけていくのである。

十八、寒い冬から暖かな春へと……

さて、このきびしい冬のあいだ、アヒルの子が堪えしのばなければならなかった苦しみや悲しみを、のこらずお話しすることは、あまりにも悲しいことではないでしょうか。——アヒルの子は沼の中の芦あしのあいだにじっとしてました。そのうちに、いつしかお日様が、再び暖かに輝きはじめました。ヒバリが歌をうたいはじめました。——美しい春になったのです。——その時、アヒルの子はふと、翼を飛ばしてみたいと思いました。すると、それは前よりもつよく空気を打って、からだがぐつと空に浮かびました。そして、わけがわからないうちに、とある大きな庭の中に来ていました。そこにはリンゴの木が花ざかりで、リラがよいにおいにかおっていました。その長い緑の枝は、静かにうねって流れている堀割の上にたれていました。ああ、なんと美しい、さわやかな春の景色でしょう！ その時、まっすぐ前の茂みの中から、三羽の美しいまっ白な白鳥が出てきました。白鳥たちは、翼を、さあつとなびかせて、水の上をすべるように泳いできました。アヒルの子は、このりっぱな鳥に見おぼえがありました。そして、不思議な悲しい気持ちにあそわれました。(本文)

*

*

さて、この厳きびしい冬の間、アヒルの子が堪え忍ばねばならなかった「苦しみや悲しみ」などを残らずお話しすることは、あまりにも悲しいことではないでしょうか。——これは、作者（アンデルセン自身）の「感想」（感慨）でもあるのだろうか、アヒルの子は、沼の中の芦あしの間にじっとしてました。そのうちに、いつしかお日様が再び暖かに輝きはじめ、ヒバリが歌をうたい始める「美しい春」になったのです。——さて、長い冬から、いよいよ

よ「美しい春」を迎えることになるが、もちろん、それに気づくのは、いつしかお日様が再び暖かに輝きはじめ、ヒバリが歌をうたい始めるといふ「自然の変化」からではあるが、しかし、アヒルの子自身、まさに「自分自身の変化」にも気づくようになるのであり、それは、「……その時、アヒルの子は、ふと翼を飛ばしてみました」とある。これは、前よりもつよく空気を打って、からだがぐっと空に浮かびました」とある。これは、自分でも気づかないうちに、自分自身が確実に成長していったということであり、そして、わけもわからぬうちに（これはアヒルの子なのに空に舞い上がって）、とある大きな庭の中に来ていました。そこにはリンゴの木が花ざかりで、リラがよい匂いに香かおっていました。その長い緑の枝は、静かにうねって流れている堀割の上に垂れていました。ああ、なんと美しい、さわやかな春の景色でしょう！ これは、まさに「春の美しい自然の景色」をながめてそう思う一方、——その時、まっすぐ前の茂みの中から、三羽の美しいまっ白な白鳥が出てきました。白鳥たちは、翼を、さあつとなびかせて、水の上をすべるように泳いできました。アヒルの子は、このりっぱな鳥に見覚えがあり、そして、不思議な「悲しい気持ち」に襲われましたとある。——これは、まだ「自分の姿の変化」に気づいていないからであり、自分はまだ「みにくいアヒルの子」だとすっかり思い込んでいるために、りっぱな白鳥を見て、何か近づき難いような「引け目」（劣等感）を感じているのである。

十九、いつしか美しい白鳥の姿に……

「……あのりっぱな堂々とした鳥のところへ飛んで行こう！ だけど、こんなみにくい僕みたいなものが、遠慮なく近づいていったら、殺されてしまうかもしれない。でも、かまわない！ アヒルたちにこづかれたり、ニワトリにつつかれたり、鳥飼いの娘さんにけとばされたり、寒い冬じゅうひどい目にあったりするよりは、いくらましだかしれやしない！」と、こう思って、アヒルの子は水の上に飛んで行って、美しい白鳥たちのほうへ泳いで行きました。白鳥たちはそれを見ると、羽をなびかせて、すうーっとこちらへむかってきました。「……さあ、僕を殺してください！」と、哀れなアヒルの子は言いながら、頭を水の上にたらしめて、死を待っていました。——ところが、すみきった水のおもてに、いったい何がうつって見えたでしょう？ それは、自分自身の姿でした。けれども、それはもう、あのぶかっこのうな灰色の、みんなにいやがられた、みにくいアヒルの子ではなくて、一羽のりっぱな白鳥でした。（本文）

*

*

さて、長く厳きびしい冬の間、ずっとひとり「引き籠こもっていた」アヒルの子は、その余りに長い「孤独や寂さびしさ」などに堪えかねて、もう「どうなつてもいい」と意を決して、まさに「……あのりっぱな堂々とした鳥のところへ飛んで行こう！ だけど、こんなみにくい僕みたいなものが、遠慮なく近づいていたら、殺されてしまうかもしれない。でも、かまわない！ アヒルたちにこづかれたり、ニワトリにつつかれたり、鳥飼いの娘さんにけとばされたり、寒い冬じゅうひどい目にあったりするよりは、いくらましだかしれやしない！」と、こう思って、アヒルの子は水の上に飛んで行って、美しい白鳥たちのほうへ泳いで行きました。一方、白鳥たちは、それを見ると、羽をなびかせて、すうーっとこちらへ向かって来ました。「……さあ、僕を殺してください！」と、哀れなアヒルの子は言

いながら、頭を水の上にとらして、死を待っていました。——さて、この「……さあ、僕を殺してください！」という言葉は、実に「衝撃的な言葉」であるが、これは、まさに「もうどうなってもいい」と意を決して行動しているのである。——ところが、澄みきった水の面に、一体、何が映って見えたでしょう？ それは、自分自身の姿でした。けれども、それはもうあのぶかっこうな灰色の、みんなにいやがられた、みにくいアヒルの子ではなくて、一羽のりっぱな白鳥でした。——これは、たとえ子供の頃は「みにくいアヒルの子」と呼ばれても、本人の努力次第で、いくらでも「美しい白鳥」へと変身することはでき得るということであり、それを実際に実証してくれたのが、まさに「作者」（アンデルセン）自身であったということである。

二十、美しい白鳥の姿となって……

白鳥の卵からかえったものならば、たとえ鳥飼いで生まれようと、それはたいしたことではありません。いままで堪えしのんできた、さまざまな悲しみや苦しみを思うにつけ、今の自分を、心からうれしく感じました。今こそ、自分の幸福を、そして、自分を迎えてくれたあらゆる喜びを、はつきり知ることができました。——大きな白鳥たちは、まわりに寄ってきて、くちばしで羽をなでてくれました。——その時、庭の中へ、小さな子供が二三人はいつてきました。そして、パンや麦粒を水の中へ投げました。そのうちの一番小さい子が、大声で言いました。「……あそこに新しい白鳥がいるよ!」、すると、ほかの子供たちもいっしょにうれしそうな声をあげました。「……ああ、ほんとうね。新しい白鳥が来たわ!」、みんなは手をたたいて踊りまわりました。それから、お父さんやお母さんのところへ駆けて行きました。そしてまた、パンやお菓子が水の中へ投げ込まれました。人々は、「……新しい白鳥が一番きれいだ! 若くて、美しいこと!」と言いました。年下の白鳥たちは、新しい白鳥の前に頭をさげました。

若い白鳥は、すっかり恥ずかしくなって、どうしてよいかわからないで、頭を翼の下にかくしました。白鳥はあまりにも幸福でした。けれど、すこしも、たかぶるようなことはしませんでした。なぜなら、心の素直なものは、けっして、たかぶるようなことはしないからです。白鳥は、今までどんなに追いかけられたり、ばかにされたりしたかを思い出しました。それが今は、みんなに、すべての美しい鳥のうちでも一番美しい、と言われるのを聞くようになったのです。リラは、水の上の白鳥のほうへ枝を低くたれました。お日様は暖かく、そして、やさしく照っていました。若い白鳥は、羽をさあとなびかせて、すんなりとした首をあげました。そして心から喜びの声を上げました。「……僕が、みにくいアヒルの子だった時は、このような多くの幸福は夢にも思わなかった!」と思うのであった。(完)

*

*

これは、もう「白鳥になってからの作者」（アンデルセン）の、まさに素直な「告白」文になっているかと思うが、まず、「……白鳥の卵からかえったものならば、たとえ鳥飼いで生まれようと、それはたいしたことではありません」とある。——さて、ここに「白鳥の卵」とあるが、それは、一体、何かと問えば、それは、人間として「善き性格や資質或いは優れた才能や天分」その他などを内に宿して持っていれば、たとえ「鳥飼いで」（あ

まり恵まれないような環境)で生まれ育っても、それはたいしたことではなくて、大事なのは、自分に適した「場所と目標」とを見つけて、そこで必要な努力を積み重ねれば、道はいくらでも拓けていくということであり、今まで堪え忍んできた、様々な「悲しみや苦しみ」などを思うにつけ、今の自分を心からうれしく感じました。今こそ、自分の幸福を、そして、自分を迎えてくれたあらゆる喜びをはっきり知ることができました。——大きな白鳥たちは、まわりに寄ってきて、くちばしで羽をなでてくれました。——その時、庭の中へ、小さな子供が二三人はいつてきました。そして、パンや麦粒むぎつぶを水の中へ投げました。そのうちの一番小さい子が、大声で言いました。「……あそこに新しい白鳥がいるよ!」、すると、ほかの子供たちも一緒にうれしそうな声を上げました。「……ああ、ほんとうね。新しい白鳥が来たわ!」、みんなは手をたたいて踊りまわりました。それから、お父さんやお母さんのところへ駆けて行きました。そしてまた、パンやお菓子が水の中へ投げ込まれました。人々は、「……新しい白鳥が一番きれいだ! 若くて、美しいこと!」と言いました。年下の白鳥たちは、新しい白鳥の前に頭を下げました。——これは、もう「老若男女」から高く評価され、認められ、暖かく迎えられているということである。

若い白鳥は、すっかり恥ずかしくなつて、どうしてよいかわからないで、頭を翼の下に隠しました。白鳥はあまりにも幸福でした。けれど、少しもたかぶるようなことはしませんでした。なぜなら、心の素直なものは、決してたかぶるようなことはしないからです。白鳥は、今までどんなに追いかけられたり、ばかにされたりしたかを思い出しました。それが今は、みんなにすべての美しい鳥のうちでも一番美しい、と言われるのを聞くようになったのです。リラは、水の上の白鳥のほうへ枝を低く垂れました。お日様は暖かく、そして、やさしく照っていました。若い白鳥は、羽をさあつとなびかせて、すんなりとした首を上げました。そして心から喜びの声を上げました。「……僕が、みにくいアヒルの子だった時は、このような多くの幸福は夢にも思わなかった!」と思うのであった。(完結)

*

*

「参考文献」

※底本「アンデルセン童話集一二」大畑末吉訳（「岩波文庫」）